

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

教会学校 教案誌

church school curriculum



あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯。

詩編119編105節

vol. 58

2015年 7~9月

「子どもと親のカテキズム」
に基づく二年サイクル 第1年

【巻頭説教】 神の約束 山中雄一郎

改めて考えるカテキズム教育とは 三川栄二

子どもと親のカテキズムについて(4) 牧田吉和

【教会学校教師のための神学講座】

全生活にわたる感謝 ～十戒を生きる(2) 吉田 隆

【日曜学校・教会学校訪問】 高松教会のご紹介

2015年7～9月カリキュラム（第58号）

—『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第1年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月5日	人生の光	問6	ウ小2, 3
		ヨハネ4:43～54	詩編119:105
	生きておられる神は、聖書を通して今も具体的に導かれる。光の中を歩もう。		
12日	聖書の内容	問7	—
		テモテニ3:15～17	テモテニ3:15, 16
	聖書は、神と信仰生活について記された愛の手紙。福音的に読み、味わおう。		
19日	三位一体の神さま 人格としての神	問8	—
		ヨハネ4:1～26	ヨハネ4:24
	神は人を対話の相手として創造された。神とお話する歩みを深めよう。		
26日	三位一体の神さま 神の属性	問8	—
		ヨハネ4:1～26	ヘブライ13:8
	霊にして、永遠、不変、偏在の生ける唯一の神なくして被造物なし。		
8月2日	唯一の神	問9	ウ小5
		申命記4:32～40	申命記4:35
	まことの神はただおひとり。この神のみを神とする幸いを知ろう。		
9日	偶像礼拝の空しさ	問10	ウ小47, 48
		イザヤ44:9～20	レビ19:4
	偶像を求め、あふれる社会の中で、神の悲しみを思い、真の礼拝を求めよう。		
16日	三位一体・神の本質	問11	—
		マタイ28:16～20	ヨハネ一4:16
	いのちと愛の交わりの内にいます三位の神と交わる至福を求めて生きよう。		
23日	三位一体・神の経綸	問12	ウ告白8:6, 8
		エフェソ1:3～14	テモテニ1:9
	真の神が全存在をもって、人間を救われる。救いの神とその確かさをたたえよう。		
30日	父なる神の本質	問13	子ども11、ウ大10, 11
		マタイ6:25～34	ヨハネ1:18
	キリストの父であるゆえに私たちの父となって下さった主権者をたたえよう。		
9月6日	創造者なる神	問14	ウ小9、ウ大15、ハイデ26
		創世記1:1～5	コリント二4:6
	無から良いものを創造された神の恵みをたたえ、善きものらしく生きよう。		
13日	摂理の神	問15	ウ小11、ハイデ27, 28
		エステル4:1～17	エステル4:14b
	歴史を創造し、支配する神のよき力を信頼し、へこたれず、安心して生きよう。		
20日	父なる神の親心	問16	ウ小11、ハイデ1
		ローマ8:28, 30、 ヘブライ12:5～11	ローマ8:28, 30
	父なる神は、神の子のためにどんなことでも益に変えられる。神のみに頼ろう。		
27日	人間・神のかたち	問17	ウ小10
		創世記1:26～28	詩編8:4, 5
	神のかたちに似せられた自分と他者の尊厳を知り、輝く人間、人生を求めよう。		

も く じ

2015年7・8・9月カリキュラム

まえがき.....	長田 詠喜	4
巻頭説教.....	山中雄一郎	6
改めて考えるカテキズム教育とは？.....	三川 栄二	10
「子どもと親のカテキズムについて」(4).....	牧田 吉和	21
日曜学校・教会学校訪問 高松教会日曜学校のご紹介		
	松田 基教	25
絵本に心を耕されて		
「おひさまのくにへ」.....	望月 鈴子	28
教会学校教師のための神学講座		
全生活に渡る感謝～「十戒」を生きる (2)	吉田 隆	30

聖書黙想・説教展開例・分級展開例..... 35

7月 5日	36
7月12日	42
7月19日	48
7月26日	54
8月 2日	60
8月 9日	66
8月16日	72
8月23日	78
8月30日	84
9月 6日	90
9月13日	96
9月20日	102
9月27日	108

2015年10・11・12月カリキュラム	114
2015年度年間カリキュラム	115
救済史に基づく二年サイクル.....	117
「子どもと親のカテキズム」案内	119
執筆者よりひとこと・あとがき.....	120

まえがき—教案誌に抱く幻

長田詠喜（新所沢教会牧師）

良薬口に苦い教案誌

大会で教会学校教案誌に関わる事になり、私たちの教会でもこの四月から本格的に教会学校教案誌を使い始めました。これまでの他教派の教案誌に比べると、改革派の教案誌は正直まだまだ使いにくいものです。以前の教案は、ワークブックや視覚教材まで揃っていましたが、私たち改革派の教案誌は分級展開例も全クラス揃っておらず、説教も分級も自分たちでゼロから作り上げていかななくてはなりません。私たちの教会は、感謝なことに若いCS教師が多いのですが、逆に教師歴が浅く、週日も多忙な方がほとんどです。これまでは教師たちが交代でメッセージをしていましたが、メッセージは牧師が担当し、各教師は分級に専念することとしました。また教師会で二ヶ月後の月の聖書箇所をまとめて学び、ポイントを掴んで分級の準備が出来るように学びを始めました。馴れるまでは大きな負担かもしれませんが、牧師もCS教師も、良い学びの機会と捉えています。

常に成長しつづける教案誌

この四月から教案誌は、「子どもと親のカテキズム」に基づく二年間のカリキュラムを開始しました。二年間子ども達はしっかりとカテキズムで自分の信仰を養っていく事になります。教師たちも改めてこのカテキズムを学ぶことで自分たちの信仰を再確認することができるでしょう。大会教育委員会では、このカテキズムの解説を出版することを計画しています。どれほどのレベルのものが出来るかは正直心細いのですが、カテキズムとその解説、それに基づく教会教育が構築されます。

また「救済史に基づくカリキュラム」も同時

並行で用いることができるようにいたしました。二年間のカテキズムのカリキュラム終了後には、救済史によるカリキュラムがメインとなる二年間が始まります。今回、サブカリキュラムとして救済史に基づくカリキュラムを準備する中で、過去の教案誌の該当箇所を参照できるように工夫しました。まだ空が多い表ですが、やがてこの表が埋まっていき、どの聖書箇所でも過去の教案誌に黙想と説教を見つけることができるようになるだろうと思います。私たち改革派の教案誌は、どこかで完成してしまうのではなく、常に更新され続けます。執筆される先生方が最新の成果を蓄積することで、CS教師以外の方にもとても役立つ、聖書と教理の包括的で常に新しく更新されるテキストになる筈です。

全信徒による全信徒のための教案誌

大会の教育関係の委員会は、今それぞれに課題をもって、頑張っています。リジョイスによる日々の家庭礼拝、サマーデイズや青年リトリートによる若い世代の育成。願わくはこれらの働きの中心に教会学校教案誌が存在できればと願います。教会学校教案誌が、単に「子どもを対象としたカリキュラム」に留まらず、広い意味での「教会教育」すなわち、全世代の信徒の信仰の成長に資するものとなるように願っています。

現在は、編集側の力の問題もあり、まだ本当に少数の先生方・信徒の方々にしか協力をお願い出来ていません。まだまだ使っていただいている教会も一部に留まっています。もっと多くの教師や信徒の方々に関わっていただき、もっと多くの教会学校で使っていただき、ご意見を

寄せていただけると、十年後二十年後にはとても重厚で使いやすい、改革派の教会教育の礎が出来上がると信じています。

一世代の後、リジョイスと子どもと大人のカテキズム、教会学校教案誌で育った世代が教会を担う姿を幻として見て参りたいと思います。これから2年間、「子どもと親のカテキズム」によるカリキュラムに従って、子どもの教会の

営みがなされてまいります。皆さまのお手元には、すでに新しいカテキズムが届いていることと思います。契約の子らには、ひとり一冊、持たせてあげてくださるようお願いいたします。大人になってからも、自分の古びた「カテキズム」への愛着がわくような祝福された家庭と教会における信仰生活が営まれますようにと心から祈ります。



神の約束

山中雄一郎（東仙台教会協力牧師）

聖書 ガラテヤの信徒への手紙3章15～18節

兄弟たち、分かりやすく説明しましょう。人の作った遺言でさえ、法律的に有効となったら、だれも無効にしたり、それに追加したりはできません。ところで、アブラハムとその子孫に対して約束が告げられましたが、その際、多くの人を指して「子孫たちとに」とは言われず、一人の人を指して「あなたの子孫とに」と言われています。この「子孫」とは、キリストのことです。わたしが言いたいのは、こうです。神によってあらかじめ有効なものと定められた契約を、それから四百三十年後にできた律法が無効にして、その約束を反故にすることはないということです。相続が律法に由来するものなら、もはや、それは約束に由来するものではありません。しかし神は、約束によってアブラハムにその恵みをお与えになったのです。

（子どもたちに）

今日もみんなと一緒に神様を礼拝できてうれしいです。

この前、教会の人からこの写真を貰いました。みんなで一緒に写した写真だね。みんなも貰いましたか。教会ではいろんなときに写真を撮るね。撮るときも楽しいけれども、写真は後になって見ると楽しいことがあるね。

一人の男の子がいました。その男の子はいつもお母さんに叱られてばかりいました。「もっと早くご飯を食べなさい。遅いんだから駄目ね」。「もっとよく勉強しなさい。遊んでばかりで駄目ね」。「もっと妹に優しくしなさい。意地悪で駄目ね」。

いつもいつも叱られるんだね。「ああお母さんは僕が嫌いなんだな。僕だって早くご飯を食べたいけれど、そんなに早く食べれないよ。僕だって勉強したらよいと思うけど、勉強ばかりじゃ疲れちゃうよ。僕だって妹に優しくしたいけれど、妹はわがままだから頭に来るよ。でもこんな僕だからお母さんは嫌いなんだな」。男の子はとても寂しくなりました。もうお母さん

の言うことを聞くのをやめたくて来ました。僕は悪い子になっちゃうかな。男の子は心配になりました。

その男の子がある日、アルバムを見つけました。写真がいっぱい張ってあります。最初の方を見ると、今の写真です。前の方を見ると、もっと小さい頃の写真です。幼稚園の頃の写真がありました。AちゃんやJ君みたいにかっこいい写真です。もっと前の方を見ると4歳のときの写真です。HちゃんやMちゃんみたいに元気な写真です。もっと前を見ると2歳のときの写真です。RちゃんやKちゃんみたいに可愛い写真です。それからもっと前の方を見ると、お母さんに抱っこをされた赤ちゃんのときの写真です。お母さんはとても嬉しそうに笑っていました。男の子も嬉しそうに笑っています。男の子はその写真をお母さんに見せました。お母さんはその写真を見て言いました。「あなたが生まれて本当に嬉しかったよ。抱っこをしていてとても幸せだったよ」。

そうして、お母さんはその時と同じ嬉しい顔で男の子を見て笑いました。男の子はその写真

をずっと見ていて分かりました。「ああお母さんは、僕のこと好きなんだな。この頃、叱られてばかりいたから分からなくなっちゃった。でも、大丈夫、お母さんは僕のこと好きなんだな」。そう分かったら、男の子はとても安心しました。僕は悪い子にならないで大丈夫みたいですぞ。だってお母さんは僕のこと好きなんだからね。男の子はそう思ったんですね。

写真があるといいね。優しいときのお母さんの顔をいつでも見ることができるね。お母さんは僕のこと好きなんだ。いつでも思い出すことができるね。

神様が僕のことを好きなんだ。そのことはどうやって思い出したらよいですか。時々、病気になって苦しいと、神さまが僕のことを好きなんだ、ということを忘れることがあるかも知れないね。時々、悪いことをすると、神様は僕のことを怒っている。こわくなるかも知れないね。でも、神様は僕たちが生まれる前から僕たちのことを大好きだったんだね。神さまのアルバムがあったら、そこに皆のどんな写真があるかね。今日も、昨日も、その前も、神様にご飯を食べられるようにしてくれました。優しい神様ですね。今日も昨日もその前も、神様はきれいな花やきれいな空を見せてくれました。優しい神様ですね。今日も昨日もその前も、神様はお父さんやお母さんやお友だちや、楽しく話ができる人をくれました。優しい神様ですね。

そして、神様のアルバムのもっと前には、イエス様の十字架が張ってあります。私が天国に入ることができるように、神様は一番大切なイエス様を十字架につけてくれました。本当に優しい神様ですね。神さまは僕のことを好きなんだ。そのことをいつも思い出していたら、だれも悪い子にはならないね。どんな時にも皆のことを大好きな神さまを忘れないようにしよう。

(大人たちに)

今、子供たちに話しましたことは、今日の御言葉の中心メッセージです。

一人の男の子が、赤ちゃんのときの自分が母親に愛されていたことを知りました。その時、その男の子は、今も自分は母親に愛されているということを知りました。私たちも、神さまが最初の頃から私を愛しておられたことを知って、自分が神様に愛されていることを知るのです。

今日のパウロの議論の中心はそういうことです。パウロはここで、約束と律法という言葉を使って、このことを説明しています。

約束。それは無条件の救いのことです。これをしたら救われる。あれをしなければ救われない。そういう条件なしの救いです。創世記に最初に神の民となりましたアブラハムのことが出てきます。神様はアブラハムに対して何の条件もつけないで、「あなたとあなたの子孫を祝福しよう」と約束されました。無条件の救い。無条件の愛。それが初めから、神の民に対する神様のお心だったのです。「約束」とはこの神様のお心の現れでした。

ところが、その約束がされてから430年経って、イスラエルの人々はシナイ山で律法を受けました。それは条件付の愛の現われだ。そうイスラエルの人々は理解しました。律法を守るならば愛される。立派な生活をするならば救われる。そういう神様の御心がここに現されている。そう考えたのです。頑張って立派に生きること救われよう。そう考えたのです。

本当は、それは誤解なのですけれども、パウロは今日の御言葉では、それが誤解だということは議論しませんでした。むしろ、約束ではなく律法に神様の本当のお心が現れている、という考え方をパウロはここで問題にしました。「そうではない。神様の本当のお心は約束の内に表れている。そのお心は変わっていない」と教えたのです。

人間の場合には途中で気が変わる、ということがあります。赤ちゃんの時には、いるだけで可愛い、可愛くてたまらない、と思っていたお母さんが、途中から条件付きの愛に変わります。勉強ができなければ子供の存在を喜べない、おけいごをちゃんとやらなければ苛々してしまう。いつも子供に向かって「あなたは駄目だ、頑張りなさい」といい続けている内に、あるがままの子供を愛する心を見失っている。そういうことを親たちは経験します。昔は無条件の愛だったけれども、今は条件付きです。変わってしまうのです。

神様の場合にはそういうことがないのでしょ
うか。最初は無条件の愛だったけれども、律法
を与えてからは条件付きの愛に変わった。そう
いうことはないのでしょうか。

今日の御言葉でパウロは、そういうことは決
してない、ということを論じているんですね。
15節「兄弟たち、分かりやすく説明しましょう。
人の作った遺言でさえ、法律的に有効となつた
ら、だれも無効にしたり、それに追加したりは
できません」。

遺言というものは、遺言した人が死んだ時か
ら有効になります。そして、有効になったらだ
れもそれを無効にできません。追加もできませ
ん。神様の約束はこの遺言と同じだ、決して変
わらない、とパウロは言いたいんですね。

17節「わたしが言いたいのは、こうです。
神によってあらかじめ有効なものと定められた
契約を、それから四百三十年後にできた律法が
無効にして、その約束を反故にすることはない
ということです」。

「契約」と翻訳されている言葉は「遺言」と
翻訳されている言葉と同じ言葉です。この言葉
には「契約」という意味と「遺言」という意味
の両方があります。パウロはその二つの意味を
重ね合わせて、神様の契約は人間の遺言のよう
だ。一度約束したら決して変わらない。無条件
の愛で「私はあなたを祝福する」「あなたを救

う」。そう約束なさった神さまが、430年経っ
たら条件付きの愛に変わることはない。そう教
えたのです。それが今日の御言葉でパウロが語
りたい中心点です。

この決して変わらない、ということをはっき
りさせるために、パウロは、アブラハムに対
して神さまがなさった約束は、キリストについ
ての約束だった、ということを教えました。

16節「ところで、アブラハムとその子孫に
対して約束が告げられましたが、その際、多く
の人を指して『子孫たちとに』とは言われず、
一人の人を指して『あなたの子孫とに』と言わ
れています。この『子孫』とは、キリストのこ
とです」。

アブラハムに対して神さまが、「あなたとあ
なたの子孫に祝福を与える」と約束をなさった
ことが創世記には何度も出て来ます。その言葉
は全部、単数形です。単数形で集団を表すこ
ともできますから、創世記の「子孫」とはイスラ
エル民族全体のことだ、と普通は考えられて来
ました。でも、パウロはここで、文字通りこれ
は単数のことだ。一人の人キリストのことを神
様は言われたのだ、と教えたのです。もちろん、
キリスト一人を祝福されるのではなくて、キリ
ストを通してすべての人を祝福なさるのです。
イスラエルの人々が神様の祝福を受けたのは、
キリストによるのだ。そうパウロは言ったので
す。

少しややこしい議論ですけれども、結局、パ
ウロが言いたいのは、神様の無条件の愛は最初
からキリストを通して人間に与えられたのだ、
ということです。神様は、人間の罪を背負って
十字架に死んでくださるキリストを愛する愛
で、そのキリストと重ね合わせて神の民を見て
くださっていたんですね。この私もそのように
見てくださっていたのです。

神さまが私をどう思っておられるか。神様の
アルバムをめくって行きますと、その最初の
ページにはキリストが出て来るのです。私のた

めに十字架に命を捨ててくださったキリストのお姿が、最初のページに出て来るのです。「私は最初から私の独り子を十字架につけるほどにあなたを愛して来た。最初から十字架の救いを差し出して来た。そのわたしの心は変わっていない」。そう神様は私たちに語りかけられるんですね。

皆さんはどうでしょうか。神様の顔をいつも変わる事のない愛の御顔として見上げているでしょうか。

現実の私たちは、痛みや悲しみに会う時に、神様の愛の御顔が見えなくなることがあります。あるいは、悪いことをして心に咎めを感じるときに、神様の愛の御顔を見失うことがあります。「私は神様に愛されている」。この現実感覚を失ってしまう。それは、毎日の生活の中で起きることです。

その時は、神様のアルバムの第一ページを開かなければならないです。神様のアルバムの最初の一ページには約束が書いてあるのです。「私はあなたに祝福を与える」。そして、その同じページにはキリストの十字架が記されているのです。十字架に独り子を与える愛で、神様は私たちを愛し、永遠の命を与えてくださるんですね。

「苦しみの時には十字架を思い出すことができる」。そうパウロは別の所で言いました。「苦しみのときにも神様の顔が変わっていないことを、十字架を見上げれば確信できる。だから、苦しいときも生きる喜びはなくなる。苦しいときこそ信仰は鍛えられて、いつも希望が湧いてくる」。ローマの信徒への手紙5：1～11の議論です。

本当にそうですね。体を痛めている多くの兄

弟姉妹の姿から、あるいは悲しみの中を通る兄弟姉妹の姿から、私たちはいつもこの現実を見させられています。どんなときにも、神様の御顔は変わらないんですね。多くの兄弟姉妹が痛みや悲しみのときに、神様の愛を疑わず、むしろ神様の愛に支えられ、勇気づけられています。感謝と喜びが戻ってくる。そういう姿を私たちは現実に見ています。神様の無条件の愛は本当に力があるんですね。人を支え、造り変えるのです。

私の罪を責め、私を怒り、滅ぼす神様になったものではありません。悲しみの意味が分からないときにも、神さまが愛のお方でいらっしゃることは分かるのです。この方に祈り、この方に願い、この方に委ねるのです。

心に咎めを感じるときにも十字架を思い出すことができる。そうパウロは別の箇所で言いました。「決して心を変えない神様が罪人の私を義としてくださる。十字架のキリストが私のために神様に執り成してくださる。私でも他人でも誰であってどんな出来事でも、私を神様の愛から引き離すことはできない」。ローマの信徒への手紙の8：31～39の議論です。

神様のお顔はいつまでも変わらない。律法が与えられ、「あなたは正しく生きよ」と神さまが呼びかけてくださるときも変わらない。苦しみの日も罪の日も変わらない。キリストを通して、いつも愛の御顔を向けてくださる。

今日の御言葉でパウロはそう語りました。どんなときにも私たちに生きる勇気と喜びを与える神様の御顔を見失うことがないように、十字架に独り子を与えてくださった神様をいつも思い出したいと思うのです。

改めて考えるカテキズム教育とは？

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）

序. 昨今の日曜学校の教勢不振を痛みつつ考えること

わたしが奉仕させていただいている稲毛海岸教会の日曜学校は、ほんの何年前までは生徒数が三十人ほどいたのですが、あれよあれよという間に、今は一桁台にまで落ち込んでしまい、どうしたものかと頭を抱えている次第です。もしかしますと今日お集まりの方々の日曜学校も同じような状況ではないかと思いますが如何でしょうか。わたしは二十数年間、大会教育委員の奉仕をさせていただいてきて、その間に委員会は様々な教育教材を出版し、提供してきました。しかしある時、ある先生からお叱りをいただいたことがありました。教育委員会はこうした教材を色々出すが、現実はそのどころではない、そもそも日曜学校に子どもがいないし、来ない、それをどうにかしてほしいと。さすがに委員会にできることはわずかですから、そこまではできないことですが、現場の声としては切実なものだと思いました。日曜学校の教勢不振は、おそらく全国的なものではないかと思います。わずかに数人の子どもたちを前に、私たちはどうしたら子どもが集まるのだろうかと思ひ、1～2人の少ない子どもと一緒に小さな分級をしながら、困ったものだと言っているのではないのでしょうか。しかし視点を変えて考えますと、子どもの人数が少ないということは、きめこまやかに子どもの様子を見ることができ、丁寧に教え導くことができるということでもあります。そうして委ねられた子どもたちを、大切に大切に育てながら、主の許に導いていくことができるということでもあります。日曜学校の教勢不振をいたずらに嘆くことよりも、視点

を変えて、一人一人の子どもたちを丁寧にみる
ことができ、きめこまやかな教育をすることが
できるチャンスととらえて、むしろそのための
好機として考えていったらよいのではないで
しょうか。

今回の講演は大きく三つのことをお話しさせて
いただきたいと思います。お集まりの
の方々の多くは、これまで長く中部中会教育委員
会発行の日曜学校教案誌をお使いになり、もう
十分にカテキズムについて習熟しておられるこ
とと思いますが、他方では、今日初めてこの
ような研修会においでくださり、あるいは教師
になられたばかりで、そもそもカテキズムとは
何？という疑問をお持ちの方もおられるかと思
います。大会教育委員会から今年の秋に新しい
カテキズムが発行され、来春からはこのカテキ
ズムに基づくカリキュラムによって教案誌が大会
教育委員会から発行されることになります。
そうした流れの中で、しかし今なお、どうして
カテキズムによる教育が必要なのか疑問に思う
方々もおられるかもしれません。そこで第一点
は、そもそもカテキズム教育とは何か、その本
質と重要性についてお話ししたいと思います。
次に第二点として、新しく発行されたカテキズ
ムの主なねらいや中心点について、全体的な説
明をさせていただきます。個々の解説について
は、来年には大会教育委員会から解説書が発行
されることになっていますし、個別の問答につ
いては新しい教案誌が解説していくことになり
ますので、ここでは全体的な事柄を取り上げたい
と思います。そして最後に第三点として、カ
テキズム説教の準備についてや実際の展開の仕

方などについて、時間が許される範囲でお話しさせていただきたいと思います。

1. 「カテキズム」教育の本質と重要性

①キリスト教信仰の本質——信仰を「告白する」ということ

最初にローマ10章9,10節をお読みします。そこには「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」とあります。ここに「公に言い表す」という言葉は、別の翻訳をすれば「告白する」ということで、ホモロゲオーという言葉が用いられています。ホモロゲオーとは、「同じこと（ホモ）を言う（ロゲオー）」ということで、「そこで告げられた事柄を真理として同意し、同じ言葉を一緒に口にする」ことを意味します。こうして同じ信仰の言葉を告白する者たちが集められたのが教会です。ですから教会とは「信仰告白共同体」です。そこで教会に入ろうとする人に対して、言葉をもって教会の信仰、つまり教会員が皆等しく言い表してきた同じ信仰について同じ言葉で言い表すことが求められるのです。先のパウロの言葉では「心に信じる」とこと、「口で告白する」とことが一つのことでとされます。私たち日本人は、神を信じることを自分の心の中の内面的な問題と考えがちで、情感やそのときの雰囲気や神を信じていると思ったり、感じたりするくらいがあります。だからそれを口で告白することと区別してしまいます。言葉で厳密に言い表すことよりも漠然と心で感じ取るようなもの、心と心が触れあったら通じてしまうような気分や体験を信仰と考える傾向があります。しかし、教会が洗礼志願者を受け入れて洗礼を授けようとするとき、その人がどのような信仰の体験をしたかとか、どんな経緯を通過してきたかということ以上に、その人がそもそも「何を信じているか」

ということを問題します。その人が「イエスがあなたにとって主であることを認めるか、神がイエスをよみがえらせた事実を認めるか」ということを問題にするのです。元来の信仰告白は、この二つの事柄（「イエスは主である」とことと「キリストは復活された方である」とこと）が告白されていたのであり、それが「信仰告白」として求められることでした。聖書の語る真理と、神の恵みの約束を承認し、それと同じ言葉を自分も語るのかかどうかということが、ここで求められることなのです。

ですから聖書でいう信仰とは、その人の信念や確信といったものとは違います。信仰がその人の信念であるにすぎないなら、それこそ千差万別のもものとなってしまいますし、恣意的で自分勝手なものとなってしまいます。自分の信じられないことは抜かして、都合の良いものだけを受け入れるということになるからです。まことの信仰とはそういうものではありません。信仰とは、いつの間にか心の中にできあがる自分の信念や確信のようなものではなく、聞いた言葉、それも「外から来た言葉」によって生み出されてくるものです。外から来た信仰を聞いて受け入れる、それが聖書でいう信仰です。17節では「実に、信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことによって始まるのです」とあります。「信仰は、キリストの言葉を聞くことによって始まる」。つまり聞いた言葉、自分の「外から来た言葉」によって信仰は生み出されるとあります。その言葉は神の言葉であり、神の真理が人間となった言葉に他ならないからこそ、その言葉を信頼して受け入れることができるのです。そしてこの神の言葉であるイエス・キリストを証言するのが聖書であり（ヨハネ5章39節）、その聖書の教えを簡潔に要約したものが信条や信仰告白と呼ばれるものです。エルサレムのキュリロスは、『教理教育講話』の中で、「皆が聖書を読むことができない

ので——ある者は教養の不足で、他の者は暇がなくて聖書を知ることができない——、私たちは、信仰の教理全体を数行にまとめる」と述べてきました。これらは記憶に委ねられ、蓄えられ、護られるべきものとされます。なぜなら「それは、何か人間による編集物ではなく、聖書から収集された最も重要な点からなっている」ものだからでした（ヤング『ニカイア・使徒信条入門』教文館、p30）。ですからここで言う信仰とは、単なる主観的・恣意的・個人的な信念のことではありません。キリスト教信仰とは、キリスト教が真理だと信じていること、つまり教会の信仰、具体的にはそれをまとめた信条・信仰告白を受容し、それに同意し、共有して、それを「自分の信仰」とすることです。信仰は確かにどこまでも個人の主体的な応答ですが、だからといってそれは恣意的で主観的なものであって良いわけではありません。どこまでも自分自身の主体性において、教会の信仰を受容し、同意し、共有して、それを自分自身の信仰として言い表す＝告白するということなのです。

②カテキズム教育の由来——古代教会におけるカテケシス（洗礼志願者教育）

カテキズムという言葉初めて聞くという方もおられるかもしれませんが、この言葉の由来をお話しします。カテキズムという言葉は、古代教会におけるカテケシス、それは洗礼志願者教育のことですが、これに由来します。カテケシスとは、カタ（下に）という接頭辞に、エケーオー（「鳴らす、響く、響かせる、反響させる」という意味の動詞）が結びついたもので、「耳に響かせる、肉声をもって教え込む、口で教える」という意味を持っています。このカテキズムという言葉そのもののの中に、「響かせる」という意味が込められていることに注意していただきたいと思います。カテキズム教育ということで大切なことは、この「響かせる、反響させる」という点にあるからです。古代教

会の教父たちが、それぞれのカテケシスを残してしまっていて、聖ヨハネス・クリュソストモスという教父が『洗礼志願者のためのカテケシス』という本を著しています。このクリュソストモスは、金口ヨハネ（金の口を持ったヨハネ）とも言われた名説教家ですが、その本の中で、「それゆえ私はこの説教を『カテケシス』と言っています、それは私が行ってしまっても、私の言葉があなたたちの心の中で『反響する』ためです」（『洗礼志願者のためのカテケシス』サンパウロ、p16）と語っています。自分が去っていても、洗礼志願者の心の中で、カテケシスで聞いた言葉、教えがいつまでも「反響する」ことを願っていると語ります。ここにカテケシス、カテキズム教育の中心点があります。口伝えにして教えるとか、響かせるということは、人格から人格へと伝えられていく教育として考えられたということです。教育する側の中に持っているキリストにある生命と信仰の喜びとが、教育される側に響かせられていき、それが今度は相手の中で反響し続けるものとなっていく、また互いの間でキリストにある信仰とその喜びとが反響しあっていく、そしてその生命がその人の生活全体にわたって響き渡り、反響していくようになる、そのような教育がカテキズム教育の意味することです。ですからそれは人格から人格へと、しかも生活の中で、生活を通してなされていく全人的な教育なのです。

カテケシスは、古代教会における洗礼志願者準備教育のことですが、古代教会では洗礼を希望する人に洗礼を授けるために大変厳しい訓練を課しました。当時の教会の礼拝は、「求道者の礼拝」と「信者の礼拝（ミサ）」の二部構成になっていて、前半の「求道者の礼拝」には誰でも出席することができました。それは御言葉の説教を中心とした礼拝ですので、信仰を志す人たちも御言葉の説教を聞き、次第に洗礼への願いを抱くに至ります。しかし洗礼を希望す

る人をすぐに教会は受け入れることがなく、まず洗礼志願者として受け入れるにふさわしいかを試問し、その人の仕事と職業が吟味されました。売春宿の主人や剣闘士、異教の祭司や兵士が受け入れられないのは理解できますが、学校の教師や画家、彫刻家も受け入れられませんでした。異教に関わる職業だったからです（『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』、オリエンズ宗教研究所、16. 仕事と職業、p35～39）。こうして仕事と職業に関する調査の後、彼らは洗礼志願者（カテクレーメン）として受け入れられます。そして「求道者は3年間神のこトバを聴かなければならない」と定められていました（同）。その間にその人の生活ぶりが吟味されて、キリスト者にふさわしい正しい生活を過ごしているかどうかを試されます。そうして受け入れられた洗礼志願者は、いよいよ洗礼準備に入ります。当時の教会では洗礼式は復活祭の一回だけとされていました。その前の40日間（そこから四旬節と言われるようになりました）教会にこもって集中講座を受けます。それがここで言うカテケーシスのことですが、具体的にはそこで信条伝授と信条答誦が行われ、さらにキリスト者としての生活の仕方、洗礼と聖餐の意味、最後に主の祈りが教えられました。古代教会の時代、それぞれの教会は自分たちの信条を持っていました。わたしたちは使徒信条を知っていますが、これはローマ教会の信条が次第に変化を経て8世紀に現在の形に成立したのですが、2世紀にまで遡ることができる古いものでもあります。しかしローマだけではなく、エルサレム、カイサリア、アンテオケ、アレクサンドリア、ミラノ、ヒッポといったその他にも多くの教会がそれぞれ自分たちの洗礼信条を発展させていきました。これらの洗礼信条（洗礼に際して告白することを求めた各教会ごとの信仰簡条）は、言い回しや項目に小さな違いはありますが、おおまかな内容はほとんど同じです（洗礼信条については、渡辺信夫『古代教会の信仰告白』新

教出版社、ケリー『初期キリスト教信条史』— 麦出版社などを参照）。

こうした信条と主の祈りは門外不出の「秘義」として、口頭で教えられ暗記させられました。「信条は、洗礼の直前に授けられ（信条伝授）、直ちに答誦し、与えられたものを返す形で告白され（信条答誦）、この一回の儀式で信条本文は受洗者の心に焼き付けられ、終生消えることがなかった。彼らはこれを反覆して唱え、意味を噛み締めたのである。まさに、これは洗礼信条であって、洗礼が一回的なものでありつつ終生にわたってその力を持続したように、信条も一回授けられて、終生その力を保持した。」（渡辺信夫『古代教会の信仰告白』p4）これは「秘義保持の規律」と言われるものですが、そのことについてアンブロシウスも『入門者のための信条の説明』の中で次のように語ります。「信条は書き留めてはなりません。……その理由は何でしょう。書き留めてはならないものとして、私たちはそれを受けただけです。では、どうせねばならないのでしょうか。記憶に留めてください。すると、あなたがたは言うでしょう。書き留めないで、どうやって記憶できるでしょうか、と。……確かに書き留めることであれば、もう一度読み直すことができます。しかし、毎日毎日、それを思い起こして、黙想することはないでしょう。逆に、書き留めなければ、忘れることを恐れて、毎日毎日思い起こすことになるでしょう。……わたしは強く勧めます。あなたがたの心に、信条を思い起こしてください。」（小高毅『クレド〈わたしは信じます〉』教友社、p12）このように教会は、個々人の自由な信仰を許容したのではなく、「教会の信仰の言葉」に同意して、それを「自分の信仰の言葉」として告白した者を受け入れました。そこでは自分の主体性において「教会の言葉」に同意し、それを「自分の言葉」として心に響かせ、生活に浸透させていくことが求められました。カテ

ケースは、「教会の信仰の言葉」を「自分の信仰の言葉」として獲得し、責任をもって主体的に言い表すようにする訓練に他なりません。それは一人一人の信仰を立て上げていく言葉であり、相互の交わりを造り上げていく言葉、隣人へと宣べ伝えていく言葉であり、次世代へと継承させていく言葉だったのでした。

③宗教改革時代におけるカテキズム教育

こうした古代教会の慣例を宗教改革時代に復興させようとしたのが「カテキズム教育」でした。カテキズムは通常「教理問答（書）」と訳されますが、そのすべてが問答形態だとは限りません。例えばカルヴァンの『信仰の手引き』のように問答体ではないものもあります。しかし古代教会のカテケースがそうであったように、そこでは口頭による教育、問答形態による教育を重視しました。そこには「人格的な生きた信仰の対話」が意図されたからでした。ここでカテキズム教育とは何かということを最初に整理しますと、「系統的に信仰を教え、それも理論を旨とするよりも、じかに教理を生活に組み込みしめる実践の教授、口から口へと伝えられる信仰生活の実践の手引、教理を踏まえた全人教育」であるということが出来ます。宗教改革時代のカテキズム（教理問答）は問答形態が多かったのですが、この問答形態ということで意図されていたのは、ある一定の教理内容を「教え込む」とか「覚え込ませる」といった教条的なものであるよりも、「生きた信仰的な会話・対話」が意図されたということでした。しかもそれは本来的には、親と子との生きた交わりの中での会話としてでした。子どもの素朴な質問に答える、しかもそれを親自身の信仰の告白として答えていくという親の姿が、そこには反映されているのです。ですからここでの問答というのは、子の質問に答える親の信仰告白となります。しかもそれは親としての慈愛に満ちた、また子を理解した中でなされる応答、会話の中

での教育です。子の理解力に合わせてなされる、生活体験の中での信仰教育なのです。ですからそこでの問いと答えには、生きたダイナミズムがあるのです。

この問答形態というのは、古来より洋の東西を問わず、教育の基本的な方法でした。ソクラテスの産婆術やプラトン、アリストテレスと弟子たちとの会話の中での教育、また論語にみられる孔子と弟子たちとの会話の中での教育、さらには中世におけるスコラ学の教育形態が、まさに問答によるものでした。例えばアンセルムスの『プロスロギオン』はガウニロという人との対論として展開されていますし、『クール・デウス・ホモ』は弟子ボソーとの会話です。またトマス・アクィナスの『神学大全』は初学者のための神学入門、手引きとして執筆された問答形態の教科書で、いわば巨大な信仰問答でした。問答形式による教育は、教育の基本、原点のようなものであるわけです。そこでは相手の認識能力に合わせて行われ、学習者自身の真理認識に至る過程を重要視します。相手に考えさせることなしに、初めから満点の答えを提示するのではなく、答えに至る過程を大事にします。学習者自身が考える、考えさせられる、その苦闘の中で自ら真理に到達していくことを求めたのです。真理認識に至る過程があつてこそ、その真理を自らのものとして体得しうるからです。それが「学習」ということなのです。信仰教育、即ち聖書真理の体系的理解とそれに対する主体的告白と応答のための教育も同じです。そこではその真理を、自らのものとして告白し、応答していくことが求められる、そのためにはその真理を認識していくための過程が大切なのです。そのために「問答」形態が取られ、用いられたのでした。問答形態による信仰教育は、そもそも既に聖書にみられるものです。申命記6章では「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰返し教え、家に座って

いるときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」(6,7節)と求められています。これは即ち信仰教育が、ある一定の時間内だけのものではなく、寝食や仕事、休息といった生活の全てにおいてなされることを求めている言葉です。神に向かって生きる生活の全体が、即ち信仰教育であるわけです。しかもその教育方法は、「将来、あなたの子が、『我々の神、主が命じられたこれらの定めと掟と法は何のためですか』と尋ねるときには、あなたの子にこう答えなさい。『我々は、云々』」(6章20節以下)というように、子が親に問い、その問いに親が答えていくことによるのです。この教育形態はイスラエルの伝統でした(出エジプト記13章14節以下、ヨシュア記4章6節以下)。なによりこれは主イエスがなされた弟子教育の方法でもありました。弟子が主に問い、主がそれに答えられる、そうして主は弟子たちを教えられたのです。こうして子が親に問い、弟子が師に問う、それに親また師が答えていくことで、彼らが信仰の真理に至らせられる、この生きた問答の中で信仰は教育されていったのです。しかもそれは寝食を共にする生活のただ中で、生活全体をもってなされたのです。そこには親と子との、また師と弟子、教師と生徒との血の通った愛と生きた信頼の関わりが前提されています。

カテキズム教育でなされる問答形態の教育は、このような血の通った、生きた生活実践の中での、人格的関わりにおけるダイナミックな教育です。単に教理条項をオウム返しに伝達させていくための問答なのではなく、むしろ教える側の中にある生きた信仰の響きを、教えられる側に響かせていくこと、さらにはその人の中においても響き続けていくように響かせていくことこそ、問答形態でカテキズム教育がなされていくことの意義なのです。こちらの内にある信仰の生命と喜びとが、相手に反響させられて

いく、それが人格から人格へと伝えられていくための問答なのです。ですからカテキズムの問答は、それを正しく伝えていくための骨子、概要なのであって、それをそのまま教え込めば良いというものではなくて、それを教え語る者が自分の生きた信仰と生活の内ですべて肉付けしていくことが求められているものです。カテキズムを手引きとして、親が子に、教師が生徒に、自分の信仰とその喜びとを告白し、証ししていくこと、それがカテキズム教育なのです。その一例をルターの『小教理問答』に見ていきましょう。徳善義和氏はルターの問答を、「子どもがお父さんにした質問」として特徴づけます。「あなたは主なる私の他に何も神としてはならない」それに対して、「父さん、これなあに」と子どもが聞く、すると「父さんはね、おまえと一緒にだよ、何ものにもまして神様を畏れて、愛して、信頼するんだよ、神様がいちばんだよ」と父さんが話をして、子どもに向かって自分の信仰を証し、告白している答えであるとしています。「私は天地の造り主、父なる神を信じます。父さん、これなあに。父さんは信じているよ、神様がこの父さんを造ってくださったことをね、全てのものと一緒にだよ」(『障害者神学の確立をめざして』新教新書、p91,92)。この問答は子が親に信仰を問い、親がそれに答える形で自分の信仰を告白するものであるとします。それは親としてのルターと、当時二才前後であった長男ハンスとのやり取りを彷彿とさせるものでもあります。執務している部屋にハンスが遊びに入ってくる、そこでルターは仕事の手を休めてハンスを膝の上に乗せるのです。するとハンスが尋ねます。「父さん、神さまって何」。その質問に目を細めながら答えていくルターの姿が浮かんでくるようです。

カテキズム教育の原点は、この親と子との愛と信頼に満ちた神への信仰を中心にした交わり、信仰的対話の中にあります。その教育と

は、生活の中で証しされていく親自身の信仰告白なのです。そしてそのようにしていれば「口移し」で教えられていく教育の中で、信仰の言葉、それも恣意的なものではない教会の信仰の言葉を、自分の信仰の言葉として身につけていくことなのです。カテキズム教育が問答形態でなされることの意義はそこにあります。口移しで教えられる、それは単なるオウム返しではなく、自分の信仰を答える練習をさせることです。「もともとは他者の言葉であるはずなのに、それを暗唱するうちにその人の中に内在する言葉、外からの言葉であったのに内からの言葉となってしまうような言葉」です（加藤常昭『雪ノ下カテキズム』教文館、p364）。そのような信仰の言葉をもって、しかも教え語る者による生きた信仰の証しと告白をもって教えられる言葉によって、「自分の責任で、自分の言葉として信仰を言い表す練習をさせるのです」（同）。こうして教会の信仰の言葉が内在化されていくことによって、信仰と生活が恣意的ではないものとして成長させられ、責任ある主体的応答としての信仰と生活が確立されていくのです。ここでの眼目は、次世代を責任ある主体的な応答をする信仰者・礼拝者として形成するということにありました。こうしてカテキズム教育を行うことの意義は、次世代の教会を形成し、その世代が骨太で骨格がしっかりとした信仰へと成長を促すということにあるのです。覚えていただきたいことは、カテキズムによる日曜学校教育は、実は次の時代の教会を建て上げていく務めであるということです。目先の効果的な伝道ではなく、地道で気の長い営みですが、しかし着実に次世代の教会を建て上げ、5年後、10年後の教会を建て上げていく重要な務めであることを、忘れないでほしいのです。

2.『子どもと親のカテキズム——神さまと共に歩む道』の特色と眼目

次に第二点として、今年新しく出版された『子

どもと親のカテキズム』の特色と眼目を解説させていただきます。ここでの解説は、このカテキズムの原著者である牧田吉和先生（山田教会牧師）ご自身が、『教会学校教案誌』（中部中日曜学校委員会発行）第55～57号で解説をしてくださっており、それに準拠したものですから、詳しくはそちらをご覧くださいようお願いします。まず全体の構造からお話いたします。

①全体の構造：序論と三部構成（信仰生活・教会生活・感謝の生活）

このカテキズムは『子どもと親のカテキズム』という題の後に「神さまと共に歩む道」という副題がつけられている点が大切です。ここではその部分を波線で表記しますが、信仰生活を「道を歩む」こととして動的に、ダイナミックに表現していることが大切です。わたしたちの地上における信仰生活というのは、栄光の御国に向かって旅を続けて歩んでいるということであり、こうした「道を歩む」という御国への動きの中に、子どもたちもその動きに加わるように促すことが目的です。まさに成長の途上にある子どもたちに「神と共に歩む」ことへと招くことに狙いがあります。もう一つは、「神さまの子ども」という視点です。これを読むのは文字通り子どもたちであるわけですが、それを「神さまの子ども」という視点で呼びかけ（この点は二重線で表記）、そこから「神と共に歩む」こと、そしてさらにはそこから「神の家族を形成する」ことへと呼びかけるものとなっています。そもそも「神の子（子とされる）」ということは、「義認・子とされる・聖化」という救いの秩序（オールド・サルティス）の中で神の祝福の中核にあることです（『ウェストミンスター小教理問答』問32～35参照）。「子とされる」とは、救いが完成した姿を指し示すものです。

まず全体の構造が最初の問1～5で概説され

ていきます。全体の中心点が、最初の見出しの「はじめに 神さまと共に歩む道」とされた後、「一番大切なこと」という小見出しで問1~5全体の総論が述べられます。「問1 私たちにとって一番大切なことは何ですか。答 神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです。」この問答に、先記の二点、つまり「歩む」と「神さまの子ども」ということが言い表されていきます。そして第一に、「信じて歩む道」という小見出しで問2,3が続けられますが、これが問6~41の第一部「信じて歩む道」を概説するものとなります。「問2 神さまと共に歩むとは、どのようなことですか。答 まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むことです。問3 神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか。答 イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです」。第二に「教会と共に歩む道」という小見出しがつけられて、それが問42~55の第二部「教会と共に歩む道」を概説するものとなります。「問4 神さまの子どもとして歩む生活で、だいじなことは何ですか。答 神さまが、ご自分の子どもとして集めてくださった教会の生活を大切にすることです。毎週主の日に神さまを礼拝し、祝福をいただき、世界に送り出されて神さまに仕えて歩むことです」。第三に、「感謝しつつ歩む道」という小見出しがつけられて、問56~97の第三部「感謝しつつ歩む道」を概説するものとなります。「問5 神さまが私たちに求めておられることは何ですか。答 神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまが造られたものを大切に、祈りつつ歩むことです」。こうして最初の問1~5によって、全体が三部構成となっていることを表わし、その全体を概説するものとなっています。さらに「歩む」ということについて、以下の問答が続きます。「問39 救われて神さまの子どもとされた私たちは、どこをめざして歩むのですか。答 天に

おられるイエスさまは、再び地上に来られ、最後の審判をし、天と地とを新しくし、神さまの国を完成されます。私たちは、再び来られるイエスさまを待ち望み、その日に備えつつ、希望に満ちて歌いながら御国をめざして歩みます」。「問55 恵みを与える方法としての祈りとは何ですか。答 イエスさまは、祈り求める者に聖霊を与えることを約束されました。復活のイエスさまは、とくに祈りによって、聖霊において私たちと共にいてくださいます。ですから、いつでもどこでも祈りながら御国への道を歩んでいきます」。「問69 第四戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。答 私たちの安息日は、キリストが復活された日曜日です。神さまは、この日を主の日として、特別に取りわけ、教会で礼拝をささげ、救いの祝福を喜び、きよく休んで六日間の歩みに備えることを求めておられます。安息日の恵みにはげまされて、私たちは御国をめざして神さまと共に歩みます」。「問83 『十戒』は、罪を気づかせるためにあるのですか。答 いいえ、『十戒』は、父なる神さまの愛の親心です。私たちは、救いの完成に向かって、祈りつつ、聖霊に助けられながら、光の子どもらしく、喜んで『十戒』を守って歩みます」。

②ウェストミンスター小教理問答などの「教会論の欠如」を補う。

このカテキズムでは「神さまの子ども」という視点で述べられていると語りました。「子ども」であるということは、そこに「家族」が想定されていきます（太線で表記）。「神の家族」として形成されていくことを促すことは、ウェストミンスター小教理問答などと言われる教会論の欠如を補う意味もあります。「問42 神さまを信じて歩む時、私たちはひとりぼっちですか。答 いいえ。私たちは、聖霊によってかしらであるキリストと結びあわされた、一つのキリストのからだである教会です。神さまの子ど

もである私たちは、国籍が天にある神の家族です。ですから、私たちは、教会生活を共にしながら、祈りあい、はげましあい、手を取りあって御国への道を歩みます」。そしてこの「神の家族」という強調の背景に、改革派教会における「契約神学」の考えがあります。神と人間との関係を「契約」において理解するのは、そもそも聖書の考えですが、その理解をさらに深めて体系化したのが「契約神学」で、『ウェストミンスター信仰基準』の前提とされているものです。このカテキズムでは「契約」という言葉自体出てきませんが、考え方として前提されています。神と人間との関係を「契約」として理解することは、信仰を神の恵みとそれに対する感謝の応答として「動的」に理解し、そこに「交わり」が生み出されるということを前提します。神と人間との生きた「交わり」として、信仰を理解するということです。そしてその「交わり」は、「わたしと神さま」という個人的な関係に留まらず、「わたしたちと神さま」という家族的な関係で信仰を把握するものとなります。その意味で「神の家族」ということが強調されるのです。

③信仰の包括的理解による「対神・対人・対世界」への三方向の展開

さらにこのカテキズムは、信仰が個人に留まるものではなく、「教会・家庭と社会・環境世界」へと広がることを教えます。つまり信仰は「対神・対人・対世界」を包み込む、包括的なものであり、特に神と隣人との関係だけではなく、自分たちを取り巻く環境世界・自然に対するものでもあることへと目を広げていきます。「問5 神さまが私たちに求めておられることは何ですか。答 神さまを愛し（対神）、家族や友だちを愛し（対人）、神さまが造られたものを大切にして（対世界）、祈りつつ歩むことです」。「問18 神さまのかたちに似せて造られた人間は、どのように歩むのですか。答 神

さまを礼拝し、神さまを喜び（対神）、家族や友だちを愛し（対人）、神さまがお造りになったものを大切にして（対世界）、神さまに仕えて歩みます」。次の問答は、反面教師的なものとなっていますが、主旨は同じです。「問22 神さまに背いた人間はどのように歩むようになり了吗か。答 心が曲がって、偶像を拝むようになってしまいました（対神）。他の人を愛さないで、にくみ、いじめたりするようになってしまいました（対人）。神さまがお造りになったものを大切にせず、自分勝手に用いるようになってしまいました（対世界）」。「問56 神さまの子どもとされ、神さまと共に歩む私たちに、神さまが求めておられることは何ですか。答 感謝することです。私たちは感謝のうちに神さまを愛し（対神）、家族や友だちを愛し（対人）、神さまの造られたものを大切にし（対世界）祈りつつ歩むのです」。さらに次の問答では、わたしたちに委ねられた「文化命令」と「宣教命令」が述べられていきます。「問44 教会の交わりの中で養われる私たちの使命は、何ですか。答 イエスさまは教会に、全世界に出て行って福音を宣べ伝えること（宣教命令）、困っている人を助けること、大地を大切に治める使命を与えられました（文化命令）。私たちは神さまの子どもとして、いつでもどこでもこの使命を果たします」。以上のように、このカテキズムでは、信仰が個人的視点で完結してしまうのではなく、「神との関係（対神）・隣人との関係（対人）・環境世界との関係（対自然）」という包括的な広がりの中で理解されることが意図されています。

3. カテキズム説教準備についての幾つかの勧め

第三点として最後に、カテキズムを説教する際の心得のようなことをお話ししたいと思います。これはカテキズム・教理を教える場合だけではなく、聖書物語を教える場合にも共通することですが、①教理・聖書物語はできれば視聴

覚教材を用いて視覚的に提示することが大切だと思います。耳だけで聞いたことは1~2割しか記憶に残りませんが、視覚的に聞いたものは8~9割も記憶に残るというデータがあります。準備するのは大変ですが、特に教理は観念的になりがちですから、どうしたらそれを視覚的に教えることができるかを工夫してみていただきたいと思います。②てんこ盛りではなく一輪挿し（ワンポイント）で、ということも大切です。今日のお話は何が主題だったのか、まず自分自身で明確にすることが大切ですし、そうして明確に語られたお話しは、聞く子供たちにも明確に主題が伝わっていきます。あれもこれもと話すのではなく、すっきりとワンポイントでまとめる方が聞きやすく、記憶に残りやすいです。そのためには自分のお話を一度ごく短い言葉や文章でまとめてみる工夫をすると良いでしょう。わたしは毎週の礼拝説教をレジュメとして出していますが、さらにそれを毎回きっちり600字に要約したものを週報に掲載しています。長い説教の時も短い時もきっちり600字です。そうやってまとめることによって、自分の中で主題が明確になり、頭の中にすっきりと入ってきます。③アイ・コンタクト、目を見て話すことが大切です。準備不足で自信がないと、どうして原稿ばかり見ながらお話しをすることになりますが、それでは効果的に伝わりません。自分の中でお話しが主題が明確になったら、自信をもって子どもたちの目を見ながらお話しするようにしましょう。それはお話しが一方通行にならないようにするため、むしろ対話するようにお話しすることでもあります。④できれば完全原稿を作るということも大切です。仕事を抱えながら日曜学校の奉仕をすること自体に限界を感じる方々も多いとは思いますが、できればお話しを全部原稿にしてみると、自分の頭の中でお話しをよく整理できるようになります。箇条書きのメモだけでお話しすると、途中でしどろもどろになってしまったり、

大切なポイントをはずしたり、お話しが枝葉にそれてしまう危険があります。日曜学校のお話しは長くても10分ほどのもので、そんなに多くの分量ではないはずですから、できるだけ完全原稿にしてみることをお勧めします。その中で、全体の構成や時間配分を考えることもできます。「導入・展開・結論」あるいは「起承転結」という形で構成しやすくなります。⑤度量衡などは具体的にお話しすることが大切です。例えばノアの方舟の長さは300アンマとありますが、それだけではどれほどの長さか見当もつきません。1アンマは中指の先からひじまでの長さで約45cm、ですから300アンマは約135mです。それを手近なもので表わします。たとえばそれはおよそ新幹線一両分の長さです。高さは30アンマですから13.5mです。稲毛海岸教会の十字架までの高さがちょうどその高さになります。皆さんの手近なものによって、それを表わしたら、どんな言い方になるのでしょうか。そうした工夫をしてみてください。⑥市販されている聖書物語などを参考にしてみてください。わたしには子どもが二人いましたが、まだ小さかった時は、毎晩寝る前にいくつかの絵本を読み、最後に聖書物語を読んでから、お祈りして寝かしつけました。それがその後の自分の説教の栄養となっています。聖書物語を読みながら、ああ、こういう解釈もあるのかとか、こういう風に展開するとよく分かるなどといった具合に、とても教えられました。できればそれを、感情をこめて声に出して読んでみるととても参考になります。ぜひ試してみてください。⑦最後に申し上げたいことは、自分がうまくできなかったと思う時、それは賜物が不足しているからであるよりは、実は準備不足であることが原因です。耳の痛いことを申し上げて申し訳ありませんが、自分の賜物不足を嘆くより、よく準備することが大切です。

結、永遠に残る務め

私たちは日曜学校の目先の現状を見ては嘆き、悲観することが多いですし、自分の働きの貧しさにがっかりすることがありますが、最後にこのことをお話ししたいと思います。昨年わたしは大病をして6か月間教会をお休みしました。しかし主の憐れみですが、その間も教勢を大きく減らすことなく、主は教会を守ってくださいました。そればかりか昨年今年は受洗者6名、信仰告白者1名を与えられました。そしてその中の5名は日曜学校出身でした。また現在受洗1名、信仰告白1名の高校生が準備していますが、二人とも日曜学校出身者です。そして彼らの中から日曜学校教師3名、奏楽者2名が新しく立てられました。わたしが病気をして休んでいる間に、このような祝福を主は与えてくださったのです。これはわたしが何かをしたということではなく、日曜学校の先生方が長い間労苦し、祈りつつ奉仕してきてくださったことの實りです。日曜学校の働きは地道ですし、すぐには実りを見ることができないものではありますが、そうした私たちの働きは決して無意味に帰するものではなく、必ず実を实らせるものとなります。成人してから教会に来られるようになって受洗した方の多くは、よく伺ってみると小さい時に日曜学校に通っていたという方でした。また小さい時にクリスマス会に出たことがあり、それが楽しかったという思い出をお持ちの方でした。せっかく大切に育てていっても、中学校に入ってから来なくなる子どもたちがいたり、大きくなるにつれて教会から離れてしまう現状を見て、わたしたちは嘆いてしまいます。しかしたとえ自分の教会につながることはなくても、日曜学校で過ごした楽しい思い出と、そこで蒔かれた御言葉の種は確実にその子どもたちの心に植えつけられて、いつの日か実を結ぶものとなります。わたしの経験では、高校時代に信仰を持ったけれども大学生になってから教会を離れ、50年過ぎてから教会に戻って来た

と言う方もおられます。皆さんが毎週果たしている労苦は、確実に子どもたちの心に植えつけられていき、いつの日か必ず実を結ぶ、そのことを信じて、自分に委ねられた働きに勤しんでいきたいと思います。なによりも私たちが委ねられている働きは、子どもたちを永遠の命に至らせる働きであり、永遠に残る務めであるということ覚えてください。カテキズム教育の目標もそこにあります。私たちが果たした働きによって、一人の子どもがやがては永遠の命に至らせられていく、たとえそれがただ一人であったとしても、それは永遠に残る務めを果たしたことになります。なんと名誉なことではないでしょうか。この働きのために思いを新たにしてお祈りしていきましょう。明日の皆様方の奉仕が豊かに祝福されることを心からお祈りいたします。

*本講演は下記の既刊出版物に掲載されたものに基づきます。

- ・「日本宣教の課題としての信仰継承教育」、日本キリスト改革派教会中央宣教研究所紀要『宣教』第18号、1993年
- ・「響かせていくこととしての信仰教育」、日本キリスト改革派教会東部中会教育委員会、『教会学校教師ノート』第20号、1996年
日本キリスト改革派教会中部中会教育委員会、『日曜学校教案誌』創刊号、2001年再録
- ・「日本基督改革派教会におけるカテキズム教育と信仰継承」、日本キリスト改革派教会中央宣教研究所紀要『宣教』第22号、『今日の教会とカテキズム』、1997年
- ・「大会的課題としての『契約の家庭』の形成と家庭礼拝の確立」、日本キリスト改革派教会役員修養会委員会、『大会役員修養会記録』第53回年度、1996年
- ・「信仰のバトンを受け渡していくために」、日本キリスト改革派教会中部中会信徒研修会委員会、『第29回 中部中会信徒研修会』記録、2003年
- ・「日本宣教の課題としての信仰継承教育」、東京基督神学校紀要、『基督神学』第17号、2005年

「子どもと親のカテキズム」について (4)

牧田吉和 (山田教会牧師)

はじめに

これまで3回にわたって「子どもと親のカテキズム」について解説してきました。今回をもって全体の解説を終えることにします。

第1回目では、「子どもと親のカテキズム」の成立までの経緯と背景、さらには作成の実践的な狙いについて記させていただきました。

第2回目では、「子どもと親のカテキズム」を理解する上で鍵となる、このカテキズムの基本的特質を中心にして説明をさせていただきました。

第3回目からは、このカテキズムの内容の要点と意図、他のカテキズムと比べた場合の特色などを明らかにしてきました。前回は1～41問までを扱いました。

この第4回目では、42問以降をポイントを押さえる形で解説したいと思います。内容的には、問42～55までは「第二部 教会と共に生きる道」、問56～97では「第三部 感謝しつつ歩む道」が、さらに後者は大きく分けて問56～57では「第三部」の序論、問59～83では「十戒について」、問84～97では「主の祈りについて」が扱われています。このカテキズムの特色がよく現われているのは、特に「第二部 教会と共に生きる道」においてですので、この第4回目は第二部の内容を中心にして解説しておくことにします。

第二部 「教会と共に歩む道」(問42～55)

第二部・問42～55は「教会論」です。「ウェストミンスター小教理問答」では欠けていた教会論がここではかなり丁寧に扱われます。ここには、「20周年記念宣言」、「終末の希望についての信仰の宣言」、「伝道の宣言」など、諸宣言

の内容も取り入れられています。

第一部では「信じて歩む道」の主題の下で、三位一体の神の働き、すなわち三位一体的秩序に従って「父なる神」、「子なる神」、「聖霊なる神」のそれぞれの働きが内容的に扱われました。第二部では「教会と共に歩む道」の主題の下で、上に述べたような三位一体の神の働きを前提にしつつ、今度は教会について問答は展開されています。つまり、教会を静的に捉えないで、三位一体の神の救いの歴史をいつも視野の内におきながら、その動的な動きの中で教会について扱うことを意識的に行っています。

まず問42は次のように述べています。

「問42 神さまを信じて歩む時、私たちはひとりぼっちですか。」

答 いいえ。私たちは、聖霊によってかしらであるキリストと結びあわされた、一つのキリストのからだである教会です。神さまの子どもである私たちは、国籍が天にある神さまの家族です。ですから、私たちは、教会生活を共にしながら、祈りあい、はげましあい、手を取りあって御国への道を歩みます。」

この問いでは、三位一体的な神の歴史的働きは、救いの歴史の現在という時点で言えば、天上のキリストの聖霊による働きであり、その働きの中でキリストに結びあわされた神の民、すなわちキリストの体なる教会が位置づけられています。「ひとりぼっちですか」という問いの中には、救いを個人的レベルでとらえ易い点を考慮して、信仰生活における教会と教会生活の重要性を自覚してほしいという願いが込められ

ています。

このカテキズムの教会についての取り扱いの特色は問42では次のような点に現われています。

- ① 「キリストの体である教会」を「神さまの子供たち」と規定している点。ここでもこのカテキズムの特色である「神の子論」が機能しています。
- ② 上記の「神の子論」と連動して「国籍が天にある神さまの家族」という表現を用いて、地上的国籍、民族性、肌色などを超えた教会の「共同性」を含蓄させている点。
- ③ 救いの歴史を踏まえて「御国への道を歩む」という動的概念を持ち込んでいる点。

次に問43においては、キリストの聖霊による臨在、とりわけ礼拝におけるキリストの臨在の問題が扱われています。このカテキズムの全体を貫らぬいているのは恵みの契約の赤い糸です。恵みの契約の実質は、キリストにあって神が人と共にあり、人は神との交わりの中において神と共にあることにあります。教会は、キリストの体である教会であり、恵みの契約に基づく神の民です。恵みの契約の民としての教会の姿が、最も鮮やかに姿を現すのは礼拝におけるキリストの臨在においてです。聖霊によるキリストの臨在にあいて神が人と共にあることが現実化するからです。このような意味において、恵みの契約を赤い糸とするこのカテキズムは、教会を扱うときに、礼拝におけるキリストの臨在を心臓部に据えています。従って、このカテキズムでは、教会についての教えは主の日の礼拝を中心に展開されることになります。ここには、「20周年記念宣言」、「予定についての信仰の宣言」、「終末の希望についての信仰の宣言」の実りが一つの形をとっています。

しかも指摘しておきたいことは、この問43では、「母の胸に抱かれるように、私たちが養いそだて、守りつつ、救いの完成へとみちびい

てくださいます」という表現が見られることです。これは「70周年記念宣言」（草案）でも重要な役割を果たしている「母なる教会」の概念が、このカテキズムの特徴である「神さまの子どもたち」、「神さまの家族」という家庭論的概念と一体化して導入されていることを意味しています。

問44においては、教会の使命論が扱われています。「神さまの子供としての使命」として、以下のような点が明らかにされています。

- ① 「全世界にでて行って福音を宣べ伝える」（マタ28:19～20）という「伝道の使命」。
- ② 「困っている人を助ける」（マタ25:34～46）という「愛の執事的奉仕」・「ディアコニア」の使命。
- ③ 「大地を大切に治める」（創1:28、2:15）という「文化命令の使命」。

①の「伝道の使命」と共に②の「愛の執事的奉仕」が述べられている点に、「愛の執事的奉仕」に言及する「20周年宣言」（「伝道」の項）や、伝道と共に「愛の業に励む」ことを強調する「伝道の宣言」（「伝道のための教会改革」の項）が反映しています。また、「愛の執事的奉仕」の使命は、個人的レベルにとどまらず、「神さまの家族」として地球的レベルで考えられています。③の「大地を大切に治める使命」はこのカテキズムでは何度も強調されている点です。これらの使命論は、改革派教会の信仰的遺産ですが、このカテキズムではそれを積極的に取り入れています。

問45では、週の初めの日に礼拝に集まる理由が子供たちに示され、ここでもすでに指摘した救いの歴史を踏まえ、天上の復活の主の臨在の場としての主日礼拝の意味が明らかにされています。問46は、主日礼拝の諸要素を説明しています。

問47以下では「恵みの手段論」が扱われています。これまでのつながりで言えば、天上のキリストは主日礼拝において聖霊によって臨在

されるのですが、それは特に「恵みの手段」を通してであることが教えられています。「復活し、天におられるイエスさまは、とくにご自分の恵みをあたえる方法を用いて、聖霊において共にいてくださいます」とある通りです。

問48では、問47で述べられた「恵みをあたえる方法」は「御言葉と礼典と祈り」であることが明らかにされています。以下の問いは、それらの一つひとつを取り上げて説明しています。

問49では、「御言葉」について扱われています。「御言葉」については、個人的なレベルではなく、「教会と共に歩む」という観点からも、第一に主日礼拝における「聖書朗読と説教」を挙げています。礼拝に出席し、説教を通して語られる御言葉を受け入れ、心にたくわえることの大切さを指摘しています。この点を押さえた上で、個人的に聖書を読み、御言葉に従うことが勧められています。

問50では、「礼典」について言及され、それが「洗礼と聖餐（主の晩餐）」からなっていることが述べられています。

問51では、第一に礼典としての「洗礼」について扱われ、問52では特に小児洗礼が取り上げられています。小児洗礼の根拠が、「信者の子どもたちも、神さまの恵み深い契約にしたがって教会の一員だからです」として、恵みの契約にあることを明確にしています。また、「親と教会には、その子が自分の口で信仰を告白するまでみちびく責任があります」として、親と教会の契約的責任として小児洗礼を受けた子供たちを信仰告白に導く責任に言及しています。これは当然のことですが、不思議なことにこれまでのカテキズムの中でこの点に直接的に言及する例はほとんど見当たりません。

問53～54では、第二に礼典としての「聖餐（主の晩餐）」について扱われています。問53では「聖餐」の示す意味が明らかにされています。キリストの「十字架でさかれた肉と流された血

によってなしとげられた救い」（過去）を覚え、「聖霊によってイエスさまに結び合わされて、罪の赦しと永遠のいのちの祝福にやしなわれ」（現在）、「ふたたび来られるイエスさまを待ちのぞむ」（未来）という過去・現在・未来という聖餐の持つ要素が含まれています。問54では誰が陪餐にあずかれるのかが明確に語られています。

問55では、「恵みをあたえる方法」の最後の要素である「祈り」について述べられています。聖霊と祈りとの関係を説明し、祈りながら御国への道を歩むべきことが勧告されています。

第三部 「感謝しつつ歩む道」（問56～97）

第二部は「教会についての教え」をめぐる問答でした。教会論的な基盤を明確にした上で、神の子供たちは、「恵みの手段」を用いて聖霊による恵みの契約の祝福にあずかりつつ、感謝のうちに御国への道を歩むことが指示されました。感謝のうちに御国への道を歩むとは、契約的応答として御国のために生きる歩みです。それは、契約の律法すなわち特にその要約である十戒に従って歩む道です。さらに十戒に従って歩む道は、聖霊に導かれて歩む道であり、それは祈りつつ歩む道でもあります。

こうして「第三部 感謝しつつ歩む道」は、問56～57では上に述べたような点を明らかにする序論的部分「一 感謝について」がまず置かれています。問56は次のように述べています。

「問56 神さまの子どもとされ、神さまと共に歩む私たちに、神さまが求めておられることは何ですか。

答 感謝することです。私たちは、感謝のうちに、神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまの造られたものを大切に、祈りつつ歩むのです。」

上の答えのうち「神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまの造られたものを大切にし」の部分が「十戒論」を意味し、後半の「祈りつつ歩む」の部分が「主の祈り論」を意味しています。この構造に従って、問58～83において「二 愛に生きる道」として「十戒」の解説がなされています。問84～97において「三 祈りに生きる道」として「主の祈り」の解説がなされています。

以上のような「感謝しつつ歩む道」において「十戒について」と「主の祈りについて」を扱う仕方は、『ハイデルベルク信仰問答』の第三部「感謝について」（同問答86～129）における「全生活にわたる感謝」（同問答86～91問）、「十戒について」（同問答92～115問）、「祈りについて」（問116～129問）の構造に学んでいます。

「十戒」、「主の祈り」についてのそれぞれの問答の解説はここでははぶきたいと思います。ただそれらの取り扱いにおいて、このカテキズムが特に注意を払っている点だけを指摘しておきたいと思います。

第一に、今日の子供たちが直面している問題を意識し、それを問答の中に反映させている点です。例えば、問73の第六戒の答えでは「人をにくむこと、無視すること、いじわるをすることは心の中の人殺しです」という言葉があります。このことは“いじめ”の問題に触れて語られている言葉です。問79の第九戒の答えでも「悪いうわさを流したり、うそをついて、友だちを傷つけてはいけません」も同様の点に触

れています。

第二に、第七戒に関係して、確かに「神さまは、思いとことばと体をきよく保つことを求めています」という点が語られていますが、このカテキズムでは何よりもまず「男の人と女の人との関係は、神さまの創造の祝福です」という積極的な側面から説き起こしています。このように肯定的な表現で始めているカテキズムは稀です。積極的表現で今日の男女の問題を考えさせようとしている点にこのカテキズムの一つの特色が現われています。男女の問題を建設的な仕方でも語り合える道につながっているでしょう。

第三に、ここでも「御国を来たらせたまえ」という祈りに関連して、「福音の宣教」だけではなく、「愛の働き」についても言及している点です。「神さまの家族としての教会と私たち一人ひとりが、御言葉と聖霊によって支配されるように祈り求めます。また、そのご支配が、福音を宣べ伝えることと愛の働きをとおして広げられ、イエスさまがふたたびこられる時に、完成されるように祈ります」（問91）とある通りです。このことの持っている意味についてはすでに言及しました。

以上、今回の『子どもと親とのカテキズム』についてポイントを中心にして説明を加えてきました。このカテキズムが文字通り「子どもと親との間」で親しまれ、長く使用され、世代を貫いて私たちの教会の信仰の共有財産となることを心から祈り願っています。

高松教会日曜学校のご紹介

松田基教（牧師）

高松教会の日曜学校は現在、中学生科から幼稚科まで7名が在籍しています。子どもたちは、すべて契約の子です。

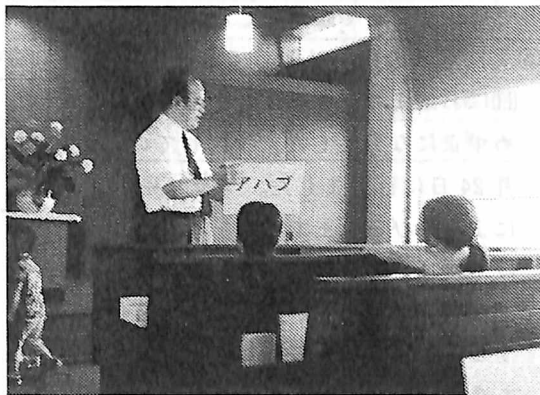
1. 礼拝

日曜日は、第二日曜日を除いて毎週9時から9時50分に行っています。第一部として礼拝形式で次の順序で行っています。

①さんびか ②お祈り ③使徒信条 ④子どもカテキズム ⑤せいしょ ⑥おはなし ⑦お祈り ⑧さんびか ⑨けんきん（生徒たちで輪番） ⑩主の祈り

お話しは原則として牧師が担当しています。牧師が不在の時は校長を務める長老がしています。『成長』のカリキュラムに従って行っています。

2013年9月より第二日曜日は、日曜学校をお休みし、朝の礼拝で「子ども説教」を行うようになりました。大人の礼拝で子ども説教を行っている教会は多くあると思いますが、高松教会の特徴は、礼拝順序で「子ども説教」が通常の説教の後にあるということです。通常の説教が終わると生徒たちは礼拝堂座席の前の方に集まります。そして、『成長』のカリキュラムに従った聖書箇所を朗読し、子ども説教を行います。また、その礼拝では生徒たちの一人に献金当番の奉仕もしてもらっています。そのようにして、礼拝の最後の祝福まで、子どもたちは前で大人と共に礼拝しているのです（通常の朝の礼拝でも小学生以上の子どもたちは大人と同じ礼拝堂で共に礼拝しています）。



子ども説教

2. 分級

9時35分ごろから第二部として、中学生科、小学生上級、小学生下級、幼稚科に分かれて分級を行っています。中学科は牧師が担当し、それ以外は日曜学校スタッフが担当しています。中学科は、木下裕也著「中高生のための教理入門 主は羊飼い」をテキストにして信仰告白を目指した学びをしています。小学生以下は『成長』のテキストを用いています。

3. 行事

2014年度の行事としては以下のようなものがありました。

- ①進級式（3月16日）…賞状とプレゼントを渡しました。また、朝の礼拝後に食事・ケーキとお茶を皆でいただき、ビンゴゲームをしました。
- ②イースター（4月20日）…卵のような丸い石に色を塗ったり模様を描いたりして、「ペーパーウエイト」を作りました。
- ③母の日（5月11日）…和紙で「うちわ」を作り、表には墨でお母さんにメッセージを書き、裏

はちぎり絵で作ったカーネーションが透けて見えるように作りました。

- ④花の日（6月1日）…近所の交番にお花を届けました。
- ⑤父の日（6月15日）…紙粘土で「小物入れ」を作り和紙を貼って模様を付けました。メッセージを添えて贈りました。
- ⑥夏期学校の代わりとして8月9日(土)～10日(日)にお泊まり会を計画しましたが、台風のため中止になりました。予定していた工作は8月24日に行いました。プラスチック板の上によく伸びる粘土で模様を作り、薄く色をつけて「抽象的なレリーフ」を作りました。
- ⑦クリスマス祝会(12月21日)…祝会で、劇「ほうとうむすこ」を披露しました。また、子ども達にプレゼントを渡しました。
- ⑧子どもクリスマス（12月23日）…ケーキ作りやゲームなどをして、クリスマスを祝いました。子ども25名参加（日曜学校生徒、近隣小学校・中学校、高松東教会のサタデーイベント参加者他）。
- ⑨誕生会…毎月第一主日の分級前に、その月に誕生日を迎える子供にプレゼントを渡してお祈りし、讃美歌を歌ってお祝いしました。



クリスマス祝会

4. サタデーイベント

2007年9月より日曜学校生徒と教会の隣にある小学校児童を対象としたサタデーイベントを

行っています。日曜学校の教育的働きとしてではなく、教会の伝道のわざの一環としてなされています。開催日前には小学校の下校時刻にチラシを配っています。毎回のように来てくれる子もいれば、時折、初めて来てくれる子もいます。2014年は、参加者が10名を超える回が多くありました。高松東教会のサタデーイベントに集っていた親子がこちらに来られるようになったことなども理由の一つです。



サタデーイベント

5. 今後の課題

多くの教会と同じように、生徒の減少が大きな課題です。もちろん人数が少なくても、スタッフたちは心を込めて生徒たちに接しています。子どもたちにとって教会が楽しい場所、毎週集いたい場所になるようにこれからも努めていきたいと思っています。また、契約の子どもたちは教会全体で育てていくのだという意識を教会員が共有していくことができるようにしていきたいと考えています。

サタデーイベントの開催日と内容

開催日	内 容	子ども参加者
2/8(土)	チョコレートのおかしをつくろう	8名
3/15(土)	たこ焼きをつくろう	18名
4/20(土)	イースターエッグをつくろう	19名
5/10(土)	クレープをつくろう	9名
6/28(土)	パフェをつくろう	15名
9/20(土)	白玉フルーツあんみつをつくろう	13名
10/25(土)	たいやきをつくろう	17名
11/22(土)	クリスマスアイテムをつくろう	14名



たかまつきょうかい
高松教会
サタデーイベント



パフェをつくろう!

- チョコレートパフェ、フルーツパフェ -

にちじ: 6 かつ 28 にち (とようび)
ここ 2じ ~ ここ 4じ

はしよ: たかまつきょうかい3かい

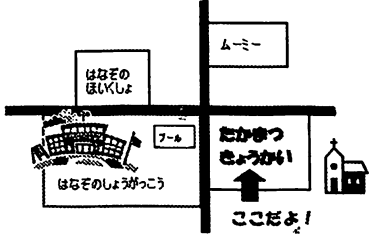
ちずはうらだよ

**やること: パフェづくり
おはなし など**

おかあさんやおともだち
もいっしょにきてね ♪



たかまつきょうかいへの ちず



かぞく みなさま
ご家族の皆様へ

キリスト教会は、大人にも子どもにも開かれています。私どもの教会も、聖書のお話や楽しいイベントを通して、子ども達が安心して遊べるプログラムを計画しました。

参加費は不要です。ご家族の皆様との参加も歓迎いたします。お子さんやご家族にキリスト教を強制したりしませんので、ぜひお気軽にご参加ください。

また教会では、日曜日の朝9時00分～50分まで、わかりやすい子どものための礼拝をしております。こちらにもぜひお気軽にご参加ください。

まつだちとのり

日本礼拝改革派 高松教会 牧師 松田基教
高松市花園町2丁目8-13 TEL 087-831-5638
教会ホームページ
http://www.geocities.jp/takamatsu_church/

サタデーイベントの案内チラシ

絵本に心を耕されて

「おひさまのくにへ」

(文／松井 友・絵／井上博幾・BL出版株式会社)

望月鈴子（浜松伝道所会員）

朝日新聞に、「おやじのせなか」というコラムが定期的に掲載されています。現在さまざまな分野で活躍している方々が自分の父親のことをいろいろと語られ、聞き手の記者が文章にまとめているコラムです。もう10年くらい続いていると思います。感謝や尊敬、反面教師である部分や、反発したことなど率直に語られています。子どもは実に客観的に親を見つめ、その姿、言葉、生き方を心に刻み込んでいるものなのだな……と思いつつ読んでいます。

良くも悪くも、人はそれぞれ親の背中を見つめ、映し出される生き方を取捨選択し、また先祖からの遺伝を受け継ぎます。それに加えて、自然環境、社会環境などさまざまな要素に影響を受けながら、人として生きていく知恵や知識を学び、身に付けて成長し、人格を形成していきます。また、そうして身に付けたものをもって、自分の生きざまを社会に映し出しながら生きていきます。しかし、罪の遺伝子を背負って神様から離れて生きていることにはなかなか気づきません。

この人生の途中で、奇しくもイエス・キリストに出会い、信じて救われた喜びを味わっている者として、私は「神の栄光をあらわし、神を喜んで」いる姿をあらわし、真実にイエス・キリストを映し出して生きているだろうかと思うとき、イエス様を映し出していない“自分の罪の姿”を見いだした絵本が今回ご紹介する絵本です。

〈おひさまのくにへ〉 大変印象的な美しい色合いの絵本です。



あさもやのたちこめるこうげんを、うまのむれがかけぬけます。

たろうとじろうは こうまのきょうだい まっしろです。

にとうはみんなといっしょに、ひろいのはらを はしります。

さらさらながれるおがわに おひさまが きらきらひかります。

「おひさまはひがしのくにでうまれて、しのくにへかえっていくのさ」と かえるが おしえてくれました。

たろうが じろうに いいました。

「いってみようよ おひさまのくにへ。あたたかいひかりを すこしわけてもらおうよ」

たろうとじろうは、おひさまのくにをめざして、げんきよく はしりだしました。

とちゅうで であったりすのかぞくもあひるたちも うさぎも

「おひさまのくには どこですか」とたず

ねると

「おひさまは いつもあっちのほうへかえっていくよ」と こたえます。

どれだけ はしりつづけたことでしょう。とうとう ひろい ひろいうみにでました。

おひさまは きらきらと、あかいひかりをはなちながら、うみの むこうに しずみま

す。たろうとじろうは ここが おひさまのくにだとおもいました。

「でも、こんなにひろくちゃ おひさまとおはなしできないね」と すこしがっかりしました。

たろうとじろうは うまれてはじめて なみのうちよせる はまべにでました。

そのとき おたがい おひさまみたいにきらきらしていることに きがきました。

「すごいぞ、きらきらしてる。おひさまがひかりをわけてくれたんだ」

おとうさんと おかあさんも ぜんそくりよくで かけてきました。

「おとうさんも おかあさんも、みーんなおひさまから、ひかりを もらったんだね」

「おひさまに おれいを いおうよ」

この絵本の終わりの数頁に、太陽に真っ赤に染まる馬たちが描かれています。一番最後の頁には、太陽が44頭の白い馬の家族を真っ赤に染めて、茜色に輝きながら海に沈んでいくシーンが描かれています。

「おひさまのひかりを わけてもらった」馬たちが、素敵に赤く染まって輝いている絵を見た時、イエス様から“新しい命の恵み”を頂いている私は、果たしてイエス・キリストという衣を着て、イエス・キリストの恵みを映し出して、輝いて生きているだろうかどハッとしたの

でした。反対にイエス様を信じているのにその信じている方を映し出していない“わたしの罪の姿”を見いだしてしまったのです。

「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている」(ガラテヤ書3:27)と言われ、パウロに「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい」(コリント一11:1)と繰返し勧められているにもかかわらず、倣いきれない弱さ、断ち切れない罪の根っこを引きずって生きているのが私たちの現状だと思います。

しかし、罪人の姿を映しながら、罪人のおいを放ちながらイエス・キリストの救いの恵みをどんなに熱く語っても、子どもたちの心に、人々の心にその言葉は響かないでしょう。キリストという衣を着てキリストに結ばれた者、キリストに接ぎ木された者としてキリストの花の香りを立ちのぼらせ、キリストの実を結び、キリストを映し出せたらどんなに幸せでしょう。

太陽はその赤い輝きを白い馬たちにわけてあげて、白い馬たちは赤く染まって輝きましたがそれは一時的なものです。罪の根っこを引きずっている私たちはキリストの十字架の出来事によって「罪の赦し」をいただき、キリストという根っこに接がれました。接がれている限り「罪の赦し」は永遠です。しっかりと接ぎ木されて、キリストという衣を身にまどえば、「感謝の実を結ばないことなど、ありえない」とハイドルベルク信仰問答問64は答えます。

日曜学校の子どもたちの前にイエス・キリストを映す者として立つことに、恐れおののきを持たざるを得ませんが、その思いを抱きつつ真摯に、自分の生きる“たたずまい”にイエス・キリストを映し出していきたいと願っています。

全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる (2)

吉田 隆 (甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長)

3. 神を神とすること (第一戒)

第一戒

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」。

神を神とすること

ハイデル 94、ウ大 1、104、ジュネ 218, 219、
I テモ 6:15, 16、ロマ 11:36、使徒 4:12、ヨ
ハ 17:3、マタイ 10:28～31、フィリ 2:6～8。

自分を神としたことが人間の墮落の始まりでした。それと同じように、神を神とすることが人間再生の第一歩です。

第一戒が教えていることは、一神教を信じなさいということでは必ずしもありません。神が一か多かということが問題なのではなく、「わたしは主、あなたの神」と御自分を啓示してくださった方を、そしてこの方だけを、私たちがただお一人の生けるまことの神として真実に受け入れ・礼拝し・愛し抜くことができるかということが問題なのです。

このお方こそが神であります。神は祝福に満ちた唯一の主権者して創造者、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住み、だれ一人見たことがなく、見ることでできない聖なるお方です。すべてのものは、この方から出て、この方によって保たれ、この方に向かうのです。

しかし、私たちにとって根本的なことは、このお方が、キリスト・イエスにおいて聖霊を通して、私たちの父となってくださったということです。ですから、私たちにとって、神と呼べるお方は、この父・子・聖霊なるお方以外には存在しませんし、あってはなりません。私たちが創造し、私たちを愛し、私たちを救ってくだ

さったお方のみが、私たちの神であります。

人の主な目的は、実に、このお方の栄光を表し、このお方のみを永遠に喜ぶことです。それだけが、人間にとっての究極的な幸いであり、この方を知ることが私たちの命なのです。私たちの感謝と喜びに満ちた生活は、ここから始まりここに帰ってきます。それは、礼拝的人生とも言えるでしょう。

他方、神を神とすることは、決して人間の軽視にはなりません。むしろ、礼拝的人生こそが人間として真に尊厳に満ちた生き方であり、神ならぬ他の何物にも縛られない真に自由な生き方です。

また、神だけを神とする者は、自分を神といたしません。謙遜に、すべての人と分け隔てなく公平に、差別や偏見にとらわれることなく接し愛するのです。私たちは、そのような真の人間の姿を人となられた御子イエスの御生涯に見ることができるでしょう。

神への誠実さ

創世 2:7、詩編 121:3～5、列王上 8:57, 58、
ウ小 48、ウ大 106, 104、ハイデル 94、マタ 6:24。

「わたしをおいてほかに(直訳：わたしの顔の前に)神があってはならない」とは、この方と私たちとの間に、いかなる邪魔も入れてはいけないということです。この方は、私たちに真摯に向き合う神であります。ちょうど、人を創造なさった時、命の息を自らこれに吹き入れられたように、神は片時も私たちから顔を背けようとはなさいません。ひたすら誠実に私たちに向き合っておられます。

したがって、私たちもまた、すべてのことを

ご存知であられるお方に対し、何の隠し立てもせず、誠実に向き合って生きることが必要です。まして、キリストに結ばれた私たちは、キリストに愛されている花嫁として、この方だけを喜び・愛し、この方だけに二心なく仕え・語りかけるべきでしょう。この方を裏切るくらいなら、むしろすべての被造物の方を捨てる覚悟で生きることです。

不信仰や疑いを抱いてはなりません。このお方は、不変であり正しい方ですから、すべての信頼を置くことができます。絶望したり高慢になってはいけません。全能であり善であられますから、すべての希望を置くことができます。この方に対して、無関心でいたり怠惰であってはなりません。無限であり慈しみ深い方ですから、すべての愛をささげることができるのです。

荒れ野の誘惑の中で

マタ 4:1～11、詩編 14:1、マタイ 10:37、19:23、黙示 2:4,10、3:1,16、I ペト 5:8、ハイデル 94、マタ 5:13、ヨハ 15:4,5、フィリ 4:12,13、詩編 46:11。

しかし、この世の荒れ野を生きるキリスト者は、主イエスがそうであったように、絶えざる悪魔の試みにさらされています。それは、神のみを神として礼拝し信頼し続けられかという試みです。私たちの心の置き場所が問われるのです。悪魔は実に様々なかたちで、神ならぬものを神として拝み信頼するようにと、巧みに誘いかけてくるのです。

——人生に対する不安や思い煩いをあおっては、神への不信感を抱かせ、占いや魔術や諸々の迷信へと引き込もうとします。

——私たち自身が人生の主であると錯覚させ、神に頼る必要はないとささやきます。

——人間のエゴイズムや優越感を掻き立て、家族や家系、民族や国家、時には自分の信仰さえも絶対化させ、自分だけが正しいと思わせます。

——テレビや雑誌、その他様々なメディアを通して宣伝される人間中心の世界観により、神信仰を相対化し、絶対者への恐れを希薄にします。

——時には、暴力や権力によって、強制的に神への忠誠を曲げようとさえします。

——あるいはまた、現世がすべてであるように錯覚させ、今の生活を守ることに没頭させて、来る世への喜びに満ちた希望を取り去ります。

——人間の欲求や快楽をあおり、金銭や地位や名誉など、この世の誘惑の奴隷にしようとします。

——さらにまた、私たちの信仰生活をなまめく生氣のないものにすることによって、神への愛を冷ましてしまいます。形だけの命のない礼拝や信仰生活、信仰者どうしの仲違いや教会の分裂・腐敗などがそれです。

塩気を失った塩は、何の役にも立ちません。私たちは、キリストにつながり続けることによってのみ、命を得るのです。この方からのみ得られる救いと祝福を失わないよう、心の雑音を静めて、この方こそ私たちが寄り頼むべき唯一の神であることを絶えず自分に言い聞かせましょう。

コラム・デオ（神の御前に生きる）

ミカ 6:8、I ヨハ 1:9、マタ 7:11、ロマ 8:32、ガラ 4:6、ジュネ 141、ロマ 8:26,27、コロ 3:1～5、I コリ 13:12。

神の御前に誠実に生きるとは、何よりもまず、私たちがへりくだって神とともに歩むことです。神の御前で、誇れることなどありません。私たちは、自分の罪も弱さもすべてを主の御前にさらけ出して赦しを乞い、しかし神の計り知れない赦しの愛の中を、安んじて晴れやかに生きるのです。

また、神だけが神でありますから、神ならぬものを必要以上に恐れません。御子をさえ惜

しまずに私たちにくださったお方に、すべてのことを期待し、すべてをただ御父からの賜物として感謝して受け・満足し・こだわりを持ちません。すべては恵みであり、すべてこの世のことから自由なのです。

私たちを誘ってやまない世俗主義への最も強力な抵抗は、祈禱です。真摯な祈りこそ、神が真の主であること、この方の御手の中に自分と世界の一切があることの告白です。祈禱には、ただお一人の神への賛美と感謝、自らの罪の告白や嘆き、また隣人への愛のとりなしが含まれます。御子イエス・キリストにより「父よ」と呼びかけ、聖霊のとりなしによっていっそう確実に聞かれる祈りの交わりは、私たちが生ける神の御前で全生活を整える最も確実な道なのです。神の御前で生きるとは、この祈りの姿勢を生きることにはなりません。

こうして私たちは、地上のものに心引かれることなく、天上のお方へと心を高く上げるのです。私たちの主であられるキリストとの目に見えない、しかし確かな絆は、やがて御許へと引き上げられ、顔と顔とを合わせて主とお会いする時の保証となります。その日、この方のみが真の神であられたことをはっきりと知ることになるでしょう。

4. 神のかたち（第二戒）

第二戒

「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える」。

チャップリンの映画に『街の灯』という作

品があります。チャップリン扮する浮浪者は、想いをよせた盲目の花売り娘のためにあれこれ尽くすのですが、娘はそれが金持ちの紳士だと思い込んでしまいます。やがてチャップリンが手渡した大金のおかげで視力が回復した娘は、ある日偶然恩人と再会します。ところが娘は、目の前にいる浮浪者がその人だとは気づかないのです！

第二戒が求めていること

自分が愛される側になってみればすぐにわかることですが、相手がどんなに愛を示してくれたとしても、それが真の「わたし」に対してでなかったならどうでしょう。本人が目の前にいるのに、写真や像に対して愛を語っていたらどうでしょう。あるいは、頭の中で勝手に造り上げた「わたし」のイメージを愛していたらどうでしょう。たといそれがどんなに深い愛だとしても、「わたし」への愛と受け止めることは困難ではないでしょうか。

第二戒が求めていることは、まさにそういうことです。私たちを愛してくださる生ける真の神を、この方にふさわしい仕方で愛することなのです。

像を造ってはならない

出32、申命4:15, 16、ヨハ4:24、ウ小50

神の像を造ってはならない最大の理由は、神のお姿が見えないからです。しかし、見えないからということ、見えないから造るという理由にもなります。事実、地蔵にせよ仏像にせよ、像そのものを拝んでいるわけでは必ずしもないでしょう。それらを通して見えないものに対して手を合わせているのだ、ということもできます。それでは、像を造ることの本当の問題は何なのでしょう。

出エジプト記32章の物語は、まさにこの問題を巡るお話です。イスラエルの人々は決して異なる神々を礼拝しようとしたのではありません

んでした。あくまでもエジプトから導き出してくださった神を礼拝しようとしたのです。けれども、問題は、彼らが見えない方を自分たちの考えたイメージに造った点にありました。彼らは、神を自分たちの理解できるもの・扱えるものにしたのです。神に従うよりは、神を自分たちに従わせたのです。

神が霊であられるのなら、私たちも「霊と真理をもって」礼拝しなければなりません。別に言えば、このお方にふさわしい仕方では礼拝しなければならない、ということです。たとい見える像を造らなくとも、私たち人間の心の中にはいくらでも偶像は生まれるものです。ふさわしい仕方では礼拝するためには、ですから、神御自身がお示しくださった方法を知ることが必要です。その他の方法は（たといどんなに優れた方法であったとしても）このお方を真に愛する方法とはならないのです。

“神”をあらわすもの

詩編 19、ウ小 4、ロマ 1:19, 20, 23、ヘブ 1:1, 2、ヨハ 1:17, 18、コロ 1:15。

事実、神は、私たち人間が神を正しく知ることができるようにと、様々な方法で御自分を啓示なさいました。

第一に、この大自然です。「大空は御手の業を示す」と言われるように、自然界は神の力・荘厳さ・美しさ・優しさ・厳しさ・豊かさ等々、多くのことを現す鏡です。けれども自然は、あくまでも鏡であって、神御自身ではありません。また、人の主観でいかようにも誤解される危険があります。

そこで第二に、神は、御言葉を通して御自身をお伝えになりました。神の言葉である聖書自身がはっきりと神を啓示しています。自然界を通してぼんやりと現された神のイメージが、より明瞭に誤解することのないよう教えられます。

けれども第三に、神は、時至って御子をお遣わ

しになり、御子を通して御自身をあらわすことをよしとされました。私たちの主イエス・キリストこそ、見えない神の完全な現れです。とは言え、それは、神の顔かたちが示されたということではありません。聖書は不思議なほど、イエス様のお姿に関わる情報を伝えません。肉体を取って神を現されたというのは、ですから、その外形のことではなく、目には見えない神の「恵みと真理」が主イエスによって具現されたということなのです。

したがって、私たちの神にふさわしい礼拝とは、そのような目には見えない神とその恵みが生き生きと実感され、主のみを仰ぎ見るような礼拝、と言えるでしょう。

生き生きとした礼拝

ウ大 108、ジュネ 144～148、列王上 7:13, 14、イザ 40:18～25、ハイデル 98、ガラ 3:1、詩編 103:8～13。

第二戒は、神を象る礼拝の禁止であって、必ずしも芸術活動全般を禁止しているわけではありません。芸術には芸術自体の価値があり、それは神が人に賜った恵みの一つでありましょう。しかし、音楽にせよ絵画にせよ、表しているのは真理の一面であって、すべてではないことを心に留めなければなりません。

宗教改革者たちが厳しく偶像礼拝を禁じたのは、芸術否定のためではなく命なき礼拝に対する批判からでした。私たちが心を傾けるべき生ける真の神は、物言わぬ偶像によってではなく、御言葉の生きた説教によって教えようとなさるからです。命なき偶像や絵画が恥ずかしく思えるくらい生き生きとした御言葉が語られること。まるでその場に神がおられるかのように（事実、おられる！）説教がなされ、賛美や祈りが捧げられるためです。

それでも悟りの鈍い私たちのために、神は礼典をお与えくださいました。洗礼と聖餐を通して、神の恵みと真理を手で触れるくらい具体的

に示してくださったのです。そうであれば、私たちは、神を現すためにそれ以上像を造り出す必要はない。少なくとも、生き生きとした礼拝に偶像など入り込む余地はないはずです。

私たちの神は、自ら「熱情の神」とおっしゃいます。まるで神がおられないかのように「否む者」にはその罪を三四代までも問うと言われますが、神を愛してその戒めを守る者には幾千代にも及ぶ慈しみを与えると約束なさいます。つまり、神は溢れんばかりの恵みを注ごうとしておられるのであって、私たちが小手先の造り物で満足してしまうことに我慢がならないのです。私たちの主は、そこまで私たちからの愛を求めておられる「熱情の神」です。吹けば飛ぶような罪人の心をひたすら求める方なのです。

神の像となる

創世 1:27、60 周年、ヨハ 4:24、ロマ 12:1, 2、

I ヨハ 4:12, 20、マタ 25:40。

生き生きとした礼拝は、私たち人間を生ける神の姿へと造りかえる力を持っています。神の像として造られたにもかかわらず、罪によって壊れてしまったこの“像”を回復させるのは、キリストの御霊のみです。キリストにならい、生ける神を愛し隣人を愛することにより、私たちはキリストに似た神の像へと造りかえられて行くのです。

実際、目に見える兄弟を愛せなくて、目に見えない神を愛することはできません。偶像などではなく、神のかたちを担う一人一人の隣人を具体的に愛し仕えていくことこそが、「霊と真理」による礼拝と言うこともできるでしょう。「最も小さい者」の一人にしたことが実は主に対してなされていたことを、私たちは終わりの日に知らされるであります。



聖書默想・説教展開例・分級展開例

テキスト	ヨハネによる福音書 4章43～54節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問6
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問2,3

問6 まことの神さまを知り、神さまと共に歩む道は何によってわかりますか。

答 神さまの言葉である聖書によってです。御言葉は私たちの道の光です。

〈カテキズム解説〉

問6は、前回と今回の二回に分けて扱います。特に今回は後半部分「御言葉は私たちの道の光です」の部分に焦点を当てて扱います。前回のカテキズム解説も合わせてご覧ください。

私たちが聖書に絶対的な信頼を置き、聖書の示すところに従うのは、聖書が人を従わせる権威を持ったものとして受け入れられるからです。そしてその権威の根拠は、聖書が神の言葉であるからです。もちろん「神の言葉」であるということは、単にその文章が神によって語られた体裁を取っているとか、その文章の内容が神や、イエス・キリストについて語っているという外面的なことだけを意味するものではありません。聖書自身が「わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げわたしが与えた使命を必ず果たす」（イザヤ書55:11）と述べ、神の言葉は神の言葉であるがゆえに、必ず実現することを宣言しています。聖書が神の言葉であると告白することは、その言葉がむなしく戻ること無く、必ず神の望むことを成し遂げ、使命を果たすと確信するということです。

私たちが、神の言葉によって、神を知り、神と共に歩む道をわかろうとするならば、神の言葉である聖書は必ずその道を示し、その歩みを支えてくださるのです。

「道の光」という表現は、カテキズムの参照聖書箇所として挙げられている詩編119編に出て来る表現です。人生の道を歩むために、人は光を必要とします。光が無ければ、私たちは自分が今ど

こに立っていて、どちらに向かって進むべきかを知ることができません。光を手にしなくて歩むのは、自らに滅びを招き寄せる愚かな行為です。私たち人間は、自分の判断で進むべき道を選び取り、自分の努力でその道を切り開いていくことが好ましいと考えがちです。けれども聖書は、私たちがそのように自分の力だけに頼って人生を選び取っていかうとする事が徒勞であり、愚かなことであることを指摘します。御言葉の光で自らの行く先を見通すことこそ、唯一の確かな方法なのです。

神の言葉が、このように唯一の、そして全く確かな私たちの導きであるということを聖書は数々の証言で自ら明らかにしています。その導きは、必ずしも私たちの理解の範囲に収まるものではなく、願いのとおりととは限りません。御言葉に従った結果、苦難や不条理を経験しなければならないことも少なくないでしょう。けれども聖書の証人たちは、そのような苦難や不条理に向かい合っても、神の言葉の確かさを放棄しません。不条理な出来事の意味を求めて神に訴えたり、苦難からの救出を求めて嘆いたりしますが、それでもなお「神の言葉に導かれよう」と言う思いは揺るがないのです。

神の言葉に導かれることが、このような不条理の中での信頼を要求するものであることは、ある程度の年齢に達した子どもであれば分かることです。けれども礼拝のメッセージの中ではあまりその点を補おうと言葉を重ねる必要はありません。むしろはっきりと確信を打ち出して「道の光の確かさ」を明らかにするように心がけることがふさわしいでしょう。それぞれの子どもの現実生活での思い煩いや不安に対しては、別に分級など

の場で向き合うことをお勧めします。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

今日の箇所は、冒頭で直前の「イエスとサマリアの女」や2章の「カナでの婚礼」「神殿から商人を追出す」等の一連のエルサレムでの活動が改めて指摘されています。この指摘によって、この箇所は改めて福音書のこれまでの流れを意識し、その意味を踏まえた上で読むようにされています。

「カナでの婚礼」やこの「役人の息子をいやす」物語は「しるし」と呼ばれており、イエス・キリストが「神の言」であり「光」であることの証拠とされています。イエス・キリストが神の言であることは、実際に証明される現実なのです。しかしそのしるしを示された人びと、本来救い主を受け入れるべきユダヤの民、エルサレムの人びとはイエス・キリストを拒絶します。45節でガリラヤの人びとが「イエスを歓迎した」とされつつ、イエス自身は「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」と指摘するのも、「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」(ヨハネ1:11)の実現なのです。

その一方、サマリアの人びとは救い主を受け入れます。光が現実のものとなったとき、本来受け入れるべき人びとが拒絶し、思ってもいない人びとが受け入れる。そこに何が起こっているか指し示すのが今日の箇所です。

ここで言う「王」は、ガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスのことです。(参照ルカ3:1、19他)またカナとカファルナウムは40キロ程離れており、移動には一日程度かかったと思われます。

彼は他のガリラヤの人たちと同様エルサレムでのイエスがなさったことを知ったと思われます。つまり、上述のように、真の意味でイエス・キリストを受け入れたのではないと思われます。その理由について、イエスは今日の箇所で、人びとが「しるしや不思議な業を見」て信じていることを指摘します。イエスが王の役人に与えたのは「あなたの息子は生きる」という言葉でした。そして、この役人が信じて帰途についたそのときに、この言葉は事実として実現するのです。

「しるし」は確かに光であるイエスを指し示す証拠ですが、しるしの本質は言葉であり、言葉こそが救いを現実のこととして実現する、のです。言葉こそが救い主そのものであって、私たちはその言葉を受け入れる事を教えているのです。

〈子どもたちに対して〉

現代の社会は、客観的な物的証拠で大多数の人がその因果関係を承認できる論理が正しいこととされます。子どもたちは素朴な形ではありますが、逆にそれだけ根深く、世界は明白で客観的な因果関係で成り立っていると考えます。実際はさまざまな迷信が根強く残っているにもかかわらず、同時に目に見えないものに価値を見出そうとしない傾向があります。

そんな現代の子どもたちに、目に見えない言葉への信頼を伝えるには、語るもの自身がその信頼に固く立ち、その信頼を表明するしかありません。誰でも承認できる差し障りの無い理論ではなく、自身が受け入れた「言葉の実現」を語ることができればと思います。

(長田詠喜)

テキスト

ヨハネによる福音書 4章43～54節

教理問答

子どもと親のカテキズム 問6

参照教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問2,3

〔単元のねらい〕

神の言葉を人生の道しるべとするということは、わたしたちがその言葉の示す所に完全な信頼を置くということを意味します。相手が信頼することができるかどうか確かめるとき、わたしたちは客観的な証拠を求めます。けれども神の言葉は、目の前において客観的にその真偽を確かめるというものではありません。わたしたちがその言葉に耳を傾け、その言葉を受け入れるならば、力ある神の言葉は確実にわたしたちに働き、わたしたちを支え導いてくださるのです。このことを確信できるように語ります。

言葉が働く**イエス様の噂を聞いた人たち**

イエス様は福音書の中でたくさんの奇跡を行い、たくさんの教えをされました。人びとはその奇跡や教えに驚きました。ある人びとはかえってイエス様を拒絶しましたが、多くの人びとがイエス様を歓迎して受け入れました。

イエス様は、最初のしるしとしてガリラヤのカナで水をぶどう酒に変える奇跡をなさり、その後エルサレムに行くと、神殿で商売をしている商人たちを追ひ払いました。これらのイエス様のなさった不思議なしるしや業は、人びとの噂になり、イエス様がエルサレムからガリラヤ地方に帰って来ると、その噂を聞いたガリラヤの人たちがイエス様を歓迎いたしました。

そんなところに、当時の王、領主ヘロデ・アンティパスに仕える役人がやってまいります。この人には息子がいましたが、その息子が重い病気にかかって、今にも死にそうになっていました。役人はイエス様の噂を聞いて、息子を癒していただく、カファルナウムからやってきたのです。カファルナウムからイエス様のおられるカナまでは、歩くと一日程度かかったようです。それでも役人は、イエス様が息子のところに来てくださるならと自らイエス様に頼みにやってきました。もしイエス様が自分と一緒に息子の所にやって来て、手を置いてお祈りしてくださったり、何か不

思議なできごとを起こしてくださったなら、息子の病気が治るに違いないと信じたのでしょう。イエス様にカファルナウムまでやって来てくださるように願うのです。

言葉を受け入れる

しかしイエス様は「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言い、役人と一緒に行こうとはしません。確かにしるしや不思議な業は私たちを驚かせ、イエス様が他の誰も持っていない力を持ったお方であることを指し示します。しかし、それは単に指し示しているだけで、つまりこちら側から指差しているだけで、イエス様の本質そのものではありません。私たちがイエス様に救っていただくときに一番大切なのは、そういうしるしや不思議な業ではありません。そのしるしや不思議な業が指差しているイエス様そのものを受け入れることが大切なのです。

ヨハネによる福音書はその最初でイエス様について「神の言」「命の光」とあると言っています。イエス様は神の言葉なのですから、わたしたちは何よりそのイエス様の言葉に耳を傾け、その言葉を信頼し、従うのです。そうやってイエス様の言葉を受け入れるそのときにその言葉は実際に私たちに実現するのです。

言葉は働く

役人はイエス様がおっしゃった「あなたの息子は生きる」という言葉を信頼し「帰りなさい」というイエス様の言葉に従って、イエス様をお連れせずに自分だけで、来た道を帰っていきます。しかし役人が家に帰り着く前に、しもべたちがやってきて、役人の息子が生きていること、病気が良くなったのがまさにイエス様が「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを告げます。イエス様がおっしゃったとおり、「あなたの息子は生きる」ようになったのです。しかもイエス様の言葉は、言葉として発せられたその時点で、その言葉を携えて帰る父親よりも早く、まだその言葉を聞いていない息子に届き、働きました。神の言葉がどんなに確かなものか、その実現がどれほど確実なものかが分かります。少しも待たせることなく、少しも心配させることなく、人間によってその言葉が伝えられるよりも早く、神の言葉は確実に実現するのです。

更に大事なことがあります。父親の役人がイエス様の言葉を伝えるよりも先に息子の病は治ってしまったということは、イエス様の言葉はその言葉が働く相手がどこの誰であろうと、どんな人であろうと実現するということをあらわしています。先程の所でイエス様は、人びとがイエス様の言葉を受け入れるようにと教えられたことを見ました。けれども、この役人の息子は父親からイエス様の言葉を聞くよりも先に癒されてしまいます。イエス様の言葉は、癒していただく人がその言葉を聞かないと、その言葉を信じて受け入れないと、相手を癒すことが出来ないというものではありません。

もちろん、イエス様は人びとにその言葉を受け入れ、信じるように求めるのですが、人間が受け入れたから神の言葉が働くではありません。人がイエス様の言葉を受け入れる前から、神の言葉は人間の救いを実現することができます。そして

むしろ、神の言葉が力強く働くからこそ、人間はその言葉を聞き、その言葉に従うことができるのです。

光の言葉を掲げる

ちょうどその様子は、高く掲げたともし火の光のようです。私たちが光のことを知らなくても、光を見ないようにしても、高く掲げられた光は私たち自身と私たちが見ている範囲を明るく照らします。信じなければ輝かない、がんばって受け入れなければ明るくしない、そんな光はありません。いつでもどこでもどんなときでも、光は掲げられさえすれば、周りを照らし、私たちが今いる場所がどんな場所なのかを明らかにし、私たちが進む方向に何があるのか、どちらに進むべきなのかをはっきりと示します。その光のように神の言葉は、確実に私たちを照らし、私たちが今どこにいるのか、どこに向かわなければならないのかを教え、私たちがそちらに向かって進んでいけるように手を引いてくれるのです。

イエス様の言葉は私たちが生きていく道を照らす光です。私たちは自分が努力して生きていくと思いがちです。けれどもイエス様の言葉に照らしてもらわなければ、私たちは真っ暗闇の中に立っているようなもので、どちらに進んだら良いのか、自分の立っているところは安全なのか、全く判らないのです。けれどももし、私たちがイエス様の言葉を聞かなければ、その言葉は私たちを確実に照らし、私たちがどこにいるのか、どちらに向かって歩かなければならないのかを教え、更には歩いていくための力さえ与えてくださるのです。

灯りを持っても明るくならないんじゃないか、周りが見えないんじゃないか等と心配する必要はありません。私たちがするのは、ただ聖書の言葉、神の言葉に耳を傾けることなのです。そうすれば、どんな力よりも強く、早く、神の言葉は私たちに働くのです。(長田詠喜)

〔今週の暗唱聖句〕 詩編 119編105節

あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯。

〈ねらい〉

神様の言葉は必ず実現することを教え、その御言葉を信じて歩んで行こうと励ます。

〈展開例〉

Q. みんなはどんな時に約束をしますか。

A. 友達と遊ぶとき。宿題やそうじをすると親に約束する、など……。

Q. ではその約束をいつも守れるかな。

A. だいたい守れるかもしれませんが、約束を破ってしまうこともあるかもしれません。待ち合わせの時間に遅れたり、やると言っていた宿題をやらなかったり……。そのようにわたしたちの言葉は不確かなものです。

Q. では神様の言葉はどうでしょうか。同じように守られないこと、実現しないことがあるのでしょうか。

A. いいえ。神様の言葉は人間の言葉と違って確かなものです。それは必ず実現する力ある言葉です。

Q. そのことが今日の聖書のお話でも教えられていました。ある王の役人がイエス様のところに来て、あることを頼みましたがそれは何だったのでしょうか。

A. 自分の家に来て、死にかかっている自分の息子をいやしてほしいということ（ヨハネ4:47）。

Q. イエス様は最初、どのようにお答えになりました。

A. 「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」（ヨハネ4:49）

Q. それはある意味で厳しいイエス様の言葉ですね。でもこの役人は必死に頼み続けました。するとイエス様は何とおっしゃいましたか。

A. 「帰りなさい。あなたの息子は生きる」（ヨハネ4:50）

Q. その言葉を聞いて役人はどうしましたか。

A. イエス様の言葉を信じて帰っていった（ヨハネ4:50）。

Q. そうですね。その役人は自分の目で息子が癒されることを見たわけではありませんでした。ただイエス様の「あなたの息子は生きる」という言葉を聞き、それを信じて、帰っていったのです。ではその後、どうなりましたか。

A. 彼が帰って行く途中に、息子の病気が良くなったことを知らされた。それはイエス様が「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻だった。こうしてこの役人と家族もみんなイエス様のことを信じるようになった。

結論：

このようにイエス様の言葉は発せられたその時に実現していたのです。それはイエス様の言葉が神様の言葉であり、権威と力を持っているということです。わたしたちはこの神様の言葉をこそ信じて、歩んでいきたいと思えます。

わたしたちの目にはいろんなものが映ります。またわたしたちの耳にはいろんな声が聞こえてくるでしょう。しかし、本当に確かなものはイエス様の言葉であり、神様の言葉です。だから、神様の言葉こそ「わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」なのです。神様の言葉を信じ、それによって道を照らされ、導かれて歩んでいきましょう。

【目標】

信じる根拠について考える。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む

①何を根拠として私たちは信じるのか？

ヨハネによる福音書4章48節。「イエスは役人に『あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない。』と言われた。」この言葉は、ガリラヤの人々は、主イエスが行われたしるしや不思議な業を見たから、主イエスを歓迎したことを示している。そこでは、信じさせるために、それなりの権威を見せなければならないということが前提とされている。議員バッチのようなものや、警察手帳のようなものや、あるいは王様がかぶる冠や腰に差す刀のような、目に見える、分かり易いかたちで力を示すしるしが、そこでは必要となる。では私たちは、何をきっかけにして、何を根拠にして、信ずるのか？何か目に見えるしるしや保証があるから信じるのか？あるいは何かの奇跡を見たから信じるのか？

②役人の信じ方

ヨハネによる福音書4章50節。主イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」この主イエスの重みのある言葉を受けた役人には、その言葉の前に、黙して服する以外に道はなくなっている。そして、彼が帰っていく様を、聖書は極めて簡潔に、「その人は、主イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。」と記している。

ここに、役人が信じた、という事柄が生起している。権威ある証拠や奇跡抜きで、主イエスの御言葉を信じ、自分の存在が神様の思いのままに、御言葉を通じて運ばれていくような生き方、この信じ方で信ずるべきことを主イエスは示された。

③御言葉を信じた結果としての奇跡

奇跡や権威は、信じる根拠ではなく、主イエスの言葉がもたらす実りであり結果である。信仰を持った人の歩みは、たとえ平凡な歩みであっても、それは神様の業の現れる、奇跡の連続であると言うことさえできる。そこでは予測を超えた神の業が、信じる者と通じて現される。実際、主イエスを信じたこの役人の家族も信仰へと導かれた。この役人は主イエスを信じることによって、息子の病が治るという奇跡を味わい、そればかりか、家族全員が、イエス・キリストによる死からの救い、永遠の命のあずかるという奇跡にもあずかることができた。私たち一人一人が信ずるということは、決して軽いことではない。そこから神様は、私たちの思いを超えるようなしるしを与えてくださる。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身が、何をきっかけにして、何を根拠にして、信じたのか？自らに問い、その経験を証する。

Q：疑問は解けましたか？

Q：あなたは神様の存在を信じていますか？

Q：神様を信じている、信じていないにかかわらず、そう考える根拠は何ですか？

Q：奇跡というものは起きると思いますか？あれは奇跡だったと思えるような経験はありますか？

1. 靈感された神の言葉

「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ」(16節) ている。これが聖書靈感ということの意味である。聖書がほかの書物と全く異なっているのは、聖書が神の言葉であるという点にある。聖書が神の言葉であるとは、聖書の真の著者は聖霊であられるということである。

もちろん、聖書が多くの人びとの手によって書かれたという点では、聖書の著者は人間であるとも言い得る。しかし、聖書の真の著者は聖霊であられる。聖霊が聖書記者たちの背後で働かれ、聖書をまさに神の言葉として書き記すことができるように(しかも、彼らの経験や賜物やパーソナリティーを十分に生かし用いるしかたで)守り導いてくださったのである。

聖書は旧約39巻、新約27巻、計66巻からなる。この66巻の聖書が正典として完結するまでには、もちろん長い時間を要した。聖霊は、そのすべてのプロセスを守り導かれた。それゆえ、聖書はその全体が神の言葉である。部分的に神の言葉であったりなかったりということはない。聖書は最初から最後まで、創世記から黙示録まで、十全しかたで神の言葉である。

2. 聖書の確かさ

聖書を聖書たらしめるための聖霊の働きは、今は止んでいる。聖書は66の書物で完結し、もはや新しい書が付け加わることも、66巻から除かれることもない。

そして聖書にまつわる聖霊の働きには、もうひとつの局面がある。靈感され、完結された66の書物を用いて、人びとを救いに導く働きである。聖霊は聖書を読む者の心に働きかけ、その心を照らし、キリストを信じる信仰に導き、永遠の命の祝福へと招いてくださるのである。

この面の聖霊の働きを考えると、聖書がまさに靈感された書物であるということが大切な意味をもつことが理解されるであろう。つまり、

聖書が靈感された神の言葉であるからこそ、聖書を通して人が救われていくその救いも確かだからである。聖書が人間の文書にすぎないとしたなら(あるいは、部分的に人間の言葉も混じっているということであったとしても)、わたしたちの救いははなはだ心もとないことになってしまうであろう。聖書が「神の霊の導きの下に書かれ」たこと、この聖書を用いて聖霊が救いのみわざをなしとげていかれること、いずれの面も重要である。

3. 聖書の内容

問7 聖書が語っていることは何ですか。

答 聖書は、まことの神さまがどのような方であり、私たちのために何をしてくださったか、また神さまと共に歩むとはどのようなことかを語っています。

(子どもと親のカテキズム)

神の言葉である聖書は、信仰と生活の唯一の規準である。神は聖書を通して、ご自身がどのようなお方であるのかを語り示される。ご自身の救いの真理についても教え示される。そして、わたしたちがご自分を信じ、ご自身に従って生きる道、命に至る道をも示してくださる。

それゆえわたしたちが神を正しく知り、信じ、あがめるために、聖書は不可欠である。どのように信じ、どのように生きるか。その両面において、聖書はわたしたちにおけるただひとつのものさしである。人間の命と人生に関するすべての答えが聖書にある。

創立宣言の第一の主張は「有神的人生観・世界観」である。世界と人生におけるあらゆる領域において聖書の言葉に聞き従うという姿勢が、そこに表明されている。この部分は聖書に従うが、別の部分ではこの世の知恵や人間の思惑に沿うというのではない。

聖書は信仰と生活の唯一の規準であるゆえに、わたしたちはそれに見合った姿勢を貫く。あらゆる

る局面において聖書をはかりとするのである。主の日のみならず、六日間のいとなみにあっても—家庭でも職場でも学校でも、政治、経済、文化、芸術、そのあらゆる場所において聖書の真理に聞き従うのである。

4. 神の愛の言葉

聖書は神の愛の言葉、神から人間への愛の手紙である。神の愛は、聖書全巻が証しする（ヨハネ 5:39）お方であり、特別啓示の頂点であられるイエス・キリストにおいて、このお方の十字架と復活のみわざにおいて示された。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」

（ヨハネ 3:16）

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります（ヨハネ 4:10）」

自分のために命を捨てるほどに、自分を愛してくださるお方がおられる。このことをわたしたちは聖書を通して知った。そのお方と、聖書を通して出会った。この事実を知ってしまったなら、わたしたちは単純素朴にそのことを喜ぶほかはないであろう。この愛に感謝し、この愛を喜んで生きるほかはないであろう。

聖書を読むことは、キリスト者にとって大きな喜びである。聖書のどのページにも、神の愛があふれている。聖書に親しめば親しむほど、いよいよ聖書はわたしたちにとって慕わしい書物となっていくのである。（木下裕也）



テキスト テモテへの手紙二 3章15～17節

(単元のねらい)

聖書テキスト（テモテニ3:15～17）から、とくに聖書靈感の教理に主眼を置く展開とした（その上で、聖書が信仰と生活の唯一の規準であること、聖書が愛の書物であることにも触れている）。聖書が神の言葉である（靈感されている）ゆえに、救いの確かさが揺るぎないものであることを学び取りたい。

聖書—神の御言葉

私たちは聖書に親しんでいます。主の日の礼拝でも聖書が読まれます。毎日の家庭礼拝でも、聖書が読まれます。ところで、聖書はほかの書物とひとつの点で全く異なっています。それは、聖書は神さまの御言葉であるという点です。

そのように言うと、聖書は人間が書いたのではないの、マタイやマルコやヨハネ、パウロといった人たちが書いたのではないの、そのように質問する人たちがいるかもしれません。そのとおり、聖書は人間たちの手で書かれました。旧約聖書、新約聖書をあわせると、聖書を書くことにたずさわった人びとはおびただしい数になるでしょう。

けれども、聖書の本当の著者は聖霊なる神さまです。聖霊なる神さまは、聖書を書いた人びとの背後でお働きくださって、彼らが聖書を真に聖書として書き記すことができるように守り導いてくださったのです。

聖書は旧約39、新約27、あわせて66の書からなります。聖書66巻ができあがるまでには、長い長い時間がかかりました。そして聖書を書いた人びともさまざまでした。生きた時代も、育った環境も、性格も、賜物もことなっていました。考えてみれば、おたがいにまとまりのない、ばらばらの書が寄せ集められたようなものになっても不思議はなかったのです。

それでも、聖書の66の書物は見事なまとまりと調和をもっています。聖書の目的はひとつです。それは「人を救いに導く」（テモテニ3:15）ことです。すべての書が、このひとつの目的に沿っています。また、聖書はただひとりのお方をさし示

しています。それはイエス・キリストです。「聖書はわたしについて証しをするものだ」（ヨハネ5:39）すべての書がイエスさまを指さし、イエスさまこそ罪人を罪から救い、永遠の命を与える救い主であられることを証言しているのです。

そのように聖書がひとつの目的をもち、美しい調和を保っているのは、聖霊なる神さまが聖書が完成するすべての道筋を守り導いてくださったからこそです。聖書の真の著者は神さまです。聖霊が人間たちを用いて、みずから聖書を書かれたのです。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ」（テモテニ3:16）たというのは、そのような意味です。

聖書はそのような意味で、神さまの言葉です。66巻のすべてが神さまの言葉です。だからこそ、聖書を通して私たちをお救いくださる、その神さまの救いのみわざは確かです。もし聖書が人間の言葉にすぎないとか、ここは神さまの言葉けれども、この箇所は人間の言葉だということになってしまったら、私たちは聖書を通して本当に救われるのかと心配になるでしょう。

その心配は無用です。聖書は神さまの言葉です。聖書には、私たちを救う確かな力があるのです。

聖書はまた、私たちの命と人生の道しるべです。聖書の御言葉に導かれて、私たちは迷うことなく神さまの道、救いと命の道を終わりまで歩み続けることができます。

問7 聖書が語っていることは何ですか。

答 聖書は、まことの神さまはどのような方であり、私たちのために何をしてくださったか、また神さまと共に歩むとはどのようなことかを語っています。

(子どもと親のカテキズム)

神さまは聖書を通して、神さまがどのような方であるのかを語り示してください。救いの真理についても教え示してください。そして、私たちが神さまを信じ、神さまに従って生きる道、命に至る道をも示してください。

ですから、私たちが神さまを正しく知り、信じ、礼拝するために、聖書が欠かせません。神さまをどのように信じるのか。神さまのもとで、どのように生きるのか。そのどちらをも、私たちは聖書から知ることが得ます。人の命と人生に関するすべての答えが、聖書にあるのです。

聖書は、神さまから私たちへの愛の手紙です。聖書を読むとき、私たちの心は喜びに満たされま

す。なぜなら聖書を通して私たちは神さまと出会い、神さまがイエスさまの十字架と復活のみわざを通して示してくださった限りない愛を知らされるからです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」

(ヨハネ3:16)

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」

(ヨハネ4:10)

聖書は喜びの手紙です。聖書のどのページにも、神さまの愛があふれているからです。聖書を学べば学ぶほどに、神さまが私たちをどれほど愛しておられるのかがわかります。そして私たちは、聖書に示された神さまの愛の命に生かされて生きるのです。

(木下裕也)

〔今週の暗唱聖句〕 テモテへの手紙 二 3章15,16節

また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。

この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。

聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、

義に導く訓練をするうえに有益です。

〈ねらい〉

聖書は聖霊の導きによって記されたものであり、それを通して神さまを知り、神さまと共に歩む道を知ることができるということを知る。

〈展開例〉

Q. みんなは普段どんな本を読むかな。

A. 絵本。学校で借りた本。マンガなど。

Q. では教会で読まれている本は何ですか。

A. 聖書

Q. そうですね。それはなぜでしょう。聖書は他の本とどう違うのでしょうか。

A. 聖書には神さまの言葉が記されている。

Q. でもよく考えると聖書も一つ一つの文書は人間によって記されています。聖書を書いた人の名前を知っていますか。

A. 新約聖書で言えば、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロなど。

Q. ではそのような人間によって書かれた書物がなぜ神さまの言葉なのでしょう。

A. それは聖書が神さまの霊（聖霊）の導きの下に書かれているからです。聖霊が聖書を書いた人たちを守り、導いて神さまの言葉を書き記させたのです。だから聖書の本当の著者は聖霊であり、神さまなのです。

Q. ではその聖書にはどういうことが書いているのでしょうか。カテキズムの問7をもう一度

読んでみましょう。

A. 「聖書は、まことの神さまがどのような方であり、私たちのために何をしてくださったのか、また神さまと共に歩むとはどのようなことを語っています」。

Q. みんなは学校でいろんなことを勉強します。それはそれで大切なことです。でもそれよりもっと大切なことがあります。それは何でしょうか。

A. それはわたしたちが本当の神さまを知って、神さまと共に歩んでいくことです（問1、2）。そのために聖書は必要なのです。わたしたちが何を信じて生きていくのか。そしてどのように生きていけばいいのか。聖書がわたしたちに教えてくれるのです。

Q. 聖書はいろいろな時と場所において書かれたのですが、聖書全体はあるお一人の方を証しています。それは誰のことでしょうか。

A. イエス・キリスト。

結論：

そうですね。わたしたちは聖書が証しするイエス・キリストを信じることによって救われるのです。神さまはわたしたち罪人がイエスさまを信じて、救われ、神さまと共に歩んでいくために聖書を与えて下さいました。その意味で聖書は神さまがわたしたちに送ってくださった愛の手紙とも言えるのです。

これからも一緒に聖書に記されている神さまの言葉を聞いていきましょう。

【目標】

聖書とは何かを知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 聖書と他の本との違いについて考える

Q1：聖書の作者は、多様でその国籍も様々、執筆年代にも幅があり、執筆地も多様。しかしなおかつ、伝えているメッセージは統一されている。こんな書物が他にあるだろうか？

A：他に類を見ない。

Q2：聖書は一度読んでしまえばそれで終わりではなく、同じ言葉を何度も読んだり、説教したりということが起こる。なぜか？

A：聖書は、今も生きておられる神様からの、今を生きる私たちに対する生きた語りかけの言葉であるので、いつも新しい言葉として受け取ることができ、何度も繰り返し、しかもその時にその都度新しい言葉として読むことができる。

Q3：「聖書は人生の土台である」とは、どういうことか？

A：他の本は、人生を歩むためのヒントになる場合があり、人生に色々な色合いをつけたしていくという意味での豊かさを増し加えるものにはなるが、その上に人生を載せることができるような土台になることができるのは、聖書のみである。

マタイによる福音書の次の言葉は、その事実を指し示している。「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。」（7:24）

聖書は、何か参考になる明言・名句だとか、ためになるイエス語録だとかいうものではなく、その言葉そのものが、他の言葉とは比べものにならない神様からの直接の語りかけであり、それは人生を支える岩であると言われている。「これらの（聖書の）言葉を聞いて行う」、人生の土台、人生の軸に、聖書の言葉を据えて、絶えずその言葉に向き直って、人生の様々な場面を生きるということ。それは、私たちが出会うすべてのことを、土台である主の御言葉と関係させて、生きるということ。

Q6：聖書の言葉は、どこで力を発揮するのか？

A：先程のマタイによる福音書では、家（人生）が嵐に遭うことが想定されている。確かに、天気の良い時、晴れが続く時は、人生の土台ということはあまり問題にならない。聖書の言葉ばかりを見なくても、自分の尊敬している人の書物や、愛読書の方が、よっぽど人生の足しになるように思える時がある。しかし、嵐がやってくる時がある。人生の嵐が、本当に地震などの天災として来る場合もあれば、学校生活のこと、恋愛のこと、家族にも言えないような悩みとして、また大きな挫折として、それが来る時もある。一体どう生きればよいのかと問いつつ、その答えが自分では分からない時、誰も責任ある答えを出せないことがある。どんな愛読書の言葉にも、その言葉の背後に、この私に対する責任はない。人生の土台についてのこの種の問いは、自分を誰よりも知っていて、この私についての責任を負っていて、私を誰よりも大切に愛してくださっている方に答えていただくのでなければ、満たされない。そういう時に、聖書の言葉こそが、そこで力を発揮する。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身にとっての聖書と何かを証する。

Q：疑問は解けましたか？

7月19日 三位一体の神さま・人格としての神 聖書黙想

テキスト
教理問答

ヨハネによる福音書 第4章1～26節①
子どもと親のカテキズム 問8

※今回の黙想は、問8を二回に分けて扱います。
ぜひ、26日分と合わせてお読みください。

〈三位一体の神・対話する神〉

私たちは、これまで、カテキズムの第一部「信じて歩む道」の第一項「道の光としての聖書」を学んできました。ここで取り扱うのは、第二項「三位一体の神さま」です。

おさらいしましょう。問7において、聖書によってこそ、真の神がどのような方でいらっしゃるのか。私たちのために何をしてくださったのか。私たちはこの神さまと共に歩むようにと恵みによって救い出されていることを知ることができるのだと、三つの恵みの事実を確認しました。聖書がどれほど大切なものかが分かりました。聖書は、信仰の歩むべき道そのものです。そして、聖書を通して語り続けてくださる神とそのみ言葉は、その道を照らす光、いのちそのものです。

さて、問8～12は、いよいよ聖書が語り、証言する神とはどのようなお方なのかを問います。

問8は、二回にわけて取り扱います。今回は、「人格としての神」に焦点をあてます。神さまは、どのような方なのでしょう。答えは、最初に「目には見えない霊なる方」と定義づけます。主イエスはサマリアの女性に「神は霊である」(ヨハネ4:24)と語られました。神が霊的な存在でいらっしゃるということは、「目には見えない」ということです。私たちは肉体的な存在で目に見えるものです。しかし、神は、「不滅で目には見えない唯一の神」(テモテ1:17)でいらっしゃいます。しかし同時に、「目には見えない神の性質」(ロマ1:20)は、被造物に「現れている」とも言います。

いずれにしても、霊でいらっしゃる神とは、私どもとまったく「異質」のお方でいらっしゃるということです。いわば、「絶対的な他者」です。そもそも、人間は他者のすべてを理解することはできません。同じ人間どうし、兄弟や夫婦ですら相

手の気持ちを十分に理解することは不可能です。そうであれば霊でいらっしゃる神は、絶対的に理解できないお方でいらっしゃいます。目に見える世界の中で生きる私たち人間にとって、この真の神さまがとても分かりにくいのは、当然のことと言えます。そこで人間は、自分に都合のよいカミを考え出したり、自分に似せてカミを作ったりします。これが、偶像です。しかし、偶像は、しゃべれません。呼んでも応えません。偶像の前に立つ人間は、まさに空しい存在でしかなくなり、いよいよ、空しさを募らせるだけなのです。しかし、神に似せて造られた人間は、罪を犯して本来の姿を壊してしまっても、やはり、空しい偶像では満足できないのです。しかし、この空しさから自ら逃れる方法がありません。そこに人間の悲慘があります。そのとき、ある人間を神に祭り上げて、神に置き換える試みもなされます。しかし、それも空しいだけです。聖書は、神は徹底的に神でいらっしゃることを、つまり超越した存在でいらっしゃることを告げます。そして人間は徹底的に人間でしかありません。人間が神になる試みは、まことの神がもっとも嫌われることです。

それなら、絶対的に他者でいらっしゃる聖書の神は、私たちにとってただ遠くへたたったお方のままなのでしょう。違います。この神こそが、私たちを存在へと呼び出してくださったのです。何もなかったわたしに、いのちを与えてご自身の前に立たせてくださった神です。それは、私たちと対話を求めるためでした。私たちは神さまと「お話」するために生まれてきたのです。このように神ご自身が、他者でありながらも私たちとの人格的な交わりを求めてくださいました。こうして、私たちにとって誰よりも近い存在、それだけに慕わしい存在となってくださったのです。

カテキズムは、まことの神を、「『あなた』と呼

んで、お話しできる神さま」と言います。そこで、何よりも重要な前提を確認しておきましょう。確かに、私たちは、神さまをあなたと呼べるのです。しかしそれは、神さまの方から「あなた」とお呼びくださるからです。神は、「わたしの愛する子よ!」と呼びかけてくださるのです。それゆえに、私たちは神を「わたしのお父さま!」と応えてお呼びすることができるのです。こうして、神と私たちとは、顔と顔を向き合わせ、お話しする関係に招かれ、あずからせていただきます。これを、人格関係と呼びます。これが、聖書が言う霊でいらっしゃる神の特長です。神は、常に私たちに御言葉をもって呼びかけてくださるゆえに、私たちも「天のお父さま、『あなた』は、わたしを愛してくださるのですね。ありがとうございます」と呼びかけることができるのです。罪人のこの大胆な呼びかけを、神さまは至上の喜び、至福として聴いてくださるのです。

〈テキストの黙想 文脈〉

与えられたテキストは、サマリアの女性の物語です。過去、何度も扱ってきましたので、できれば既刊もご参照ください。

主イエスは、たった一人の女性、しかもサマリア人の女性を救おうとして、どうしてもこの地を通らなければならなかったのです。(4節) その時の主イエスは、旅に疲れておられたのです。よほどの疲労状態であったと想像できます。しかし、主イエスにとってこの一人の異邦人の女性を通り過ぎることはできません。井戸を前に、主イエスの方から声かけられます。ユダヤ人のしかも男性が、敵対者とみなされていたサマリアの女性に声をかけることは、タブーを破ることです。しかし、そこに主の強いご意志があります。そして、それは特別のことでなく、聖書によって繰り返し証しされていることです。つまり、神からの語りかけからすべては始まるということです。対話の主導権はイエスさまにありました。宗教の話をしようと、つまり、伝道しようという肩肘はった対話ではまったくありません。何とかして私たちの個人伝道において、また、説教においても身

に着けたいあり方です。

主イエスがこの女性に知ってもらいたいことは、今こそ、神は礼拝する者を求めておられるということです。サマリアの女性も、魂のもっとも深いところで「救い」を求めています。しかし、それを生ける真の神に求めず、目の前にあるもの、男性にすりかえていたのです。そしておそらくその空しさに気づきながら、諦めていたのだらうと思います。しかし、主イエスは、この女性に生ける真の神を礼拝すること、その方法を教えてくださるのです。「それは、あなたと話をしているこのわたしである」(26節) メシア、キリストが目の前にいるイエスさまだと告げられました。この自己紹介こそ、父なる神がこの女性に声をかけてくださる御業の頂点なのです。神は、御子イエスさまにおいて「あなたは私の愛する子!」と呼びかけてくださっているのです。この主によって、その御名によって、私たちは、神を「あなた」とはっきりと呼び返す祝福、特権にあずかるのです。

〈子どもたちに対して〉

霊なる神、人格の神とは、お話しできる神さまであることを伝える最高の道は、祈りの恵みです。さらに私たちにとって主の日の礼拝式こそ、公同祈り、神の民の共同祈りであることを教えることができたら幸いです。つまり、礼拝式で聖書の朗読と説教とによって神の言葉を聴いていることが、神さまからの呼びかけであると悟らせるように常に配慮したいと思います。その意味で、説教は「事柄」の説明や、教えや教訓で終わってはなりません。神からの「語り(かけ)」、それを子どもに届けることです。そのとき、黙ってはいられないのが人間です。聖霊のお働きの中で、「あなた」と呼び返したくなるのです。こうして、子どもと神との対話が生まれ、子どもたちは神を霊なるお方として知っていくのです。主の日の礼拝式で、私たちの心が御言葉以外で高揚させよう、楽しくさせようとするなら、空虚な礼拝となります。霊と真理の礼拝は、生ける神からの呼びかけを、取り次ぐところに起こされる恵みの約束です。

(相馬伸郎)

テキスト
教理問答ヨハネによる福音書 4章1～26節①
子どもと親のカテキズム 問8**(単元のねらい)**

問8を二回にわたって、しかも、同じテキストから学びます。日本の子どもたちにとって（契約の子どもたちですら）「霊」という言葉は、ただちに幽「霊」とか、怪しい「霊」的現象とかを連想させるでしょう。それほど若い魂は、悪霊的な攻撃、誘惑を受けています。聖書の神とは、人格をもっておられる神、つまり、人間に「あなた」と呼びかけ、顔と顔を向き合わせ、対話を成り立たせてくださる神であられることを伝えましょう。人間の欲望の投影でしかない偶像にあふれる環境にある子どもたちにとってのカミは、「まじない」の言葉をもって自分に従わせることもできる、言わば「近い」存在です。聖書の生ける神が、絶対的、超越的な神であり、しかも、神から語りかけて対話を求めてくださる、真の意味で誰よりも近くにいてくださるお方であることを告げましょう。それだけに、子どもたちが神の呼び掛けにこたえる人間、礼拝する人間として、日々成長できるよう、主日礼拝式に備えましょう。

お話できる神さま

イエスさまが伝道の旅をしておられたときのことです。イエスさまは、弟子たちと一緒にユダヤの地方からガリラヤをわざわざ歩いておられます。ガリラヤに最短距離で行くなら、サマリアという国をまっすぐ通るのがふつうです。ところが、ユダヤ人は、決してサマリアを通りません。わざわざ遠回りをするのです。何故なら、ユダヤ人はサマリアの人たちのことを、軽蔑していたからです。「あんな人たちは、関わったらダメだよ。こっちが汚れてしまう」。つまり、サマリアの人たちのことを、まことの神さまに従わない悪い人だと考えていたのです。ところが、この時、イエスさまはサマリアを通して行かれました。イエスさまは、どうしても、たった一人のサマリアの女の人とお話をしたいと決めておられたからです。サマリアの井戸辺で休んでおられました。すると、向こうから一人の女性が水を汲みに来ました。

イエスさまは、すぐその女の人にこう呼び掛けられました。「すみません。お水を飲ませてくださいませんか」。女の方はびっくりして、言いました。「ユダヤ人は、わたしたちのことを軽蔑して、近寄ったり、しゃべったりしないものでしょう。

ユダヤ人のしかも男性のくせに、どうしてサマリア人のわたしに水を飲ませてくださいなどと頼まれるのですか」。すると、イエスさまはおっしゃいました。「もし、あなたが本当の神さまのことを知っていて、このわたしのことを知っていたなら、あなたの方から、水を飲ませてくださいとお願ひするはずですよ。そうしたらわたしは、喜んであなたに生きた水を与えてあげるのですが」。これを聞いた、女の方は、カチンと来て言いました。「まあ、偉そうな言い方をする先生なこと。あなたなんて汲む物も持っていないのに。この井戸はとても深いのですからね。どうやって、その生きた水とやらを汲もうって言うのですか。そもそも、この井戸は、私たちの先祖、あの有名なヤコブの井戸なのです。ユダヤ人のあなたからもらう必要なんかありませんからね」。

すると、イエスさまは真剣なお顔でおっしゃいます。「このヤコブの井戸の水をどれほど飲んでもまた喉が渇きますよ。しかし、わたしが与える水を飲む人は、決して渇くことはありません。そればかりか、その人の内で泉となってあふれ出ます」。それを聞いて、彼女は、目を丸くしながら、考えました。「そんな水があるわけない」。しかし、

同時に思いました。「いや、もしもそんな水があるんだったら、毎日こんな暑いときにここに来る必要もなくなる。そんな水が欲しい！」そして、思い切って、イエスさまに「その水をください！」とお願いしました。

ところがイエスさまは、いきなりこんなことをおっしゃいました。「あなたの夫をここに呼んで来なさい」彼女は、ますますびくりにして、正直に答えてしまいました。「わたしに夫はいません」イエスさまはおっしゃいます。「その通り。あなたには五人の夫がいましたが、今の人は夫ではないですね」。彼女は、イエスさまがただの人ではないことがわかりました。神さまの預言者だと認めたのです。

そのときです。彼女の心の奥底にしまいこんでいたひとつの質問が、湧き出てきました。「私たちは、目の前にあるあのゲリジム山で礼拝してきました。けれども、ユダヤ人のあなたがたはエルサレムだけが本当の礼拝場所であると言っていますね。本当のところは、どっちなんですか」。

イエスさまは、厳かに、そして優しいまなざしでおっしゃいました。「婦人よ。わたしを信じなさい」。つまり、体にとってお水が絶対に必要のように、イエスさまを信じることで、これこそ人間にとってもっとも必要なことで、イエスさまによって神さまを礼拝することこそ、ほんとうの礼拝なのだと教えてくださったのです。

さて、イエスさまは、ここで彼女に真の神さまとはどのようなお方でいらっしゃるのかを教えてください。サマリアの、彼女のところ来てくださったのです。ずばり、「神さまは、霊でいらっしゃる」というのです。霊と聞くと、皆さんの中で、幽霊とか霊的現象とか、何だか怪しいものや、怖いもの考える人がいるかもしれませんが。そんなものとはまったく関係がありません。その正反対です。イエスさまが教えてくださった、まことの神さま、聖書の神さまが霊だというのは、目に見えないお方だという意味なのです。だから

すばらしいのだとイエスさまはおっしゃるわけです。

そう言われても、僕たち私たちにとって、目に見えないと、すぐに困ってしまう気持ちがわくかもしれません。「見えないのだったら、確かめようがないよな。見えない神なんて、嘘じゃない？ 本当はいないから、そんなことを言ってごまかしているのじゃない？」

考えてみましょう。人間の世界のなかでももっとも大切なものは、目で見えないものばかりです。心とか愛とか真理とか、すべて見えないのです。だから心で見なければ肝心なことは見えないし、分からないはずですよ。だったら神さまこそ、目に見えないお方で、心で見る、信じる以外に分かるはずがありません。見える神なんて、嘘、偽りですよ。

それなら、どうして先生も、神さまのことがわかるようになったのでしょうか。それは、神さまから呼びかけられたからです。話しかけられたからです。どこで、どうやって？ それは、教会の礼拝式で、聖書を通して、聖書の説教によってです。イエスさまは、この女性のように先生のところにも近づき声をかけてくださいました。そして、同じように、イエスさまを信じる喜び、イエスさまによって神さまを礼拝する救いを与えてくださいました。イエスさまに話しかけられて、目には見えない霊なる神さまが、分かり始めたのです。

僕たち私たちも今朝、この教会で、イエスさまに近づいていただいて、お話いただきました。これこそ、イエスさまが僕たち私たちに求めておられること、一番大切なことです。イエスさまは今、信じる一人一人に、命の水、正しく、本当の生きる道を、その力を与えてくださっているのです。これからも、目には見えませんが、御言葉を通して呼びかけてくださるイエスさまを信じていきましょう。また、お友だちを教会に連れてくることは、イエスさまのところに連れてきてあげることですから、一人のお友だちのために、みんなでお祈りしましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 4章24節

神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

〈ねらい〉

神さまは目に見えない霊なるお方であり、わたしたちが「あなた」と呼んでお話しし、交わることを求めておられることを知る。

〈展開例〉

Q. 日本にはいろんな「神」と呼ばれるものがありますね。どんなものがあるでしょう。

A. お寺にある仏像。神社。お地蔵さん。岩や木。

Q. ではそれらが本当の神さまでしょうか。

A. いいえ。それらは人間が勝手に作った偽の神々です。

Q. 本当の神さまは目に見えますか。

A. いいえ。真の神さまは目に見えない霊なるお方です。だから人間が作った目に見えるモノは本当の神さまではありません。

Q. では見えない神さまはわたしたちにとって遠い存在、よくわからない存在なのでしょう。

A. そうではありません。確かに目には見えませんが、神さまはイエス・キリストを遣わして下さり、ご自分がどのようなお方であることを示してくださいました。わたしたちにとって、神さまはわたしたちを子どもとして愛して下さる天のお父さんです。

Q. みんなはお父さんやお母さんとお話をしますか。どんなことを話すかな。

A. 学校であったこと。うれしかったこと悲しかったこと。困っていて助けてほしいことなど。

Q. もしみんながお父さんやお母さんに何も話さなくなったらどう思うかな。

A. きっと寂しく思う。悲しく思う。

結論：

わたしたちの父なる神さまも同じなのだと思います。目には見えませんが、神さまは聖書を通して、イエスさまによってわたしたちに語りかけて下さっています。わたしたちへの愛のメッセージを語ってくださっています。それゆえ、わたしたちは神さまに向かって「あなた、わたしたちのお父さん」と呼びかけ、お話しするのです。それが神さまへのお祈りであり、礼拝です。神さまはそのことをわたしたちに求めておられます。わたしたちが親しく神さまの方を向き、お話しするのを待っていてくださる。そしてそのことを喜んで下さるのです。わたしたちを愛して下さっているからです。

これからも神さまにお話しし、交わっていきましょう。

【目標】

主イエスが私たちに近づいて来てくださる方であることを知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①壁を破って近づいて来てくださる主イエス**

主イエスはサマリアの女性との対話を通して、民族の壁、宗教の壁、敵意の壁を乗り越えられ、そして、自らの言葉をもって、最も大きな最後の壁を乗り越えようとされる。それは彼女の心の中に築かれていた壁。主イエスはその彼女の心の壁を開こうとされる。

②壁を作る私たち

ヨハネによる福音書4章16節で、主イエスは言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んできなさい。」ある説教者は、「この言葉は、鋭いレントゲンの光のようだ」と言っている。主イエスは、サマリアの女性の心の奥に踏み込まれて、そこにある渇きに、光を当てられた。この主イエスの言葉は、彼女の心の深いところにまで達して、彼女の心の中にあった隠された秘密を撮影して、白日の下にさらす。彼女はその心の奥に、渇きを抱えていた。私たちは、自分自身の一番深いところにある本当に問題としなければならない問題に、敢えて目を瞑ろうとする。その問題を見るのが嫌だから。誰でも自分の中の渇いた部分を見たくはないゆえ、その問題を、本当は自分の問題なのに、他の人のせいにしてすり替えたり、あるいは神様のせいにしてしまうこともある。このサマリアの女性の姿には、自分の問題を棚に上げて考えようとする私たち自身の姿が重なる。

③必要などころに届いてくださる主イエス

私たちには、最愛の人でさえそこに入り込めないような渇いた場所、自分だけの孤独な場所というものがあるが、主イエスは、そこを見ていて、そこに来てくださる。主イエスは、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」と言われた。病人が、医者の所に行っても、そこで傷ついた自分の幹部を見せなければ、医者は治すことができない。主イエスは、御自分がその医者だと言われた。この方は、この私たちの患部を癒すために、一番治療の必要などころに向き合ってください方として、私たちに呼びかけてくださる。

④私たちに届くことを目指される主イエス

イエス・キリストは、なぜクリスマスにこの地上に生まれて、十字架に架かれたのか？ その目的は、この私たちに寄り添ってくださるためだった。それがこの聖書において、福音と呼ばれているもの。ある説教者は、主イエス・キリストのことを指しながら、こう語った。「福音の良き知らせとは、神は私たちの苦しみを取り去るためではなく、その一部になりたいがために、来られた」と。聖書が語る神様は、全てを自由自在に操る強烈な力を持っていて、それで欲しいままに振る舞うような、そういう神様ではない。聖書が語る神様は、むしろその逆であり、私たちの一番弱いところ、寂しいところ、この心の渇いた奥底にも、とことん寄り添ってくださる神様。そこにある痛みに共感し、丁寧に愛を注いでくださる神様。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身が、かつて受け取った、神様からの歩み寄りについて、その経験を生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト

ヨハネによる福音書 4章1～26節②

教理問答

子どもと親のカテキズム 問8

〈三位一体の神・神の属性〉

ここでは、問8の二回目、神の属性について学びます。神の本質と神が備えておられる特質、特性つまり属性を聖書に導かれ可能な限り数えようとしたのは、ウェストミンスター信仰告白第2章だと思えます。また、ウェストミンスター大教理問答問7で、「神は、どのようなお方であるか」と取り扱っています。しかしもし信仰に導かれて日の浅い方や、何より求道者の方がこれを読まれたら教理嫌い？ になるかもしれません。第2章1節を読んだら、初めてマタイによる福音書の系図を読んだときの印象に近いものがあるかもしれません。確かに、教理は、聖書の信仰の要約ですから、このような論述は避けて通れません。しかし、親と子のカテキズムは、それらの課題を考慮して編まれています。前回、扱ったように話しかけてくださる神、話をきいてくださる神を最初にかかげたのはそのためです。しかし、子どもたちにも、聖書による神の属性のイメージをきちんと描き出すことは大切です。

「この神さまは、永遠で、変わりがなく、いつでもどこでもいてくださる、ただひとりの生きたまことの神さまです」。ここでは、永遠性、不変性、遍在、唯一性等が数えられています。まず、証契聖句を読んでいただくことが基本的な作業です。同時に、この神は、イエス・キリストにおいて証しされた神であることを常に覚えることこそ最重要かつ必須です。イエス・キリスト以外に、この神との真実の出会いはないこと、人格的な交わりが始まらないことをただ頭で理解するだけではなく、霊的な修練、ディポジション等によって、日々、身をもって味わうこと、体験することが根本的に大切です。その意味からも、今朝も、先週に引き続いてヨハネによる福音書のサマリアの女性と主イエスとの対話、出会いの物語を通して語りかけ、説きあかしたいと思えます。

〈永遠・不変の神〉

聖書の中には、まさに「永遠の神」という御言葉があります。(証契聖句3を参照) すべて目に見える物質は、崩壊へと定められています。しかし、神は霊でいらっしゃるゆえに、永遠者でいらっしゃいます。また、日ごとに時間を創造する神は、時間を超越しておられる存在です。つまり、永遠者と言えます。この永遠の神が、ご自身に似せて私たちを創造された事実を思うとき、私たちの救いの完全さを思います。人間同士でさえ、真実の愛は相手がいつまでも愛の対象として共にいてくれることを期待しているのです。いわんや、永遠の神が、人間を特別に、いわば永遠の愛で愛し、創造された以上、私どもの本来の存在は、永遠の存在として創造し、定められたことが分かってくると思えます。

逆に、現在、減びていく定め(縄目)に縛られている人間は、そのそもその姿ではないことが知らされます。主イエスの神性、永遠性は、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」(ヘブライ13:8)において証しされています。この永遠不変のお方、言い換えれば、心変わりしない「真実の神」が、私たちの救い主でいらっしゃるゆえに、私どもの救いは徹底的、完全、永遠であることが保証されています。サマリアの女性が、「それは、あなたと話をしているこのわたしである」(26節)と、主イエスから救いへの招きと宣言を受け、信じた瞬間、ただちに永遠の救いが与えられたということになるはずです。まさに「永遠の命に至る水がわき出た」のです。水がめを「そこに置いたまま町に行」(28節)ったのは、まさにその証契にほかなりません。永遠にして不変の神が、私たちの救いであり福音であることを告げたいと思えます。

〈遍在の神〉

「いつでもどこでもいてくださる」神の属性を

「遍在」と言います。サマリア人の女性にとって神とは、イエスさまと共に見上げていたであろうあのゲリジム山にあった神殿において礼拝するものだと考えていました。ただし、サマリア人だけがそのような神殿に限定された神礼拝を考えていたわけではありません。むしろ、当時のユダヤ人こそ、エルサレム神殿を誇りとし、自分たちの神殿礼拝こそ、正規の唯一の神礼拝の場所であると考えていました。どちらも同じ陥穽にはまっていたのです。そこには、目に見えない神をなんとか自分たちの手の中に収めたいとの隠された思いがあったのだと思います。しかし、主イエスが戦われた信仰の戦いの一つのしかし大きな部分は、このような神殿礼拝において見える真の神の偶像化でした。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」（ヨハネ2:19）との宣言こそ、主イエスを死に至らせたものでした。逆から言えば、どれほど、主イエスが形骸化した神礼拝つまり信仰を憤っておられたかが分かります。もとより、この御言葉は、神の真の唯一の神殿そのものでいらっしゃるご自身とそこをご復活を予告しているものです。しかし、主イエスは、二人でも三人でも、主の御名で集まるところに神の教会があり、ご自身の臨在を約束されました。したがって、旧約の昔も新約の今も、神がサマリアにもエジプトにも、つまり全世界を遍く治めておられた恵みの事実を、どれほど強調してもしすぎることはありません。そうであれば、今や、主イエスに結ばれた私たちが、いつでもどこでも共にいてくださる神の恵みの現実をどれほど喜び、感謝すべきでしょうか。遍在の神に包まれ、その懷に憩いつつ、安心して生きていくことができる幸い、心強さを証ししたいと思います。

〈生きた真の神さま〉

この項は、次週、集中的に学びます。この物語のなかで直接関わるのは、主イエスが与えてくださる水を飲むとき、その人の内で水が泉となってしまうという主の宣言です。このようなお話は、私たちの目に見える世界では、到底理解できません。どれほど水を見つめても、たくさん飲んでみ

ても、ここに描き出されたイメージはまったくわいてこないはずです。しかし、論より証拠、主イエスを信じる時、主が注いでくださるいのちは、私たちの内で躍動します。確かに、信仰によって私たちの肉体の生命が若返ったり、壮健なものとなったりすることはないかもしれませんが、私たちの内なるもの、目に見えない心、精神、魂ははっきりと躍動を体験できます。しかも、そのいのちが、肉体にまで及ぼす事例は枚挙にいとまがありません。私たちの神は生きておられるのです。子どもたちに、全存在をもって証しすべきは、この生きておられる神の現実です。しかし、そのために、何か力みかえることなどありません。生きておられる神が、今朝も説教者を分級の教師を用いて、子どもたちに働きかけてくださるのです。礼拝体験こそ、客観的なそして、最も大切な証拠です。そのことを、私たちが素直に深く信じることで、それが問われているだけです。

〈子どもたちに対して〉

集っている子どもたちの現実を見ながら、説教の強調点は、絞られることが大切でしょう。すべてを網羅的に「説明」するより、その子が今何を必要としているのかを知ることであり、そのような関係が結ばれていることが大切です。既に子どもたちなりの「霊的な体験」が与えられているはずで、いつでもどこでも神さまがいっしょにいてくださるその恵みとして、嬉しかったこと、安心できたこと、がんばれたこと、そのような事例を見出してあげることが信仰の教師の喜ばしい務めです。絶対他者でいらっしゃる神を子どもに教える前に、こんなに近くに共にいてくださり、これほど小さな自分にまで目を留めていてくださるその嬉しさを説教において、分級において共に発見できたら幸いです。

霊的な神、人格をもって子どもたちとの交わりを喜んでくださる神を、主イエスはその存在と説教とによって見せてくださいました。サマリア人の女性の体験が、子どもと私たちの共通の体験、喜びとなることを祈り求めましょう。地上において、その歩みに終わりはありません。（相馬伸郎）

テキスト
教理問答ヨハネによる福音書 4章1～26節
子どもと親のカテキズム 問8

〔単元のねらい〕

聖書を通して生ける真の神の属性を物語ります。聖書が描き出す神のイメージを、子どもたちの心のキャンパスに描き出すことが狙いです。そのイメージは、主イエス・キリストにおいて完全に示された以上、私どもにとって神を語ることは、主イエスを抜きにしてはもはや成り立ちません。先週に続く、サマリアの女性との出会いの物語を通して、聖霊の恵みの内に、それぞれの子らにふさわしく、永遠の神の愛の懷に抱かれ、生かされている安心感を持ってもらいたいと願います。子どもだからこそ、大人より不安と恐怖にさらされている側面があります。子どもたちにとっての福音は、私どもの福音です。私たち自身の神体験を、サマリアの女性に重ねながら語り、証しできたら幸いです。

いつでもどこでも神さまといっしょ

今朝は、先週と同じ聖書を読んで、神さまを礼拝します。先週はお休みしてしまったお友だちもいます。あらためてお話しします。

今、イエスさまは、旅の疲れでヘトヘトになっておられます。喉もカラカラに渴いておられます。そんなところにちょうど、水がめをもった女性が来ました。実は、イエスさまはこのたった一人の女性に出会い、お話をするためにずっと前から、このときのことをご計画しておられたのです。

イエスさまは、「お水を飲ませてくださいませんか」と頭を下げられました。ユダヤ人の男性から声をかけられてびっくりしている彼女に、イエスさまは、いたずらっぽい笑顔を見せて、もっと驚かせてしまわれます。「もし、あなたが神さまのくださるすばらしい贈りもののことを知っていたら、あなたの方から話しかけてくれたはずなのになあ。もし、このわたしが誰か知っていたなら、あなたの方から話しかけてくれたはずなのになあ。そうしたら、あなたの方から頭を下げて、お水を飲ませてくださいとお願いするはずなのに。何故なら、このわたしは、あなたに生きた水を飲ませてあげられるわけですからね」。

これを聞いていた女性は、いらっとして、言いかえます。「へー、おかしいことを言いますね。桶を持ってもないのに。この井戸は、私たちの

偉大な先祖のヤコブの井戸なのです。何も、ユダヤ人なんかからわざわざお水をもらう必要なんかありませんね。ふん」。

「いやいや、違います。わたしが言っているお水というのは、この井戸水のことではありません。わたしが与えるお水、それは、永遠のいのち、つまり永遠の神さまの力、いきいきと元気に生きる力をみなぎらせる神さまのいのちのことなのです」。

彼女は、イエスさまのお話がよく分かりません。分からないけれども、水くみの仕事がどれほど大変であるのかは、よく分かっています。だから、イエスさまとお話を続けました。そんな中で、とうとう彼女は、初めて会った人なのに、自分のことを全部わかっていることを知って、とても厳かな思いになりました。「もしかして、もしかしてこの人は、神さまのことを教えてくださる偉い預言者さんなのかも……」。

こうして彼女は、ユダヤ人がいつもサマリア人を軽蔑して言っている一つのことについて、質問しました。「私たちサマリア人は、真の神さまをこの山に立てられた神殿で礼拝しています。ところが、あなた方ユダヤ人は、エルサレム神殿でないと本当の神さまの礼拝にならないのだと言って

います。本当のところ、どうなのでしょう」

すると、イエスさまは、おっしゃいました。「サマリアの愛するご婦人よ。わたしのこと、わたしの言うことを信じなさい。確かに、神さまのお約束どおり、救いはユダヤ人から来ます。そして、その時がもう、来ています。もともと、神さまを礼拝する場所にはここしかないなどということ、ありませんでした。しかも、救いはもうここに来ています」。

神さまは、いつでもどこでも私たちと共にいてくださいます。つまり、礼拝する場所も、世界中でここじゃないとできない、ここの方がもっとよい礼拝になる、な～んてことはないのです。今、イエスさまを信じてイエスさまの御名を唱え、「天のお父さま！」と神さまを呼ぶ人たちは、イエスさまがいっしょにいてくださいます。イエスさまは、こう約束されたからです。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ18:20)。神さまは、信じる人たちと共にいてくださいます。そればかりか、信じる前から神さまは名古屋でも東京でも、どこで生活していても僕たち私たちといっしょにいてくださったのです。サマリアに住んでいたこの女性だって、神さまは遠く離れていたわけではありません。すべてご存じなのです。先生は、子どもの頃、小学生の6年生になっても、夜になると「あの道だけは、通りたくない」と思う道がありました。皆さんは、イエスさまを知って、信じているのですから、怖くなったならイエスさまとつぶやいてくださいね。

さて、そのことに気づいたこの女性は、もう、嬉しくてうれしくてたまらなくなりました。こんなわたしのことを、神さまが顧みていてくださったんだ。わたしは、神さまの事を正しく信じることも、礼拝することも知らなかったけれど、神さまは、わたしを愛して、守っていてくださったのだ」この女性は、その日、イエスさまを信じました。すると、不思議なことが起こりました。実は、彼女は、町の人たちが嫌いでした。町の人たちもまた、「あんなふしだらな女性は、ダメだ

よね。神さまを信じていないんだね」と悪口ばかり言っていたのです。だから、彼女は毎日、誰にも会わないようにして、一人ぼっちで井戸辺にやってくるのです。ところが、イエスさまを信じた、そのときから、もう、何も怖くなくなったのです。神さまに守られ、救われ、愛されている喜びと嬉しさが泉のように湧き上がってきたのです。彼女は、命の次に大切なはずの水がめを置いて、サマリアの町の人たちにイエスさまのことを紹介しに行きます。それは、まさにイエスさまがおっしゃったように、永遠のいのちをいただいたからです。もう、肉体の生命を保つために絶対に必要なお水のことより、もっと大切なものを知ってしまったからです。

もしかすると、イエスさまのために、やさしくその水がめを置いて行かれたのかもしれませんが。イエスさまは、きっと、ヤコブの井戸のお水を、おいしくお飲みになられたにちがいありません。けれども、イエスさまにとって本当においしかったのは、彼女が神さまを信じたからです。

イエスさまは、昔も今も、ずっと聖書に記されたとおりの神さまです。心変わりをされません。神さまは、サマリアの女性を救おうとお考えになられ、実行されました。途中で、お水を飲ませるのを止めてしまうようなお方ではありません。だから、安心できます。先生も、イエスさまを信じて35年、牧師になって25年以上が経ちました。ずっと救われ続けています。イエスさまが真実でいらっしゃるおかげです。逆に言うと、先生もイエスさまが注いでくださるいのちのお水を、おいしく飲んでいからです。それは、35年間、ずっと礼拝式を休んでいないということです。もちろん、この礼拝堂での礼拝だけではなく、毎日、お祈りしているからです。イエスさまこそ、僕たち私たちに水を飲ませたい、天のお父さまこそ、天からの命の水を飲ませたいと激しく願っておられます。来週も、いっしょに礼拝しましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人の手紙 13章8節

イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。

〈ねらい〉

イエス・キリストの父なる神さまはいつもどこにおいてもわたしたちと一緒にいてくださることを共に喜び、神さまを礼拝していこうと励ます。

〈展開例〉

Q. みんなは神さまへの礼拝をどこでしますか。

A. 教会。

Q. なぜ教会で礼拝をするのでしょうか。他の場所ではダメなのでしょう。教会以外には神さまはいないのかな。

A. そうではない。

Q. イエスさまの生きておられた時代、サマリア人とユダヤ人とは対立し、別々の場所で神さまを礼拝していました。それはどこどこだったのでしょうか。

A. サマリア人はゲリジム山。ユダヤ人はエルサレム。

Q. サマリアの女性はそのことについてイエスさまに質問しましたね。イエスさまは何とお答えになったのでしょうか。ヨハネ福音書4章21節を見てみましょう。

A. 「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。」

Q. イエスさまは父なる神さまを礼拝する時に場所とは重要ではないとおっしゃったわけですね。では大切なことは何ですか。

A. イエスさまを信じること。イエスさまこそ父なる神さまが遣わして下さったわたしたちの救い主メシアだからです。

Q. みんなはどんな時に心細かったり、恐かったりするかな。

A. 一人でお留守番をしてるときなど……。

結論：

そうですね。でも実はわたしたちがどこに行こうと、いつもイエスさまがわたしたちと共にいて下さり、神さまがわたしたちと共にいてくださるのです。これほど心強いことはありません。これはとってもうれしいことですね。みんなが不安になったり、恐くなったときにも、イエスさまと一緒にいてくださることを思い出してください。イエスさまがわたしたちに力と勇気を与えてくださいます。

わたしたちが礼拝をするとき、その場所が大切なのではありません。イエスさまを信じる人々が集まることが大切です。その集まりの中にイエスさま、神さまが共にいてくださるからです。これからも一緒にイエスさまを信じ、神さまを礼拝してゆきましょう。

【目標】

イエス・キリストと出会うことこそが神様との出会いであると知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？

2. 改めて御言葉に取り組む

①神を知るとはイエス・キリストを知ること

ヨハネによる福音書4章21節「イエスは言われた。『婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。』」主イエスのこの言葉は、主イエスを信じる者が、父なる神を礼拝する者となることを示している。キリスト教会で礼拝する神は、単なる思想・哲学、あるいはよく実体の分からない、雲のような、掴みどころのない超越神などではなく、人格的な神であり、それゆえ対話可能であり、心情をお持ちの神である。そして、神の御子であられる主イエスは、「わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。」とも言われた（ヨハネによる福音書12章45節）これは、神様がどのような方であるかが、主イエス・キリストを見ることによって分かるということである。神との出会いは、イコール、イエス・キリストとの出会いであり、イエス・キリストと出会う、イエス・キリストを見る、イエス・キリストが分かることなしには、神は分からない。私たちの教会は、キリスト教会であり、教会の屋根にはイエス・キリストの十字架が立てられている。さらに突き詰めて言うならば、その十字架に架かった主イエス・キリストと出会い、キリストを知ることが、神と出会い、神を知ることである。

②イエス・キリストの御顔を通して神様の御顔が見える
あなたにとって、イエス・キリストとはどんな

方だろうか？ イエス・キリストを見た者が神を見るということであれば、イエス・キリストをどのように見るかが、神をどのように見るかを左右することになる。イエス・キリストは、神についての観念やイデオロギーではなく、具体的な人物であった。イエス・キリストは、具体的な人格を持って、あなたを愛し、あなたのために十字架に架かれた。このキリストの具体的な人格に焦点を当てずに、そこから離れて、神について簡単に定義したり、論じたり、批判したりすることは、一般的な神を論じることではあっても、キリスト教の神を論じることにはならない。イエス・キリストの私たちの対する眼差し、言葉、御業に目を留めるべきであるし、そこから神を考えるべきであり、そこで神に出会うべきである。そこから離れてしまえば、キリスト教の神との出会いはない。

③イエス・キリストとの出会いの場所は十字架

キリストに出会うとは、より具体的には、十字架に架かれた主イエス・キリストに出会うということである。十字架^上での主イエスの眼差し、言葉、御業を、神様があなたを人格的に愛しているゆえの、あなたに向けられたものとして受け取ることができるか。その意味で、主イエス・キリストの十字架の前に正面から立つことができるか。そこでの神様からのあなたへの人格的な語りかけを聞き取ることができるか。御言葉を読むことを通して、祈りを通して、礼拝出席や、説教を聞くことを通して、この出会いにそれぞれが導かれ、そこでキリストの御顔をそれぞれが見ることができることを願う。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身にとって、イエス・キリストはどんな方であるのかを証する。

Q：疑問は解けましたか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト	申命記 4章32～40節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問9
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問5

問9 聖書が語っているまことの神さまのほかに神さまがいますか。

答 いいえ、生きたまことの神さまはただひとりだけです。

〈カテキズム解説〉

『子どもと親のカテキズム』では、「はじめに」の5問によって全体の構成が示された後、問6～7で聖書について教えています。そして、問8からいよいよ聖書が教えている内容が順に語られ始めます。その前半は信じるべき内容（問7の言葉では「神さまがどのような方であり、私たちのために何をしてくださったか」）です。最初に語られるのが「三位一体の神さま」についてです。

問9は、神が唯一であられることを教える問答です。しかし、よく見ると、すでに問8の答えの中に、「ただひとりの生きたまことの神さまです」という言葉が含まれています。それにもかかわらず、問9において改めて「聖書が語っているまことの神さまのほかに神さまがいますか」と問い直して、「生きたまことの神さまはただひとりだけです」と答えています。さらに、問10では「ほかの神さまとは何ですか」と念を押すように問いかけて、それらが偶像にすぎないことを教えています。ウェストミンスター大教理問答でさえも、神の唯一性については問8で簡潔に語っているだけなのに対して、『子どもと親のカテキズム』ではこれほど繰り返して神の唯一性について語っているのには、日本の宗教的な事情が関わっています。神道においてはあらゆるものが神々として祭られているだけでなく、神道と仏教を同時に信仰することさえも違和感を覚えない宗教的土壌においては、聖書の神も多くの神々の中の一人として信仰されてしまう可能性があります。実際、イエス・キリストを神として受け入れることは容易だけれど、他の神々を神として認めないことのほうが容易でないという人にも出会います。それゆえ、神が唯一であられることを、念を押すように繰り返

返して子どもたちに教えようとしているのです。

実は、古代イスラエルも、多神教が支配的な勢力を持っている世界の中で生きていました。それゆえに、他の神々を神としないことが信仰的な戦いとして常に問われ続けていました。十戒において、第一に「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」と命じられているのには、そのような宗教的環境が関係していたと思われます。私たちが置かれているのとはよく似た環境にイスラエルの人びとも置かれていたのです。

イスラエルの民は、単に概念として神の唯一性を知らされたものではありませんでした。歴史的な体験を通して、主のほかに神がないことを動かしがたい事実として教えられていきました。例えば、葦の海を渡った後では、「主よ、神々の中にあなたのような方が誰かあるのでしょうか」（出エジプト15:11）という賛美とも告白とも呼べるような言葉が記されています。エジプトの多神教的な環境の中から救い出された民が主こそ比類ないお方であることを知った言葉です。出エジプトの出来事はイスラエルが「主こそ神であり、ほかに神はいないということを示され、知るに至った」（申命記4:35）経験でした。イスラエルの歴史や私たち自身が経験していることのすべてが、主が唯一の神であられ、「生きたまことの神」は他にいないことをしめしているがゆえに「思い起こせ、初めからのことを。わたしは神、ほかにはいない。わたしは神であり、わたしのような者はいない」（イザヤ46:9）と、主ご自身も語りかけられるのです。そして、神が唯一であられるということは、「救いを与える神はわたしのほかにはない」（イザヤ45:21）ということでもあるのです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕 聖書本文を読む。

申命記4:32～40を繰り返して読む。

〔STEP2〕 この個所のテーマは何か？

主は、イスラエルの民に対して、出エジプトの歴史的な経験を通して、主こそ神であり、ほかに神はいないことを知らされた。

〔STEP3〕 それをどのように展開しているか？

シナイ山で火の中から主の言葉を聞かされたこと、エジプトにおいてさまざまな奇跡をもって救い出されたこと、強大な国々を追ひ払われたことを思い起こさせ、主こそ神であり、ほかに神はいないことを示された。それゆえに、主の掟を守って歩むことが幸いを得る道であることをも示された。

【KEY2 神の福音を語る】

〔STEP1〕 この個所で神はご自身について何を表されたか？

神は人間を創造された(32節)。神は火の中からイスラエルに語られた(33,36節)。主はエジプトにおいてさまざまな試みとしるしと奇跡を行われた(34節)。神は強大な国々をイスラエルの前から追ひ払われ、土地を与えられた(38節)。主はイスラエルをご自分のものとされた(34節)。主こそ神であり、他に神はいない(34,39節)。

〔STEP2〕 前後の章は、神について何と言っているか？

4:15からホレブにおいて何の形も見なかったのだから、いかなる形の像も造ってはならないことが命じられている。主の契約を守らなければ、これから与えられる土地から追放されることも警告されている(4:25,26)。

今日の個所の後では、逃れの町、律法のまえがきが語られた後、5章では十戒が記され、6章では唯一の神を愛するように命じられている。

〔STEP3〕 聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

主は、ご自身のかたちに似せて造られながらも、罪に堕してしまった人間を救い、ご自身の民として回復する計画を立てられた。それはアブラハムに始まり、キリストに至り、終末に完成する計画である。回復された主の民は、主が唯一の神であられることを知り、その掟に従って生きる。

【KEY3 子どもたちの信仰と生活のために語る】

〔STEP1〕 この個所に登場する当時の人びとの必要は何だったか？

エジプトにおいても、またこれから入っていくカナンの地においても、異教的宗教がはびこる環境である。そのような中であって、神が唯一であり、他に神はいないことを確かにしなければ、主の民として歩み続けることができない。

〔STEP2〕 私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

子どもたちも、異教的な世界観に囲まれて生きている。学校だけでなく、マスコミも、ネットも、異教的な世界観を当然のこととして子どもたちに迫ってくる。クリスチャンホームでなければ、親によって異教の宗教行事に参加させられることもある。そのような中で、主が唯一の神であられることを確かにしなければ、周りに流され、主の民として歩み続けることができなくなる。

〔STEP3〕 この聖書箇所「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

主は、出エジプトにおいてなされたさまざまな奇跡を通して、ご自身が唯一の生きたまことの神であられることを示して来られた。私たちは、そのことを思い起こしながら、同じ主が、イエス・キリストのゆえに、私たちの神となってくださっており、今も生きて働いてくださっていることを思い起こしたい。この主を離れては、私たちに幸いを得る道はなく、この主を唯一の神として信じ、従うことが、私たちに揺るぎない救いの希望を与える。

(テモテ指導者訓練「聖書の説教」モジュールを参考に項目を立てました) (大西良嗣)

テキスト

申命記 4章32～40節

子どもと親のカテキズム 問9

〔単元のねらい〕

多神教的な社会の中で生きる子どもたちに、神が唯一であられることを教えます。その神は、生きたまことの神であります。概念的に造り出されたり、宗教的な進歩によって到達したりした一神教なのではありません。世界を創造し、イスラエルの歴史に介入され、イエス・キリストを与えられたお方であり、今も私たちの人生に関わっておられるお方です。

生きたまことの神さまはただひとり

今読んだ聖書の言葉は、聖書の「申命記」というところに記されています。「申命記」というのは、モーセさんがイスラエルの人たちに語りかけている言葉（説教）です。神様によって、エジプトから救い出され、荒れ野を旅して、神さまが約束してくださっていたカナンの地にいよいよ入ろうとしているところで、モーセさんがイスラエルの人たちに語りかけています。

「神さまが世界に人間を造られた最初の時から今まで、そして、世界の隅から隅まで探してみても、こんなにすごいことはなかった。神さまがお語りになる声を（シナイ山で）聞いて、それでも生きている、あなたたちのような民は他にいなかった」それほど特別なことがあなたたちの身に起こったのだと、モーセさんはイスラエルの人たちに語りかけます。「あなたたちの神となってくださった主が、エジプトでさまざまな奇跡を行ったのをあなたたちは目の前で見た。ナイル川の水が血に変わったり、カエルやぶよが大量に発生したり、最後にはエジプト中の家で最初に生まれた男の子が死ぬということまで主が起こされた。そのようにして、エジプトから救い出されるということを経験した」その経験から間違いない事実として、「主こそ神であり、ほかに神はいない」と、あなたたちは知ったのだと、モーセさんはイスラエルの人たちに言います。

実は、このとき、モーセさんの話を聞いていた人たちの中には、エジプトを出た時、まだ生まれ

ていなかった人たちもたくさんいました。エジプトを出てから40年も経っていたからです。けれども、モーセさんは、神さまがエジプトでなさったさまざまな奇跡を、「あなたの目の前で」神さまがなさったと語ります。自分の目の前で起こったことのように、あのことを思い起こしなさいと言うのです。そのように思い起こしてこそ、「主こそ神であり、ほかに神はいない」ということを、確かな事実として心に留めることができるのです。

エジプトでは、まことの神ではないものが神々として拝まれていました。しかし、主がさまざまな不思議な奇跡を起こされて、圧倒的に大きな力によって、イスラエルを救い出されたので、彼らは「主こそ神であり、ほかに神はいない」ことを間違いないこととして知ることができました。

この後、イスラエルの人たちが入っていくようにしているカナンの土地でも、まことの神でないものが神々として信じられています。そういうものに惑わされないために、エジプトから救い出され、神さまご自身が自分たちに語りかけてくださったことを思い起こす必要があります。それを思い起こせば、「主こそ神であり、ほかに神はいない」ということが間違いないと、確認することができます。出エジプトの出来事のように、救いを実現してくださるお方は、ただ一人のまことの神さまだけなのです。

この「生きたまことの神さま」が与えられた戒め（十戒）の、最初にある戒め（第一戒）が、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」であることも、とても大切なことです。このことが忘れられてしまえば、何もかもがおかしくなってしまいます。私たちに救いをお与えくださったお方は、ただ一人の生きたまことの神さまなのです。

今、みんなの周りにも、本当の神さまではないものを拝んでいる人たちがたくさんいるでしょう？神社にお参りをしたり、仏壇に線香をたいたりしていることと思います。いろんな占いに頼っていたり、前世や来世を信じている人たちもいます。そういう中で、「主こそ神であり、ほかに神はいない」と信じ続けることは、とても大変だと感じることもあるかもしれません。（特に、お父さんやお母さんも、神さまでないものを信じている場合には、たいへんだね）

実は、イスラエルの人たちの周りも、同じよう

に、本当の神さまでないものを信じている人たちばかりでした。ですから、「主こそ神であり、ほかに神はいない」と信じ続けることが、とても難しかったのです。イスラエルの人たちの中には、他の神さまを拝むようになってしまった人たちもいます。だから、とても難しいのです。

「主こそ神であり、ほかに神はいない」と信じ続けるためには、モーセさんが言うように、神さまがイスラエルを救い出してくださったことを思い出すのがとても大切です。このことを思い出せば、私たちの主が、ただ一人の生きたまことの神さまであることを、もう一度、確信することができます。

そして、私たちの、これまでの経験も思い出してみましょ。神さまが助けてくださったこと、祈りを聞いてくださったことが、いくつもあつたはずで。そのことを忘れずに、繰り返し思い出しましょ。

私たちの主は、今も生きて働いてくださる、ただ一人のまことの神さまです。 （大西良嗣）

〔今週の暗唱聖句〕 申命記 4章35節

あなたは、主こそ神であり、ほかに神はいないということを示され、知るに至った。



〈ねらい〉

聖書の神さまが唯一の神さまであり、他に神はいないということを心に留め、他のものを神としないように気をつける。

〈展開例〉

Q. 日本にはいろんな神さまと呼ばれるものがありますね。どんなものを知っていますか。

A. お寺の仏像。神社における木や岩など。

Q. 多くの日本人はたくさんの神さまがいると考えます。ではそれらは本当の神さまかな。

A. いいえ、違います。

Q. では本当の神さまとはどなたでしょうか。

A. 聖書の語っている神さま。ただひとりの生きた真の神さま。それ以外は本当の神さまではありません。

Q. イスラエルの人々の周りにもたくさんの神々がありました。人間や動物の形をした像、太陽や月や星を仰いで、神として崇めていました。しかし、主はイスラエルの民に「主こそ神であり、ほかに神はいない」ということを知らされました。そのために主は何をなさったでしょうか。

A. シナイ山において火の中から語りかけられた。さまざまな奇跡、力ある御業を行い、イスラエルの民をエジプトから導き出された。イスラエルをご自分のものとされた。強い国々をイスラエルの前から追い払い、土地を与えら

れた。

Q. 神さまはイスラエルを救い出す御業を成し遂げられたのですね。そしてその神さまが後にイエス・キリストをお送り下さり、わたしたちのための救いの御業（十字架と復活）を成し遂げてくださいました。だから、わたしたちもこのお方をこそただひとりの神さまとして崇めます。

Q. みんながもし大切な親友に裏切られたりしたらどう思うかな。

A. 悲しくなったり、怒ったりする。

Q. 神さまもわたしたちを大切な存在として愛して、イエスさまによって救い出してくださいました。ご自分の民としてくださいました。それなのにわたしたちが神さまを忘れ、他のものを神さまとし始めたらどう思われるでしょうか。

A. 神さまは悲しまれ、怒られます。

結論：

わたしたちは聖書の神さま、わたしたちを救い出して下さった神さま以外他に神さまはいないことをよく心に留めていたいと思います。そしてただひとりの生きているまことの神さまのみを愛し、お従いしていきたいと思います。そのことを神さまは喜んでくださり、わたしたちに豊かな祝福を与えてくださいます。

【目標】

私たちの人生に関わっておられる唯一の神を知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？

2. 改めて御言葉に取り組む**①過去を導き、「今日」を与えてくださる神様**

モーセはイスラエルの民たちに出エジプト以来の40年の歴史を回顧させたあと、その歴史を踏まえて、申命記4章を語っている。その意味で申命記4章には、モーセがこの時一番いいことが語られている。そこでは、一言で言えば、神に従いなさいということが結論となっている。

申命記4章4節に語られている「つき従った」という言葉は、少々上品過ぎる訳であり、それは「しがみついてきた」という意味の、旧約聖書で三度しか使われていない特別な言葉。

また申命記4章では、何度も「今」とか「今日」という言葉が使われる。特にここで、イスラエルの民に「今」という時が与えられているという事実は、奇跡と言ってもよい。40年間という、絶え難く想像を絶する長い期間、膨大な数の民が、砂埃の舞う荒野でさまよい続けた。しかもその間に、彼らは様々な国民と何度も衝突した。しかし、驚くべきことに、この民は、それらの敵をことごとく打ち倒して、ここまで来た。

ここまで導いてくださった神様にしがみついていたからこそ、イスラエルの民には、今という時がある。このことを本当に肝に銘じなさいとモーセは語る。

非常に説得力と重みのある言葉。その意味で、聖書の中にもなかなか見つからないぐらいの言葉が、この申命記4章にはある。なぜならこの言葉は、創世記から民数記までの、イエスラエルの民の具体的な経験に根ざして語られているから。具体的な、今まで自分たちが味わってきた人生とい

う生きた視聴覚教材を使って、彼らが目で見て、触って、経験して来たことを通して、モーセはこの神様の偉大さ、そしてこれからこの神様に従って歩いていくこと、これほど大切なことは他にないのだということを語る。

②神様の私たちへの愛の語りかけとしての律法

そしてここで言われている律法とは、単なる無味乾燥な決まりではなく、神様が直接語って授けてくださった、正しい掟と法。法律は普通、自分たちで作り上げるものだが、イスラエルの民は、それを神様から授けられた。よってその律法の一言一句が、そのまま神様の存在を示すほど尊いものであり、律法の言葉の中に、神様はいらっしゃるほどであり、イスラエルの民はそのことを、歴史を通じて身を持って知らされてきた民である。だからこそ、神様の掟と法に従って生きるべきことが語られている。

③イスラエルの民と同様に私たちも

同様に、今、この私たちも、神様に支えられて、神様にしがみついていなければ、ここに立てなかった者たちである。モーセが私たちに伝えようとしていることはひとつ。それは、新しい一週間の中で、神様により近く生活せよ。この神様にこそますますより頼み、必要なときはいつでもこの神様のところに行き、神様の御言葉を聞いて、あらゆる面で、神様の前に近づいていく歩みを為し続けよということ。この神様をこそ、ただ一人の私が従い、私の神とすべき方とすることが、今までと同様、私たちの新しい明日を支える、一番大切な事柄である。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身が、自分の人生の中で神様による導きと支えを得た経験を証する。

Q：疑問は解けましたか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト

イザヤ書 44章9～20節

教理問答

子どもと親のカテキズム 問10

参照教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問47, 48

問10 ほかの神さまとは何ですか。

答 人間が造り出した、命のない偶像です。

偶像とは、太陽や月、動物や植物、人間などを神さまのようにすることです。

偶像を拝むことは、神さまがもっとも悲しまれることです。

〈カテキズム解説〉

神が唯一であられることを教える問9とセットになる問答です。問9の〈カテキズム解説〉も、どうぞご参照ください。

日本の子どもたちの周りでは、神道や仏教などの伝統的な異教宗教ばかりでなく、スピリチュアルをはじめとしたさまざまな占い、心霊現象や前世のことなど、異教的な世界観が幅を利かせています。『子どもと親のカテキズム』が、全体をコンパクトにまとめたながらも、神が唯一であられ、他に神がないことについては、紙幅を割いて丁寧に記しているのは、子どもたちの置かれている異教的な環境に配慮してのことです。

イスラエルの民も、異教的な環境の中に置かれていましたので、イスラエルの歴史は偶像礼拝との戦いの歴史であったとも言うことができます。十戒において、第一戒で「わたしをおいてはかに神があってはならない」と命じるだけでなく、それに続けて第二戒が置かれて「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」と丁寧に命じなければならなかったのには、それなりの理由がありました。

それでも、イスラエルの民は、十戒を与えられた直後に金の子牛を造って祭りを行いました（出エジ32章）。イスラエルがカナン之地に入っても、ヨシュアとその世代の長老たちが絶え、バアルに仕え始めました（士師記2:10～12）。王国時代に入っても、知恵に満ちたソロモンでさえ、

老境に入ると心が他の神々に向かってしまいます（列王上11:4～8）。その後、イスラエル王国、ユダ王国に立てられた王たちの中で、唯一の神である主に従いとおした王は決して多いとは言えません。預言者たちが遣わされ、繰り返し、主に立ち帰るように命じられますが、それに応じることなく、ついにはアッシリア帝国、バビロニア帝国に滅ぼされることになります。「偶像を拝むことは、神さまがもっとも悲しまれること」であり、決して見過ごしにはされないことが、イスラエルの歴史からも明らかです。

主以外の神々は、「人間が造り出した、命のない偶像」に過ぎないのですが、これほどまでに人間を惑わして来ましたが、今も私たちを惑わしています。その背後には、私たちを主から引き離そうとするサタンの働きがあると思われます。それゆえに、偶像礼拝を避けることは、まさに戦いであると言わざるを得ません。捕囚とされたイスラエルの民は国家権力によって偶像礼拝を強要されるという戦いをも経験しました（ダニエル書3,6章）。日本に生きる私たちも、同じような試練を経験した歴史を持っていますし、今、再びその戦いを覚悟させられる状況が進んでいます。今の日本において、子どもたちに丁寧に解くべき問答であると言えます。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

【STEP1】 聖書本文を読む。

イザヤ書44:9～20を繰り返して読む。

【STEP2】 この箇所のテーマは何か？

偶像を作るのは人間にすぎず、作ること自体が愚かなことである。

〔STEP3〕それをどのように展開しているか？

神々とされる偶像を作る職人たちは、飢えれば力も減ってしまう人間に過ぎない。木で偶像を作る者は、一部を燃やして体を温め、パンを焼き、一部で神を作ってそれにひれ伏し、救いを願う。そのような神々が力を持つことはあり得ないのだが、偶像を作る者は、その愚かさには気づかない。

【KEY2 神の福音を語る】

〔STEP1〕この個所で神はご自身について何を表されたか？

神は、力に限りのある人間によって作られたお方ではない。木材の残りで作られた神々のように救う力のないお方ではない。

〔STEP2〕前後の章は、神について何と言っているか？

主のほかに神がないことが、直前の個所（44:6～8）で述べられている。さらに43:11,12には、主のほかに神がないのと同時に、主のほかに「救い主はない」とまで言われる。

直後の個所（44:21,22）では、まことの神である主に立ち帰るように言われる。そして、キュロスを通して、主の贖いが実現し、エルサレムが再建されることが述べられる（44:24～45:13）。その際、主のほかに神はなく、他のものはむなしいものだと言われる（45:5,6）。

〔STEP3〕聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

墮落以来、人間は主を離れ、まことの神ではないものを拝み、頼りとするようになっていく。そのような偶像礼拝は、全世界に及んでおり、イス

ラエルにおいてさえ、繰り返された。神の国の完成は、偶像礼拝がむなしいものであることが明らかにされ、ただ一人の生けるまことの神のみが崇められるようになることでもある。主の民の間では、すでにそのことが実現し始めている。

【KEY3 子どもたちの信仰と生活のために語る】

〔STEP1〕この個所に登場する当時の人びとの必要は何だったか？

偶像を作り、それを拝んで頼りとしている者たちがいた。彼らは、そのむなしさに気づいていなかった。

〔STEP2〕私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

子どもたちの周りにも、偶像礼拝が蔓延している。日本においては、木や紙で作られたものが「神」とされて、自分の願いを実現したり、守ったりしてくれると考えられている。また、伝統的な宗教ばかりでなく、学歴や財産も、人生を保障してくれるものとされ、そのために多くの犠牲が費やされている。特に中高生には、受験が人生を決定づけるほどの力を持っているかのように信じさせる環境がある。それによって、人生を決定づけるお方がどなたであるのかを見失わせている。

〔STEP3〕この聖書箇所「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

主は、偶像が人間の作ったものにすぎず、本当には力を持たないことを教えられる。そのようなものに、ひれ伏し、多くの犠牲をささげることは、まことにむなしいことである。まことに救いを与える力をお持ちの方にのみ信頼し、その方のみを拝んで歩いていこう。

（テモテ指導者訓練「聖書の説教」モジュールを参考に項目を立てました。）（大西良嗣）

テキスト イザヤ書 44章9～20節
子どもと親のカテキズム 問10

〔単元のねらい〕

子どもたちの周りには、偶像、異教的な世界観、占い、高校・大学受験など、「人間が造り出した命のない偶像」がはびこっている。古代イスラエルと同じように、異教的な環境に取り囲まれた子どもたちのために、それらが限りある人間の造りだしたものに過ぎず、それらを拝むことがいかにむなしいことであるかを明らかにしたい。それによって、子どもたちが異教的な環境にあっても、常に主に立ち帰ることができるように導きたい。

人間が造り出した偶像

みんなは、鉄で何かを作るのを見たことある？ テレビなんかで見たことあるかな？ 真っ赤になるまで鉄を火で熱して、金づちでカンカン叩いて形を作るのだね。鉄は固いから形を作るのに時間がかかるし、暑くて汗がダラダラ出てくるし、とてもたいへんです。お腹も減ってくるし、水を飲みながらやらないと熱中症になってしまうかもしれないね。

旧約聖書のイスラエルの人たちの中には、鉄で偶像を作って拝んでいる人たちがいました。鉄で作ると、硬いし、重いし、光っているし、力があるように見えたのかもしれないね。

けれども、本当に力があるのかな？ 作ったほうの人間が、お腹が減れば力がなくなるし、水を飲まなければフラフラになってしまうほど弱いのに、そういう弱い人間が作った偶像が、人間を守ってくれるほど、力があるとは思えないね。

木で偶像を作った人たちもいました。長さを測って、図を描いて、きれいに人の形を作ったりしました。けれども、木の偶像は、自分では歩くこともできないから、作り終わったら人間が運んであげて、神殿においてあげなければなりませんでした。

木は、とっても役に立つものです。いろんなものが作れるだけでなく、寒い時には燃やして温まったり、食べ物を焼いたりすることもできます。

けれども、こういうことをしたら、どうかな？

ある人が、一本のモミの木を切る。その木の半分は薪に使う。燃やして、お肉を焼いて、「おいしいなあ」と言って楽しむ。それから、キャンプファイヤーみたいに燃やして楽しんだり、たき火にして温まったりしても良いかもしれない。そうして、残りの半分で、偶像を作る。その偶像にひれ伏して、「お救いください。お守りください。わたしの神さま」と祈る。

お肉を焼いたり、キャンプファイヤーをしたりするのに使うのと同じ木でできているのに、その木を神さまのように拝むなんて、どうかしているね。そんな木で作ったものに祈っても、守ってくれるはずがないことなんて、少し考えればわかりそうなものだね。

ところが、人間は、そんなことにも気が付きません。イスラエルの人たちは、ただ一人のまことの神さまを知っていたはずなのに、鉄や木で作った偶像を拝んでしまっていました。それがおかしいことだと、ちっとも気が付きませんでした。周りにいる人たちが、木で作った偶像を拝んでいたの、自分も拝んだ方が良いのではないかと思ってしまうみたい。拝まないと、畑に作物がたくさん取れなくなるのではないかと、戦争で負けてしまうのではないかと、心配になってしまったみたいです。

日本でも、たくさんの人が、神社にお参りに行

きます。特にお正月には、たくさんの方が神社に行って、今年一年守ってくれるようにお祈りをします。でも、神社に祭られているのは、人間が木や布や紙で作った偶像です。そんなものには、守ってくれる力がないことなどわかっているはずなのに、拝まないと心配になってしまうみたいです。

交通安全のお守りを自動車やランドセルにぶら下げている人を見たことがありますか？ あのお守りの中には、だれか人間が字を書いた紙が入っているだけです。そんなものが、交通事故から守ってくれるはずがないことは、すぐにわかるはずだけど、持っていないと心配になってしまうのですね。

（【中高生向け】高校受験や大学受験をする人たちの中には、学問の神さまとされる神社に行き、お祈りの言葉を板に書いてぶら下げてきたり、お守りを買ってきたりする人もいます。そんなものが合格させる力はないことは、少し考えてみればわかるはずなのに、心配だから、拝んでお願いをしてしまうのだね。もっとも、受験の可否は人生を決定するほど重要なことではありません。不合格だったからこそ与えられる素晴らしい人生もあります。人生を決定するのは、受験の結果ではな

く、ただ一人のまことの神さまです）

私たちを守り、救い出す力を持っているお方は、人間によって作られたものではありません。むしろ、人間を造られたお方です。そればかりでなく、この世界をも造られ、支配しておられるお方です。だからこそ、私たちの祈りを聞き、私たちを守り、助ける力をお持ちです。

木や鉄や布や紙で人間が作ったものが、何か特別な力を持っているかのように信じて拝むことは、神さまがもっとも悲しまれることです。

私たちは、この世界を支配されているお方が、どなたであるのかをいつも思い起こす必要があります。周りの人たちが、お守りを持っていたりすると、自分も持っていた方がいいかななどと、心配になってしまうことがあるかもしれないけれど、そんな心配をする必要はありません。なぜなら、聖書を通してご自分のことを教えてくださった、私たちの神さまだけが、本当に守る力をお持ちのお方だからです。ですから、私たちは、ただこのお方だけを神さまとして信じ、拝み、祈って、歩んでいきましょう。（大西良嗣）

〔今週の暗唱聖句〕 レビ記 19章4節

偶像を仰いではならない。神々の偶像を鑄造してはならない。

わたしはあなたたちの神、主である。

〈ねらい〉

人間が造り出した偶像は無力なものであり、それを拝むことはむなしいことであることを教え、わたしたちの造り主であり、救い主である真の神さまのみを信じ、礼拝していこうと促す。

〈展開例〉

Q. みんなの周りにはさまざまな偶像がありますね。神社やお寺など。占いなどもありますね。そして日本では多くの人々がそれを拝み、願い事をしたりしています。でもそれが本当に願い事を聞いてくれる力のある神さまなのか。

A. いいえ。

Q. そうですね。ではなぜそのような神さまには力がないのでしょうか。

A. それは人間が造った命のない偶像にすぎないから。

Q. イスラエルの民族の周りにも様々な偶像がありました。たとえばある偶像は木で造られていました。でも木はそれ以外にもいろんなことに役立ちますね。たとえばどんなことに使うのでしょうか。

A. たき火をして暖まる。燃やしてパンや魚を焼くなど。

Q. そうやって使った木の残りを使って、自分のための神さま、偶像を造るのですね。そしてそれを拝み、「お救いください、あなたはわたしの神」と祈ったりします。そのような木

の切れ端で造った偶像に本当に人間を救ったり、守ったりする力があるでしょうか。

A. ない。

Q. そうですね。そんなことをするのは愚かで、むなしいことであると神さまは御言葉によって教えておられます。それはよく考えれば気付くようなものですね。しかし、人間はそれに気付かず、偶像を拝み続けています。わたしたちが本当に拝み、頼るべき神さまはどのようなお方かな。

A. 人間が造った偶像ではなく、わたしたちを造り、またこの世界のすべてをお造りになられた神さま。そしてイエス・キリストによってわたしたちを救ってくださる神さま。

Q. イスラエルの人々は真の神さまを捨て去り、偶像を拝むという過ちを何度も犯してしまいました。そのことを神さまはどう思われるでしょうか。

A. それは神さまがもっとも悲しまれ、怒られること。

結論：

わたしたちの周りにも偶像を拝んでいる人々がたくさんいるでしょう。しかし、それらの人々に惑わされて、偶像を拝んではいけないのです。それはむなしいことであり、神さまがもっとも悲しまれることだからです。わたしたちを救って下さる力あるただおひとりの神さまを拝み、祈ってゆきたいと思います。

【目標】

偶像礼拝の中にある空しさ、滑稽さに思い至る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？

2. 改めて御言葉に取り組む

①イザヤ書の記述方法

イザヤ書44章9～20節。大変風刺的な、そしてうまく書かれた御言葉である。この御言葉が発するメッセージは「偶像の無力さ」であるが、ここでは偶像への批判が直接述べられているわけではない。ここには偶像そのものに対する批判というよりも、当時の細工師の知識と技術が披瀝され、偶像製作の過程が詳述される。それは鉄工・木工に関する当時の最高水準の技術を示すものだが、しかしそれが、そのことによって生み出される偶像への強烈な風刺となり、偶像を作り拝む者たちの迷走ぶりと滑稽さが浮き彫りにされている。

②無力な偶像

9節の御言葉、「偶像を形づくるものは皆、むりよくで、彼らが慕うものも役に立たない。彼ら自身が証人だ。見ることも、知ることもなく、恥を受ける。」が、既に20節までの内容を要約している。「無力」と訳されている言葉（ヘブル語：トーフ）は、「混沌」「混乱」「虚構」「空虚」「無意味」という意味を含んでいる。

③人間以下のものを拝んでしまう倒錯

10～13節には、「偶像はその由来となる人間以上のものではありません」ということが述べられる。偶像は、疲れと渇きを覚えるような弱い人間の力に依存している。それは、まことの創造者であられる神の力とは根本的に違う。人間の努力の成果によって、人間を超えたものが生み出されることはない。11節の「恥を受ける」とは、偶像礼拝者が自分自身の尊厳を貶めていることを示し、13節の「人間の美しさに似せて」という言

葉によっては、偶像制作者としての人間にとっての美しさは結局自分に似せたかたちに至ってしまうという、「人間の理解やかたちを超えないものとして製作されてしまう神」という強烈な皮肉がほのめかされている。

14～17節には、「偶像はあくまで物質的なもの以上のレベルには達しない存在である」という事柄が示されている。ここには、偶像それ自体がもともと地の産物であり、それが偶像に仕立て上げられたことの背後には、それがたまたま台所で燃やされずに済んだだけのただの木片だったという驚愕の事実があることが、冷静に告げられる。偶像とは、偶然に、しかも残り物によって作られたものである。

④偶像礼拝の空しさ

18～19節では、「自らが病であることさえも自覚できない病人」の如き偶像礼拝者の姿が描かれる。このパラグラフは、偶像礼拝者への嘲笑にも似た調子で語り出されてきたが、19節に至っては、既に嘲笑的な響きは消え、偶像礼拝者に対する筆者のやりきれない思い、まことの神への立ち帰りへの願いが吐露されている。

20節の「彼」とは、偶像礼拝者のことである。彼は偶像に執着し、灰にすぎないものに憧れる。彼は惑わされることを選んで、自らを惑わした。詩編115編には、「偶像を作り、それに依り頼む者は、皆、偶像と同じようになる。」とある。また最後には「わたしの右の手にあるの（偶像）は偽りではないか」と言って偶像礼拝者が悔い改めて欲しいとの、筆者の嘆願が読み取れる。事実、このあとに続く御言葉が、偶像礼拝者にまことの神への立ち帰りを求めている。

3. 生徒と一緒に考える

Q：疑問は解けましたか？

Q：私たちの日常生活の中にある、人間の手によるものに過ぎない偶像とは何ですか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト

マタイによる福音書 28章16～20節

1. 三位一体論の重要性

三位一体の教えはキリスト教の教理の全体を定めるものである。三位一体論はキリスト教信仰にとって最高の重要性を有する教理であると言ってよい。使徒信条（カトリックも、東方正教会も、プロテスタントもすべて告白している基本信条である）の構造を思い浮かべてみたい。使徒信条はまず天地の造り主、全能の父なる神についての信仰を告白し、続いて神のひとり子、主イエス・キリストについて告白し、さらに聖霊についての告白をなす。つまり使徒信条の全体が、三位一体的な成り立ちになっているのである。このことは、三位一体論こそキリスト教信仰の土台であることを示しているのである。

2. 三位一体の聖書的根拠

三位一体の聖書的根拠ということを見るなら、旧約聖書においてはそれはまだ萌芽のようなものだが、新約聖書においてはもっとはっきりしている。まず、神が唯一の神であられるということについては、旧約聖書と同じく新約聖書においても大前提であり、揺らぐことはない（コリント一8:6等）。

さらに、その唯一の神という大前提のもとで、父、子、聖霊という三つのご位格がともに出てくる箇所がいくつも見受けられる（ルカ1:35、マタイ3:16, 17、コリント二13:13等）。

中でもとくに明確に三位一体の真理を示していると思われるのは、復活の主イエスが天に昇られる前に、弟子たちに伝道命令を命じておられるマタイ28:19である。ここでは「名」は単数形である。つまり、唯一の存在を表している。

その上で「父」「子」「聖霊」が「と」という接続詞によって結ばれており、そして「父」「子」「聖霊」それぞれに定冠詞がついている。これは父、子、聖霊の区別性ということを表す。つまり父も子も聖霊もそれぞれ独自の存在であられ、しかも三つの位格（ペルソナ）においてその固有性がどこま

でも貫き通されている、そのようなお方であることがここに示されているのである。

父、子、聖霊はおのおの区別された名と性質を保持しつつ、相互の交わりにおいて本質を同じくし、力と栄光において同等な、唯一の生ける神であられる。

問11 聖書の中で、神さまは「父」、「子」、「聖霊」と呼ばれていますが、神さまはただひとりではないのですか。

答 聖書の中でそう呼ばれている方は、父なる神さま、子なる神さま、聖霊なる神さまで、それぞれが力や栄光において等しく、同時にただひとりの生きたまことの神さまです。私たちは、ただ聖書に従って、この三位一体の神さまを信じます。

（子どもと親のカテキズム）

3. 存在論的三位一体論と経綸的三位一体論

三位一体については、ふたつの角度から考えることができる。ひとつは存在論的三位一体論で、神とこの世界との関係ということをひとまず切り離して、三位一体の神ご自身の存在、すなわち天地創造とこの世界の歴史ということに先立つ、永遠の次元での三位一体の神の交わり、内部のお働きという角度から考える三位一体論である。もうひとつは経綸的三位一体論で、神の世界と歴史への働きかけ、外部的御業というところから考えるものである。

今回はとくに存在論的三位一体論がテーマとなるが、両者の関係ということについてはふたつの点が覚えられねばならない。第一に、存在論的三位一体論は経綸的三位一体論に先立つ。存在論的三位一体論をしっかりと確立するということは、神の主権を確立することである。この神の主権、神中心性ということは、改革派神学がとりわけ強調する点である。このことがわきまえられていないと、永遠から永遠にいます絶対者、自己自存の主

権者という神の神としての性質があいまいにされ、神がこの世界に引き下ろされてしまうということが起こる。神が人間の手の中で思うままに操られてしまう、つまり神の偶像化ということが起こってくるわけです。神は世界に働きかける以前に、まさに神であられるのである。

第二に、存在論的三位一体論と経綸的三位一体論とはきわめて密接なつながりをもっている。ふたつの三位一体論が切り離されて、存在論的三位一体論だけがことさらに強調され、経綸的三位一体論が忘れられてしまうと、そこでは間違いなく三位一体論の抽象化ということが起こる。つまり三位一体の信仰が歴史の現実から切り離されて、頭の中だけの議論になる。「アブラハム、イサク、ヤコブの神」が「哲学者の神」になってしまうのである。

4. 存在論的三位一体論—愛の神の交わり

存在論的三位一体論を通して知ることができるのは、神は「生ける」神であられ、同時に「愛の」神であられるということである。

神は命の神であられる。そしてその命とは、愛の交わりにおいて示される命である。父と子は聖霊の愛の帯に結ばれ、全き愛の交わりを有しておられる。しかも、この交わりはたがいに仕え合うことにおいて成立する交わりである。

これがキリスト教の神観である。そしてこのような神を信じる者たちは、みずからもまた愛の神の交わりのすがたを反映して生きる者とされるであろう。神は愛である。そして神は信じる者たちを、三つにして一つなる愛の命の交わりへと迎え入れてくださるのである。 (木下裕也)

ア-メン

テキスト

マタイによる福音書 28章16～20節

〔単元のねらい〕

今回は存在論的三位一体論を取り上げる。三位一体の教理を子どもたちに教えることは苦心をとものうが、カテキズムに導かれながら学んでいきたい。とくに、存在論的三位一体論の本質に神の全き愛があることを確かめたい。

愛と命の神さま

聖書が教えるまことの神さまがどのようなお方か、これまで学んできましたね。もう一度「子どもと親のカテキズム」問9を見てみましょう。

問 聖書が語っているまことの神さまのほかに神さまがいますか。

答 いいえ、生きたまことの神さまはただひとりだけです。

このように、神さまはただおひとりです。ほかに神はありません。昔から日本の国には多くの神々があると言われてきましたが、これらはまことの神ではありません。神さまがお造りになったものを、人間が勝手に神にこしらえ上げているだけです。こうした偽りの神々と、生きておられるまことの神さまとははっきりと区別されなければなりません。

けれども、聖書の中には「父」、「子」、「聖霊」という三つのお名前が出て来て、そのいずれもが神さまであると教えられています。これは、どういことでしょうか。三つの神さまがおられるということでしょうか。そうすると、神さまはただおひとりだということはどう考えたらよいのでしょうか。

神さまはおひとりであられ、しかも父、子、聖霊であられる。これを「三位一体」といいます。わたしたち人間の理解を超えた、深い教えです。算数の理屈には合いませんね。けれども、昔からキリスト教会はこれこそが真理であると、聖霊に導かれながら信じ、告白してきました。なぜなら、

聖書がそのように教えているからです。聖書が教えるまことの神さまは、このような神さまなのです。

この教えは、決してわたしたちが理解できないものではありません。聖書の筋道のとおりに学んでいくなら、わたしたちも必ずこの教えのすばらしさを知ることができます。そして、覚えていてください。三位一体の教えを信じているかどうか、教会が正しい信仰に立っているかどうかをはかるものさしです。三位一体の教えは誤りだと言う教会やグループがあったなら、その人びとは聖書を正しく信じているとは言えないのです。

聖書の神さまは、ただおひとりです。しかも、このひとりの神さまに父なる神さま、子なるイエスさま、聖霊なる神さまという区別があります。見かけだけそうだというのではなく、それぞれにはっきりとしたご性質があります。そうでありながら、父と子と聖霊は神さまとしての力と栄光を等しく分け持つひとりの神さまです。

この三つにして一つなる神さまは生けるお方、命の神さまです。では、どのようなしかたで生きておられるのでしょうか。

それは、交わりにおいてです。神さまは愛です。父なる神さま、子なるイエスさま、聖霊なる神さまは、愛の交わりに生きておられます。御父と御子とが聖霊の愛の帯に結ばれて、たがいに愛し合っておられる、そういうしかたで交わっておられるのです。

この三位一体の神さまの愛は、完全な愛です。

愛そのものです。そして父と子と聖霊は、たがいに仕え合って生きておられます。父が子を支配するとか、無理に従わせるとか、そういう力の支配ではありません。三位一体の神さまは、おたがいにへりくだり、愛をもって仕えておられます。これが、聖書の教える神さまのすがたです。このことによってまことの神さまは、ほかのどのような神々ともはっきり区別されるのです。

それだけではありません。愛の神さまはわたしたちをも、愛の交わりに招き入れてくださいます。ルカによる福音書に「放蕩息子のたとえ」がありますね（15章11節以下）。このお話の父親が悔い改めて帰って来た息子を大いなる愛の喜びの中で迎えたように、神さまはわたしたちをご自身の愛の交わりに迎え入れてくださるのです。

十字架に死なれ、三日目に復活されたイエスさまが、天に昇られる前に、弟子たちに伝道の命令をなさいました。すべての民をわたしの弟子にし

なさい。そして、「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」（19節）なさいとお命じになったのです。

神さまはわたしたちを愛しておられます。わたしたちを罪から救い、わたしたちに永遠の命をくださるために、御父と御子と聖霊は、こぞってお働きになりました。このわたしの、ひとつの魂を愛して、こぞってお働きになったのです。

そして、わたしたちの救いは確かです。御父も御子も聖霊も、まことの神さまだからです。洗礼は三つにして一つなる神さまの御名によって授けられます。御名とは、神さまご自身です。洗礼を受けることによって、人は三位一体の神さまの愛の交わりに生きる者とされます。神さまの愛の力をいただきます。神さまの愛に守られて歩むことができます。神さまを愛し、隣り人に仕えて生きる幸いをいただきます。これほど喜ばしいことはありません。これ以上の恵みはありません。

（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕 ヨハネの手紙 — 4章16節

わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。



〈ねらい〉

神さまは父・子・聖霊の三つにしておひとり
の神さまであられ、愛の交わりのうちに生きて
おられること、そしてわたしたちもこの交わりの中
に入れられる幸いを知る。

〈展開例〉

Q. みんなは「三位一体」という言葉を聞いたこ
とがあるかな。

A. ある or ない。

Q. これは難しい言葉だけどキリスト教にとって
とても大切な教えなのです。わたしたちが聖
書にしたがって信じるのは「三位一体の神さ
ま」です。「三」という数字が入っていますね。
聖書には神さまについて三つのお名前が出て
きます。それは何だかわかりますか。

A. 父なる神さま。子なる神さま（イエスさま）。
聖霊なる神さま。

Q. では算数の問題です。1+1+1は何かな。

A. 3

Q. そう、簡単ですね。では父なる神さま、子な
る神さま、聖霊なる神さま、合わせて三人の
神さまがいるということになるのでしょうか。

A. 違う。

Q. そう、これまでも神さまはただおひとりし
かないないということを知りましたね。父なる
神さま、子なる神、聖霊なる神さまは三つの
区別された性質を持っていますが、同時に

ひとりの神さまなのです。それが「三位一体
の神さま」ということの意味です。これはわ
たしたちの頭ではなかなか理解することが難
しいね。でも聖書がそのように教えているの
で、わたしたちはそのように信じるのです。

Q. ではこの父なる神さま、子なる神さま、聖霊
なる神さまはそれぞれどのような関係にある
のでしょうか。ばらばらで存在しているの
でしょうか。

A. そうではない。

Q. みんなは自分とお父さん・お母さんとの関係
がどのような関係だと思いますか。

A. 親子の関係。家族。愛の関係。

Q. そうですね。子どもと親は血がつながってい
るだけでなく、愛によって結び合っている存
在です。実は三位一体の神さまの間にもその
ような愛の関係、愛の交わりがあるのです。
聖霊は父なる神さまと子なる神さまを結ぶ
「愛の帯、愛のきずな」とも呼ばれます。

洗礼を受ける時に何と言われるか知ってい
るかな。マタイ福音書28章19節を見てみよ
う。

A. 「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」。

結論：

そうですね。洗礼を受けるということは父と子
と聖霊なる神さまの交わり、愛の交わりの中に入
られるということです。神さまの愛の交わりの中
に生かされます。これは本当に大きな恵みであ
り、うれしいことです。

【目標】

三位一体なる神様について知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？

2. 三位一体なる神様について**①三位一体とは**

三位一体とは、読んで字のごとく、三つのかたちを持つが、その本質においてそれらは一体という意味である。この三位一体という言葉は、直接聖書には載せられていないが、聖書全体から導き出される結論として、キリスト教の神様は、この三位一体という性質を持っておられると言うことができる。三位とは、父なる神様、子なる神様（イエス・キリスト）、そして聖霊なる神様のことであり、いずれも神様であるので、これは別々の神様が三人おられるということではなく、その本質は一体の、一人の神様がおられるということである。

②存在論的な三位一体について

存在論的な三位一体なる神様とは、言葉としては難しいが、言うなればこれは、神様がいつも、三位一体という連携と一体性を維持しながら、三つ巴で働かれるという事態を指している。確かに歴史的には、創世記の創造の御業は「父なる神」によって始められ、「子なる神」であるイエス・キリストは新約聖書に於いて登場され、十字架に架かり、復活された。「聖霊なる神」はその主イエスの昇天後、ペンテコステの日に天から一人一人に下された。歴史的にはこの様な順序を、三位一体の神様は取られた。これを経綸的三位一体と言う。しかしそれら三位の神様の働きは、完全に別々に分割されてなされていたわけではなく、マタイによる福音書1章20節に「マリアの胎の子（＝子なる神イエス・キリスト）は聖霊によって宿ったのである。」とされていたり、ヨハネによる

福音書1章1節に、「初めに言があった。」とされているように、主イエスの誕生にも聖霊なる神がはたらき、創世記の創造の御業にも「言（子なる神イエス・キリスト）」がはたらかれたことが示唆されているように、神様がはたらかれる際には、常に三位一体の神は三つ巴ではたらかれるのである。その神様の内的な結び付きを、存在論的三位一体と呼ぶ。

③なぜ三位一体か

ではなぜ、神様はそのような三位一体というかたちで存在されるのか？是非考えてみて欲しい。三つであるということの中には、関係性が生じる。三つでありつつ一つである三位一体なる神様は、愛による一致を自らの内に完成させておられる愛なる神である。神様はその完全な愛の絆の中に、私たちを招いてくださっている。また三位一体なる神様は、単に天国に鎮座されているお方ではない。創造の業（父なる神）、罪からの救済の業（子なる神）、救いを各個人に当てはめ与える業（聖霊なる神）という三位の神の業によって、常に地上にいる私たちにはだらしかけ、アプローチし、手を伸ばすようにして届いてくださるということをその一番の特徴とされている。三位一体の神は、常に三つのかたちで、天から私たちに手を伸ばして、私に届こうとしてくださる、そのことのために非常に熱心かつ積極的な、愛を与え、愛に招く神様なのである。私たちの神が、この様な三位一体の神様だからこそ、天まで自力で上っていくことのできないような罪人である私たちのもとにも、この神様は下りてきて、手を伸ばしてくださることの可能な神様なのであり、三位一体のこの神様だからこそ、私たちがこの神様の愛に触れ、救われるということが可能になる。

3. 生徒と一緒に考える

Q：疑問は解けましたか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト	エフェソの信徒への手紙 1章3～14節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問12
参照教理問答	ウェストミンスター信仰告白 第8章6,8

問12 三位一体の神さまは私たちの救いのためにどのように働かれますか。

答 父なる神さまは救いを計画し、子なる神さまは救いをなしとげ、聖霊なる神さまはその救いを私たちのうちに与えてくださいます。

私たちの救いは初めから終わりまですべて神さまの恵みの働きです。

〈カテキズム解説〉

問11で扱われた「三つで一つ」なる神の本体についての告白に続いて、ここではその互いの関係が述べられます（経綸的三位一体）。父は子にすべてを託し、子は父に完全に服従し、聖霊はその両者から発する愛の息吹として互いを結んでいます。そして、三位一体の神は父と子と聖霊が互いに協力し合って一つの御旨を果たします。人間の交わりであれば互いの独自性のために三者三様となり、意思も行動もまちまちとなりますが、神の「三位一体」は神であるが故に完全に一致して一つの救いを実現します。

三つなる神の働きは、聖書の中で救いの歴史として表されています。そこから、天の父と子なるキリスト、聖霊には各々の固有の働きが認められます。創造から終末に至る歴史の全体と、その中に啓示される特別な救いの道筋は、神の永遠の御旨の内に秘められた計画です。旧約聖書に記されている天地創造に始まる歴史は、父なる神ひとりの御業のように見えますが、そこに啓示される救いの出来事はすべて御子キリストによる救いの成就と結ばれていますから、キリストと無関係な救いは一つもありません（ウェストミンスター信仰告白第8章6参照）。神の救いはすべて御子による贖いです。その御子による贖いが歴史の上にはっきりと示されたのが、受肉した御子の十字架と復活です。

父が計画し、御子が実現した救いは、聖霊によって人にもたらされます。聖霊は福音に示されたキリストの救いを人に信じさせ、感謝してそれを受け入れて罪を悔い改めるように導きます。聖霊に

よって信仰者は、イエス・キリストに結ばれて神の子となり、生涯の終わりまで永遠のいのちの希望に支えられて神の御旨を行います。

こうして三位一体の神による救いは、過去・現在・未来に亘る選びの民の命を完全に捉えていますから、救いは神の側でなされる一方的な恵みです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

箴言16章9節に「人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる」とあるように、旧約聖書では人間の思いを超えた神のご計画が随所で告知されています。それはいたずらな運命論とは異なって、選びの民イスラエルならではの主なる神への信頼の表明です。イスラエルの民は主なる神による救いを幾たびも経験し、それを語り伝え、思い起こすことによって、いついかなる時にも希望を失わないように励まされました（エレミヤ29:11）。ヨブのように神の御旨が分からないために苦悩せねばならないことがあっても、それを耐え忍んで救いを待つだけの価値があると信じるのがイスラエルの信仰でした。預言者たちの語った救いは歴史の上で幾度も実現して御言葉の真理を証ししていましたが、期待された終末的なメシアによる救いはイエス・キリストに啓示されたと新約の使徒たちは証言しています（ローマ16:25以下）。このキリストにおける啓示について、最も十分に書き記しているのはエフェソの信徒への手紙1章3～14節です。そこには天地創造以前に遡る神の救いのご計画、すなわちキリストにおける神の民の選びと、御子の十字架に

よる贖いと、聖霊の保証による教会の一致が、一連の救いの御業として述べられており、その最終的な目標が「神の栄光をたたえること」だと知らされます。

このように、罪人の救いは神の気まぐれによって起こされるものではなく、御子キリストに注がれた永遠の愛がキリストを介して教会に及ぶようにと計画された一つの神の御旨に発し、三つなる神の協働によって実現したことを聖書は明らかにしています。

イザヤ書55章11節の御言葉は、聖書が教会に求める神の言葉への信頼を述べたものとして重要です。この預言を受けてヨハネ福音書が冒頭で「初めに言があった」と告げているように、御子イエスは救いを成し遂げる神の言葉として世に送られたエージェントであり、それに相応しく失われた者たちを求めて地上を旅します（ルカ19:10）。イエスの逮捕と十字架刑による死は、人間の目からすれば政治的・社会的要因による歴史の偶然にすぎませんが、それが予め定められた父なる神のご計画であって、子なる神キリストの完全な服従による実現だったことが正に使徒たちの告げている「秘密」です。

聖書が語っている人間の救いは、父と子と聖霊なる神が罪の裁きから人のいのちを贖う一連の御業です。そこに御子イエス以外の人間が介入する余地はありません。「三位一体」という表現は聖書には見出されませんが、その語にまとめられた教えは神の救いの御業に焦点を当てれば、十分に

納得のゆくものではないでしょうか。

〈子どもたちに対して〉

「三位一体」という語はキリスト教信仰の真髄を表す教理用語ですから、たとえ幼い子どもであっても耳にしておくことはよいことと思います。ですが、「三つが一つ」という計算じみたことにかまけないように、「父」「子」「聖霊」のそれぞれの働きを聖書に即して覚えてゆくことが先決です。聖書の物語に記された一つひとつから救いの神を知ることが出来れば、それらは一つの神であると後で納得するのも容易です。最も難しいのは、永遠のご計画に定められていたキリストの選びという部分ですが、そこは無理に「三位一体」から説明しようとしなくてもよいと思います。「イエス様は生まれる前からわたしのことを知っていた」と素直に信じることができれば十分です。

逆に言えば、聖書の救済史に十分親しんでいないために「三位一体」が不可解な理屈に思える、ということは教会で起こりうることです。カテキズムによって聖書を理解し、聖書によって教理に確信が持てるように、子どもたちと一緒に教師や親たちも聖書によく親しむように心がけたいところです。当面、「父」「子」「聖霊」の働きは、この後の問答で一つずつ解説されますから、ここではその全体を捉える視点をキリストによる救いを中心にして簡潔に述べる事が出来れば良いでしょう。

(牧野信成)

テキスト

エフェソの信徒への手紙 1章3～14節
子どもと親のカテキズム 問12**〔単元のねらい〕**

聖書の神は「父」「子」「聖霊」と、とかくばらばらに捉えられがちで、そこにキリスト教の理解し難さもあります。しかし、各々が救いのために果たされる役割を整理しておけば「三位」が互いに関連付けられて一つになります。神の救いの業に焦点を当て、聖書に啓示された神を統一的に把握できるようにします。

人間を救う神さまの計画

私たちが信じる神さまは「三位一体」の神さまであることを前回学びました。聖書には「父なる神さま」と「子なる神さま」であるイエスさまと、聖霊なる神さまのことが書かれています。そうすると、三つの神さまがおられるようですが、神さまは三つで一つです。人間は三人いると、どんなに心を一つにしようとしても、三人バラバラですけれども、神さまは三つであっても、完全に一つの心で結び合っています。神さまは「ひとり」じゃないんです。「父」「子」「聖霊」の三人です。けれども、三人で一つの神さまです。

父なる神さまは、天におられる全世界の造り主で、イエスさまのお父様です。「子どもが卵を欲しがっているのに、蛇を与える親はいない」とイエスさまがおっしゃったように、天のお父様は御子なるイエスさまを心から愛していますから、イエスさまのためには何でも与えてくださいます。イエスさまは天のお父様のあとつぎです。

御子なるイエスさまは、天のお父様を完全に信頼して、お父様を喜ばせることだけを実行します。私たちにはお父さんやお母さんの心の中まではわかりませんから、失敗してよく叱られますけれども、イエス様には天のお父様の心がよくわかります。「三位一体」だからです。それで、イエスさまは人間になって地上にお生まれになって、天のお父様のためにすべてのことをなさいました。ですから、イエス様は罪を犯しませんでした。完全に天のお父様の御心を行ったからです。

聖霊なる神さまは「霊」ですから、人の心の中を行ったり来たりできます。聖霊は天のお父様の心から御子イエスさまの心へと渡り、またイエスさまの心から天のお父様の心へ入ります。だから、聖霊は天の父とイエスさまと同じ一つの心をもっています。この聖霊が、ペンテコステの日に、天に昇られたイエスさまの代わりに地上にやってきて、弟子たちの心に入りました。それで、イエスさまの教会が地上に誕生しました。

三位一体の神さまは、三人ですけれども、こういうふうの一つの心で結ばれた一つの神さまです。その一つの心で、神さまは私たちを愛してくれて、私たちのために救いをなしとげてくださいます。

三人の神さまにはそれぞれの役割分担があります。父なる神さまは、私たちの救うための計画を立ててくださいました。私たちは生まれるずっと前から、天の神さまに愛されていて、救われて神の子となるように決まっていた。その計画を実行してくださったのがイエスさまです。イエスさまは、天のお父様のご計画にしたがって、マリアから生まれて私たちと同じ人間になりました。そして、罪人である私たちを救うために十字架におかかりなり、死んでお墓に入れられました。そうして完全に神さまのご計画を果たされたイエスさまを、天のお父様は復活させて天に引き上げられて、それからイエスさまが天のお父様に代わって世界を治めるようになりました。

イエスさまが身代わりに十字架で死んでくださったことによって、イエスさまを信じる人には罪の赦しと復活のいのちが与えられることになりました。そこで今度は、昔から愛されていた私たちのところに聖霊がやってきて、私たちのうちにイエスさまを信じる心が与えられました。イエスさまを信じる人は、そうして聖霊のお働きによって、罪が赦されていることを信じるようになりました。また、体は死んでもイエスさまのように復活することも信じるできるようになりました。

聖書に書かれている三位一体の神さまは、そのように父と子と聖霊が互いに協力して、力を合わせて私たちを救うために働く一つの神さまです。イエスさまを信じる私たちは、イエスさまと一つに結ばれて神の子になります。けれども、信じる前から神さまの心の中では私たちは神さまの子どもだったのです。その私たちのためにイエスさまは自分の命を投げ打って十字架にかかってくださり、聖霊が私たちの心に宿ってくださいました。三位一体の神さまは、そんなふうに私たちを愛するために一つであられる神さまです。(牧野信成)

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙 二 1章9節

神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、
わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。



〈ねらい〉

三位一体の神さまが、わたしたちの救いのためにしてくださることを学び、理解すること。

〈展開例〉

Q. おはようございます。先週から「三位一体」について学んでいます、「三位一体」ってなんだか覚えていますか？

A. 神さまは「三つで一つ」ということ。

Q. そうですね。「三つ」のどんな神さまが居てくれるんだった？

A. 「父なる神さま」「子なる神さま」「聖霊なる神さま」。

Q. 正解です。では、それぞれの神さまが、わたしたちにどんな風に働きかけてくださっているか、考えてみましょう！

Q. まず、父なる神さまは、どんなイメージかな？

A. イエスさまのお父さん、この世界をつくった、目に見えない、厳しいイメージ……etc

Q. いろいろなイメージがあるかもしれないね。神さまはこの世界を造られ、わたしたちのことも造ってくださいました。そして、イエスさまのお父さんであり、イエスさまのことを愛しておられます。

父なる神さまは、わたしたち一人一人の人生を計画してくださっているんだね。みんなが神さまを信じて、教会に来るようになったのも、神さまのご計画。

Q. では、「子なる神さま」はどうだろう？

A. イエスさま、人となられた、優しいイメージ……etc

Q. イエスさまのお話はたくさん聞いてきたし、

イメージしやすかったかな？

イエスさまは人として、この地上に来られた神さまです。

そして、わたしたちを罪から救うために、父なる神さまの立てたご計画に従って、十字架にかかり、復活されたんだね。イエスさまがいらっしゃるから、わたしたちは「天の父なる神さま」とお祈りができます。

Q. 最後は「聖霊なる神さま」だけど、どうでしょう？

A. ペンテコステ、わたしたちに働きかけてくださる……etc

Q. 一番難しかったかもしれないですね。「聖霊なる神さま」は、霊です。わたしたちの心に働きかけてくださいます。

わたしたちが教会に来たり、聖書を読んだり、聖書のお話を聞いて分かったりできるのも、聖霊なる神さまのおかげ。

先週からお話していますが、三つの神さまがばらばらで働いておられるのではなく、それぞれは一つの心のわたしたちの信じる、唯一の神さまです。神さまは、わたしたちの罪を救い、天国にいくように、働きかけてくださっています。

〈祈り〉

わたしたちの主イエスキリストの父なる神さま。わたしたちに日々働きかけ、わたしたちを愛してくださってありがとうございます。感謝の気持ちを忘れずに、一週間歩んでいけるようにお守りください。イエスさまのお名前をとおしてお祈りします。アーメン。

〈ワーク〉

以下のア～カを「父なる神さま」「子なる神さま」「聖霊なる神さま」のそれぞれの働きに分けてみましょう。

ア) 人となり、地上に来てくださった。 イ) わたしたちの救いの計画をたててくださった。

ウ) わたしたちのために一度死んで、復活された。

エ) わたしたちの心に働きかけ、教会に呼んでくださる。

オ) この世界を造り、わたしたちを造ってくださった。 カ) 心に自由に入ることができる。

【目標】

三位一体なる神様について知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 三位一体なる神様について

①経綸的三位一体とは

経綸的三位一体とは、三位一体なる神を、世界と歴史への外への活動から説明することである。その外への活動とは、主として父なる神によってなされる「創造」、主として子なる神によってなされる「贖い」、主として聖霊なる神によってなされる「完成」に大別することができ、それは歴史的に上記の順序でなされた。その創造と贖いと完成の御業は、三つの神による分断された御業ではなく、一人の神による、一つの一貫した救いの御業における三つの段階と捉えることができ、その三位の御業の一貫性を捉える時に、神様の経綸的な御業からさかのぼって一人なる神に至るという、経綸的三位一体の説明が成り立つ。

②汎神論に抗する存在論的三位一体論

汎神論とは、神と被造物との間の区別をなくし、神を被造物の中に内在化させてしまう思考である。そこでは神は天から地上へ引きずりおろされて、山や、石などのモノに置き換えられ、その絶対性と、人格を失ってしまう。これに対して、三位一体の神は、存在論的三一性において被造物の内側に埋没してしまうことから自由であり、汎神論的な考え方による、神＝被造物という枠組みを

超越する。

③理神論に抗する経綸的三位一体論

理神論とは、丁度汎神論とは逆で、神の摂理の業の否定によって、神を被造物から切り離し、もはや神をこの被造世界に干渉する力を持たない神として捉え、神を単純に秩序や法則を過去において作り出しただけの、今は世界にアプローチできない神として、世界の外側に追い出してしまう考え方である。これに対しては、三位一体の神は、経綸的三位一体性において世界から切り離されず、父（創造）、子（贖い）、聖霊（完成）という三様の仕方で歴史に積極的に関わる神として御自身を表される。

以上のように、三位一体論における存在論的、また経綸的な理解は、単なる思弁的な概念上の議論なのではなく、それぞれが聖書より必然的に導き出される、教会の神理解と信仰にとって具体的な意味を持つ、教理上の区分なのであり、この二つの三位一体なる神についての理解は、矛盾・反発し合うのではなく、互いに統合・補完し合うものである。

3. 生徒と一緒に考える

Q：疑問は解けましたか？

Q：もし私たちの神様が、三位一体の神様でなかったとしたら、もしかしたらキリストも、聖霊なる神もいなかったということになります。どの場合、どんなことになると思いますか？

Q：私たちの神様が、三位一体の神様であることは、あなたの信仰や教会の信仰にどのように作用しますか？考えてみましょう。

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト	マタイによる福音書 6章9節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問13
参照教理問答	子どもカテキズム 問11
	ウェストミンスター大教理問答 問10,11

問13 父なる神さまとはどのような方ですか。

答 父なる神さまは、独り子であるイエスさまの父であり、神さまの子どもとされた私たちの父でもある方です。

また、天と地の造り主で、今もすべてを支配しておられる全能の神さまです。

〈カテキズム解説〉

「父なる神」との呼び方が旧約聖書の中で用いられるのは稀であって、新約の啓示においてイエスが天の神を「わたしの父」と呼んだことに教理的な基礎があります。神の父性が意味するところは子に対する権威と扶養義務であり、子が意味するところは父の権威に従順であることとその継承権をもつことでしょう。三位一体の交わりにあって父と子の関係は完結していますから、本来そこに人の入り込む余地はありません。しかし、救済のご計画にあって人は御子イエスと結ばれ、御子と共に神の子の資格が与えられます。キリスト教界では普遍的救済の観点から「人類は皆兄弟」「神に造られた人間はすべて神の子」と言われることがあります。聖書が述べるのはキリストの故に信者が子とされることの恵みです（養子論、問3参照）。主の祈りにおいて「天の父に祈れ」と命じられたように、神の子とされたキリスト者には、イエスと共に神を父と呼ぶ光栄が与えられ、その特別な親密さにおいて神に全信頼をおくことが許されています。

父なる神に固有の働きは、創造から終末に至る被造世界の存在と歴史を永遠のみ旨のうちに計画された聖定に始まり、それを創造と摂理によって実行することにあります。尤も、その実行段階に至っては聖霊と御子の参与も認められますから、排他的に父なる神のものとすることはできませんが、創造者・全能者とは通常父なる神を指しています。

全能なる神の尊厳と、創造と摂理の業によって

万物を支配なさる主権とは、何者もそれを侵犯することのできない神の聖性をあらわしています。キリストの故に父子の関係に入れられた教会には、それ故の親密さが特権として与えられています。神の主権性だけが声高に強調されれば旧約的な「神への恐れ」が信仰のかたちになりますし、新約の愛の親密さだけが強調されれば罪の裁きへの恐れが失われて神の尊厳が損なわれます。聖書全体から教えられるのは、イエスの内に体现されている、父なる神への向かい方です。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

ヨハネによる福音書1章18節、14章7節で述べられている「子が父を映す」との捉え方は、創世記5章1節に表明された神と人との関係に、また、3節に記されたアダムとセトとの関係を継承するものと見ることができます。人には神のかたちが付与されており、子は父からそのかたちを受け継ぎます。人間の内には創造以来の神のかたちが付与されていますが、神の独り子であるイエスには父に似た、父にかたどられた姿が最も明瞭に受け継がれており、私たちはイエスを見ることによって父なる神を見ます。独り子イエスには、父が天でもっておられる栄光と権威とが委ねられており、それによってイエスは地上で力ある業をなし、悪霊を追い出し、病を癒し、十字架の贖いを通して罪の赦しと復活の命を獲得されました。信仰によってイエスに贖われた教会は、イエス・キリストと共に父の栄光に与かります。

イザヤ書63章では選びの民イスラエルが子と

呼ばれ、16節では主に向かって「わたしたちの父」と呼びかけられます。神の選びと贖いによってイスラエルはいわば神の子として養子にされたわけですが、その選びの歴史に御子が姿を現した時、イスラエルの民は神のご計画の中で御子と結ばれて子とされる恵みに与っていたことが明らかにされました。

ですから、主イエスは弟子たちに「主の祈り」を与えて天の父に祈るように呼びかけ（マタイ6:9）、すべての良いものを備えておられる父への信頼を求めました（マタイ7:11）。使徒パウロは子とされたことの確証を霊において受けたと述べ、聖霊が父に向かう子の心を教会にもたらししてくれると証ししています（ローマ8:14、ガラテヤ4:6）。「アッパ、父よ」とはイエスが神に呼びかけるときの言葉ですが、それが信じる者一人一人の口にも相応しく上るようにしてくれるのが聖霊です。

神が天地の創造者であり、すべてを支配する全能者であられることは、子が父をほめたたえる理由です。義人ヨブが不当な運命に力の限り抗った果てに、人間の限界を悟り、神の全能の前にひれ伏した（ヨブ42:2）ことは、その全能者にこそ希望があることが示されるきっかけとなりました。アブラムの前に姿を現した全能者は、ご自分への完全な信頼を彼に求めて、子どもができない

ために未来を失っていた彼に跡取りのイサクを生まれさせました。「人にはできないことでも神にはできる」とイエスは弟子たちに言われて、救いは全能なる父の憐れみであることをお示しになりました（マルコ10:27）。天地の創造者であり、全能の力をもったお方が、私たちの父として独り子イエスと共に、私たちの救いのために働いてくださる。神が父であるとはそういう慰めを意味します。

〈子どもたちに対して〉

家族の絆が保証されない現代社会にあって、父親に対する肯定的なイメージを前提とすることに躊躇を覚えます。しかし、父という表象が、神とキリストとを独特の関係に結んでいて、それゆえに私たち信仰者と神との間にも人格的な関係が成立するのですから、超越者・絶対者の冷たいイメージで子どもたちが神を捉えてしまわないようにしたいところです。実際は、そうした信仰の伝達は教理で教えられただけでは十分に伝わらないようにも思います。むしろ、イエスが弟子たちの模範であったように、CSの先生たちがどのような姿勢で父なる神に祈っているかが、なにより明瞭に子どもたちへの証しとなるはずです。

（牧野信成）

テキスト

マタイによる福音書 6章25～34節
子どもと親のカテキズム 問13

〔単元のねらい〕

創造者・全能者としての神の高さをしっかり伝えながら、御子に対する神の愛の完全を知り、その愛が御子と共に子とされた自分たちにも注がれていることに、心から信頼することができることを子どもたちに伝えたい。

神さまがお父さん

イエスさまが天の神さまにお祈りするとき、「アッパ」と神さまに呼びかけた。「アッパ」とは「お父さん」ということ。イエスさまは、神さまのたった一人の本当の子どもだ。だから「お父さん」と呼びかけてもおかしくない。天の神さまはイエスさまのためなら何でもしてくれるお父さんだ。甘やかしているんじゃないで、イエスさまのことをそれほど信頼していて、それほど愛しておられるから。そして、イエスさまも天のお父さんを信頼して、お父さんが喜ぶことは何かをよく知っていて、お父さんがしようと思っていたことをすべて行った。天のお父さんと独り子イエスさまは、そんなふうに心が一つに結ばれている。

けれども、イエスさまはお弟子さんたちにも、神さまのことをお父さんと呼びなさい、と教えられた。みんなも知っている「主の祈り」のはじめはなんだった？「天にましますわれらの父よ」だね。「天にいますわたしたちのお父さん」と最初に呼びかけるでしょう？ 私たちにも、神さまを「お父さん」と呼ぶように、とイエスさまは言っておられる。

どうしてそんなことができるんだろうか。それは、イエスさまを信じる私たちを、神さまがイエスさまと同じように見てくださるから。聖書からイエスさまのことを学んで、イエスさまと一緒に毎日を過ごしている私たちは、神さまの目からすれば、イエスさまと変わりがないから。だから、天の神さまは、私たちをイエスさまのように愛してくださるし、私たちのお祈りを、子どものお願

いのように聞いてくださる。私たちがお祈りするのは、お父さんをお願いするのと同じだ、ということ。そんなふうにお祈りしたことあるかな。

でも、ちょっと考えてみよう。聖書には神さまのことがいっぱい書いてある。天の神さまはどんな方だろう。創世記の初めには、神さまが天と地を創造された、とある。神さまは万物をつくった方だ。「万物」とは宇宙の全体とその中にあるすべてのもののこと。世界は勝手にできたのではない、ということは聖書が特別に教えてくれることだね。神さまがすべてをつくった。神さまは創造者だ。

だから、神さまには何でもできる。何にもないところから宇宙をつくったのだから、神さまにできないことは何もない。聖書には天地創造の他にも驚くようなことがたくさん書いてある。昔、イスラエルの人がエジプトで奴隷にされていた時、神さまはモーセをお遣わしになって、イスラエルの人びとをそこから助け出してくださった。エジプトを出た人びとは、神さまのいる場所を目指して旅に出たのだけれども、後ろからエジプトの軍隊が襲ってきた。やっぱり逃してはやらない、とエジプトの王さまが心を変えて、追いかけてきた。イスラエルの人びとは逃げようとしたけれども、目の前は海で逃げ道がなかった。それでもうだめだとあきらめかけたのだけれど、モーセが神さまに助けを願うと、目の前の海が真つ二つに割れて道ができた。そこを歩いてイスラエルの人びとはエジプトの軍隊から逃げることができた。後を

追ってきた兵隊たちは皆、海に飲み込まれてしまった。天地をつくった神さまにはできないことは何もない。天の神さまは全能の神さまだ。

新約聖書に書かれているイエスさまのことは見えても、全能の神さまのことがよく分かる。イエスさまは嵐をしずめるお方だ。覚えているかな？お弟子さんたちと一緒にガリラヤ湖で船に乗っていたとき、大嵐になって船が転覆しそうになった。その時、イエスさまが大声で「静まれ」と叫ぶと嵐は止んでしまった。また、イエスさまは悪霊を追いついたり、病氣の人を治したり、歩けない人を歩けるようにしてくれたり、死んでしまった人を蘇らせたこともあった。これはすべて、天の神さまの全能のお力だ。人間にはできないけれど神さまにはできることだ。

これがイエスさまのお父さんのお力だ。天地をつくられた方、何でもおできになる全能者が、イエスさまのお父さんである神さまだ。その神さまを、あなたがたもお父さんと呼びなさい、とイエスさまは言っておられる。

私たちはイエスさまを信じているから、イエスさまと一緒に神さまの子どもだ。十字架にかかって死んだイエスさまを、墓から復活させる力をもったお方が、私たちのお父さんだ。そのお父さんが、いつも私たちを見ておられて、私たちのために何がよいことかと考えておられて、すべてのものをいつも用意してくださっている。

イエスさまは今日読んだ御言葉でこう言っている。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか」(6:26)。子どもは親にとって何よりも価値のあるものです。本当の親は自分の命よりも子どものことが大切です。スズメやカラスを見ていれば、ちゃんと生きてる。それは、たまたま生きているのではなくて、神さまが生かしてくださっているからだね。野の花を御覧なさい、とイエスさまは言う。気をつけて見たことがあるかな？ 私たちの足元には本当

にきれいな花が咲く。お庭の手入れをしても、道端を歩いていても、知らないうちに白やピンクの花が咲いていていつもびっくりする。そして、こんなきれいな色はつくれないなあと思う。こんなに不思議な形は自分では思いつかないと思う。全部神さまの創造の力だ。神さまの命のかたち。けれども、あなたがたは神さまの子どもでしょう。だから神さまがもっと素晴らしくみんなのことをつくってくれている。そして何よりも大切に思っているのに違いない。ただの人間じゃない。天のお父さんにとって、みんなは自分の子どもなんだ。だから心配するな、とイエスさまは言っています。

天の神さまは、目に見えない、永遠で変わらないお方です。天地の創造者であり、すべてをご存知で、何でもできるすごいお方です。だからと言って、私たちには遠いお方じゃありません。私たちと関係ない冷たいお方じゃありません。イエスさまがおっしゃるとおり、天の神さまは私たちのお父さんです。お父さんだから、私たちのために最善のことをしてくれます。時にはお祈りが聞かれていないように思うこともあります。自分が思うとおりにならなくて、腹が立つこともあると思います。けれども、私たちは自分の思うとおりにすることが自分にとって一番いいわけではない、ということも段々分かるようになります。あの日、お父さんやお母さんや先生の言う通りにしておけばよかった、と思うようなことがそのうちに起こってきます。私たちは自分のことを何でも分かっているわけではないですから、いろいろ失敗をします。でも、天のお父さんは神さまですから、私たちのことを一番よくご存じです。私たちのことを何でもよく知っていて、一番よいことをしてくれます。そのお父さんを信じていれば大丈夫だ、とイエスさまは言っています。

お祈りするときに、天のお父さんにお祈りしていることを忘れないで。そして、お父さんがわたしのために一番良いことをしてくれると信じながら、何でもお願いしましょう。(牧野信成)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 1章18節

いまだかつて、神を見た者はいない。

父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

【目標】

父なる神の偉大な力によって守られ支えられている自分を知り、不安から解放される。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？

2. 改めて御言葉に取り組む

①思う程に思い悩むことの禁止

マタイによる福音書6章25節から34節の表題には、「思い悩むな」とあるが、もともとの言葉の意味は、思い思うなという言葉。「思う」ということは、否定されていないし、それは止めてもいいけない。しかし、ここで退けるようにと教えられているのは、思い煩うこと。思い悩むということは、一見小さなことのように思える。思い悩まないでやっていくということは、一見すぐできることのように思える。けれどもこれは、とても根が深い問題であり、たとえば、私たちは、思い悩むだけで一晩を過ごしてしまうこともできれば、ただ思い悩み続けて、丸一日を過ごすこともできる。思い悩み続けることによって、病気になることもでき、不眠症にもなることができ、無気力や意地悪にもなることができる。思い悩みということが、具体的な患いに、病になることがある。

②思い悩む代わりに信頼すること

何も与えるもの無しで、いきなり思い煩うのは止めなさいと言われても、私たちはとまどってしまうが、主イエス・キリストは、私たちを引き受けて、私たちの面倒を見てくださる神様のことを引き合いに出しながら、この神様がいるのだから、その方に任せなさい。神様を信頼して歩みなさいと言われる。

そこで主イエスは、自分のことや自分身の回りのことばかりに心が問われている私たちの目を、ぐいっと自分から離させるようにして、空の鳥を見なさいと言われる。空の鳥は、種も蒔かず、刈

り入れもせず、倉に納めもしない。でもしっかり生きている。不思議であり、彼らには冷蔵庫もなければ、預金通帳もない。けれども、空にはたくさん鳥がいて、元気そうにしている。バタバタと飢え死にした鳥が空から落ちてくるということない。その秘密は、神様が鳥たちを養ってくださっているからだ、主イエスは言っておられる。

そして、28節からのところでは、野の花を見てみよと言われて、明日は抜かれて焼かれてしまうような野の花でさえ、何も着飾っていないのに、綺麗だと言われる。

空の鳥も、彼らは冷蔵庫なしでも、明日の食事を心配せずに、楽しそうに鳴いて生きている。野の花も、そのままで凄く綺麗だ。ましてや、あなたがたはなおさらではないか。空の鳥は気楽でいいあとか、そういうことではなくて、あなたがたこそ、どんな時でも、空の鳥以上に喜んで、楽しく生きて欲しい。人間であるあなたがたこそ、小さな、取るに足りない鳥や花よりも大切な存在である。だから鳥や野の花より、もっともっと美しく尊い存在として歩んで欲しい。天の父なる神様は、私たちのことをそういう目で見ておられる。その価値ある美しい私たちが、衣服のことなどで思い悩んだり、明日のことを思い煩ったりしながら、戦々恐々して生きてしまうのはもったいないと、主イエス・キリストはここで言われている。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身が、神様のことをどのように信頼しているのかについて、生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：これまで、悩みが深くなり、思い煩うということまでいってしまう経験はありましたか？

Q：その悩みは解決されましたか？そこからどうやって立ち直ることができたのですか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト	創世記1章1～5節 コリントの信徒への手紙二 4章6節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問14
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問9 ウェストミンスター大教理問答 問15 ハイデルベルク信仰問答 問26

問14 天と地を造られた、神さまの働きとは何ですか。

答 それは、私たちの神さまが、何もないところから天と地とそこにあるすべてのものを、きわめて良いものとして造られた働きのことです。神さまのこの働きを創造と言います。

〈カテキズム解説〉

創造の教理全体から教えられることは非常に多くあります。例えば大教理問15から拾い出すと以下のとおりです。①神（三位一体の神）のご計画の実現としての創造、②力ある御言葉（キリスト）による創造、③無からの創造、④世界とそこの中にあるすべてのものの創造、⑤ご自身のための創造、⑥神の創造の六日間（字義とおりの六日間ではなく安息日との関係）、⑦良き創造、など。

カテキズム問14が示すのは、その中の、①無からの創造、②世界とそこの中にあるすべてのものの創造、③良き創造、です。証拠聖句を開いていくと、④力ある御言葉（キリスト）による創造、も含めることができます。

更に広い展開があることを視野に置きつつ、カテキズムの教える範囲を明確につかみましょう。今回はその中で、特に、「無からの創造」について、子どもたちと共に学びます。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

1. 創世記から

カテキズムは、「何もないところから天と地とそこにあるものすべてを」と語ります。「何もないところ」とは、創世記1章の記す天地創造の出来事からすると「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり」という状態のことです。

この創世記1章2節の翻訳は、口語訳では「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり」と訳されており、また新改訳三版では「地は茫漠

として何もなかった。やみが大水の上にあり」と訳されています。つまり「混沌であった」とは「形なく、むなしく」、「茫漠として何もなかった」ということです。

この「混沌であった」という言葉を調べると、まったく同じ言葉が、エレミヤ書4章23節に出ています。「わたしは見た。見よ、大地は混沌とし、空には光がなかった」。

エレミヤは、北イスラエルが滅びた後、南ユダがバビロン捕囚となる時までを見つめた預言者でした。神から離れた民が味わうことになった（この後味わうことになる）状況を、エレミヤは「混沌」（光が創造される以前の段階）と言い表したのです。

「混沌であった」には訳しだされていない「形なく」（口語訳）は、更に多くの箇所で見られます。少し例を挙げると、「荒れ野」（申命記32:10）、「道もない混沌」（詩編107:40）、「正しい訴えをする者はなく、真実をもって弁護する者もない。むなしいことを頼みとし、偽って語り、労苦をはらみ、災いを産む」（イザヤ59:4）など。これらはいずれも、エレミヤの預言と同様に、神から離れている民の状態を言い表しています。

「闇」は、更に大きな広がりの中で用いられます。出エジプトの時の暗闇の災い（出エジプト10:21以下）、主と民とを隔てる黒雲（申命記4:11、詩編18:12）、ヨブの自分を呪う声（ヨブ3:4-6）、神に反抗する者の姿（詩編107:10）など。

これらのことを考慮に入れると、創世記1章に

記されている創造の出来事、わけても「無からの創造」、「何もないところからの創造」、つまり「混沌と闇の中からの創造」が、どれほどの力ある慰めであったかを思い見ることができます。

イスラエルの民の歴史は、いわば一人の人間の歴史のようです。神のそば近くにいるときがあり、神の御手によって救い出されるときがあるのですが、しかし繰り返して神から遠く離れてしまうのです。それはまるで、荒れ野の生活の中で歩むべき道を見出すことができない人のようです。すべては混沌であり、暗闇に包まれ、神から遠く隔てられています。

しかし、私たちの信じる神は、あの創造の出来事を成し遂げたお方だ。混沌と闇という、まったくの「無」としかいいようのないところから、「有」（神の御前に有るを許されるところの有）を造り出してくださるお方だ。神の民を根本的に力づけた信仰こそ、「無からの創造」でした。これは、他の聖書的な言い表し方では、「無秩序の中での秩序の創造」と言い換えても良いでしょう。

いくつかの箇所を挙げておきましたが、イザヤもエレミヤも、この神の力によって立たされ、この神の御言葉を預かっていたので、混沌と闇の中でお、神の救い＝再創造を語ることができたのです。

特に捕囚の苦しみの中で、バビロンの神話と対決しなければならなかった民の指導者は、既にある材料から天地を造る神々よりも、無からすべてを造り出すことのおできになる神だからこそ、私たちを救い得るお方だと、語り続けることができたのです。

2. コリントの信徒への手紙二から

やがて旧約聖書がギリシア語に翻訳されたとき、この聖書的な言葉遣いは、どのように用いられるようになったのでしょうか。

最も興味深い例であるコリントの信徒への手紙二の4章6節を、創世記1章と並ぶ説教箇所として挙げておきました。

『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいま

した」。

パウロにとって、復活のキリストと出会う以前の自分は、闇そのものでした。パウロは、一人のユダヤ教徒として「神の無からの創造」という聖書の教えを受け取っていたはずですが。けれども、その「無からの創造」の力がどれほど凄まじいものであるかは、キリストと出会う以前には、知ることがなかったと言って良いでしょう。

パウロは、キリストを信じた後も「聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたし」（エフェソ3:8）という自覚を保ち続けました。「最もつまらない」とは、「無に等しい」という意味です。

キリストを知らず、いやキリストを十字架につけてなお殺している（使徒9:5）自分に、光が射し込んだとき、パウロは自分が闇そのものであることを悟りました。そして、自分の内に注がれているキリストの復活のお命という光がなければ、自分は無に等しい存在であると理解していたのです。無から有をあらしめる力。パウロは、この「無からの創造」の力を、キリストによってはっきりと体験し、体験し続けました。

私たちも、また私たちの目の前にいる子どもたちも、当初は、「私たちの神さまが、何もないところから天と地とそこにあるすべてのものを……造られた」ことを学びます。

しかし、その聖書物語の学びは、決してそれだけでは終わらないのです。私たちがパウロと同様に、復活のキリストと出会う前までは、「無からの創造」の力の凄まじさを味わい知ることができなかったように、子どもたちもまたそうだからです。子どもたちが真実に、「無からの創造」の力に打ちのめされ、そして引き上げられるのは、キリストによります。

子どもたちに語る私たちは、目の前にいる子どもたちの状況によって、ごく一部分を語らざるを得ないかもしれません。しかし、例えそうであっても、「わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光」を見つめていたいと思います。そこへと子どもたちが導かれるように祈って、御言葉を語りたいと思います。（安田直人）

テキスト 創世記1章1～5節
コリントの信徒への手紙二 4章6節
子どもと親のカテキズム 問14

〔単元のねらい〕

カテキズム問14に含まれている大切な3つのポイントは、カテキズム教案の中で順番に取り扱われていきます。今回は「無からの創造」です。第一に、神さまの「無からの創造」の働きを、そのまま語ります。第二に、この「無からの創造」の働きを受け取ってきた神さまの民が、この教えによって、どれほど力を受け取ってきたかを語ります。第三に、この「無からの創造」の力が、もっともはっきりとした形を取ってあらわれたイエスさまを指し示します。それぞれの日曜学校の状況に応じて、語る部分を取捨選択してください。

何もないところに、造り出される！

私たちも、いろいろなものを造ります。小さいお友だちは、粘土でお菓子を造ったことがあるでしょう。砂場の砂で、お団子を造ったことがあるでしょう。もっと大きいお友だちは、ずっと複雑なもの、大きいものを造ったことがあるかもしれません。お母さんと一緒にケーキを造った。お父さんと一緒にのこぎりや金槌を使って、椅子を造った。どうでしょう？

そういう私たちの、何かを造るときのことを考えて見ると、そこにはいつも、造るよりも先に、材料があります。粘土とか、砂。小麦粉に卵にバター。木の板や、木の棒。

ところが、神さまが、天と地とそこにあるすべてのものを造られたときのことを、聖書から読むと、様子が全然違います。創世記1章2節には、こう語られていました。「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」。

混沌。旧約聖書が書かれた、ヘブライ語の聖書を開くと、「トーフー ワ ポーフー」って書いてあります。「混沌」は、そういうふうに、二つの言葉からできています。一つは、「トーフー」です。これは、形もない、まるで町で暮らす人が荒れ野に行ったときに感じるように何もない、という意味です。もう一つは「ポーフー」です。これは、「空っ

ぽ」という意味です。二つ合わせると、すごいね。神さまが、天と地とそこにあるすべてのものを造られたとき、そこには、何もなかった、空っぽだった、ということだね。

私たちが何かを造る。そのときには、造るよりも先に、材料があります。神さまが造られるときには、何もないところから、造ることがおできになるのです。

神さまが、天と地とそこにあるすべてのものを造られたお働きのことを「創造」と呼びます。これは、私たちの造る力とは、比べることができない強い力です。何もない、空っぽのところから、「無」から造ることがおできになるからです。

今日は、神さまがすべてをお造りになられた、最初の日だけを見ました。何もない、空っぽのところ、神さまが一言、「光あれ」と言われると、光があったのだと、語られていました。

ただお言葉だけで、神さまは、すべてのものを造られたのです。

神さまの民にとって、この神さまの創造の力は、いつも、勇気を与えてくれるものでした。

神さまの民イスラエルは、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫から始まって、増え広がりました。最初に増え広がったのは、エジプトで奴隷として

働かされているときでした。エジプト王ファラオの力の下で、奴隷ですから、どうなるかわかりません。何も持っていないのです。無です。

けれども、神さまは、奴隷となっていた民を、エジプトから救い出し、ご自分を礼拝する民として新しく造り出してしまわれました。無から。

神さまを礼拝する民として成長し、やがて国を建て、神殿を建てるようになって、イスラエルの民は、順調ではありませんでした。神さまに背いて、王国は分裂してしまいました。他の神々を拝んで、神さまを悲しませました。

あのエジプトのときよりもっとひどい状態になってしまったこともあるのです。分裂した二つの王国の内、一つは滅ぼされてしまいました。もう一つは、バビロンという国に、捕囚となってしまったのです。イスラエルの主な人たちは、バビロンに連れて行かれてしまいました。残された人たちは、エルサレムに送り込まれた外国の指導者たちによって治められることになりました。バラバラにされ、言葉も通じない世界で、どのようにして生きていくことができるでしょう。

バビロンでは、バビロンの人たちが拝んでいる神々を拝むようにと、強く迫られたのです。「私たちの国を滅ぼした、バビロンの神々の方が、強いんじゃないか」。そう考える人もいたのです。

けれども、聖書を読みながら、イスラエルの人たちは、神さまを見上げました。バビロンの神々の話を聞いても、そこにいるのは、何かを材料に天地を造る神々だ。私たちの信じている神さまは、何もない、空っぽのところから、すべてを造ることがおできになる。もう真っ暗闇で、何も見えなと思えるところに、光を射し込ませることがおできになる。

今は、私たちは無だ。何もない。神さまから離れてしまって、空っぽだ。けれども、神さまは、昔、奴隷だったものを、神さまを礼拝する者へと造り変えてくださった。今も、何もない私たちを、無に等しい私たちを、神さまの民として、もう一度、新しく造り出してください。無から。

この神さまの民の歴史の中に、「光あれ」という神さまのお言葉そのものである、イエスさまが来てくださいました。ご自分と一つに結び合わせて、神さまの子どもとなって生きる者たちを造り出すために。

パウロという人の名前を、何度も聞いたことがあるでしょう。パウロは熱心なファリサイ派のユダヤ人で、聖書を良く学んだ人でした。イエスをキリストだとか、神の子だとか言っている教会は、神さまを冒涇している。そう考えて、イエスさまを信じる人を見つけ出しては、牢屋に入れていたのです。

いつものように、パウロが、イエスさまを信じる人を捕まえるために、道を急いでいた時のことです。突然、天からの光が、パウロを照らししました。「光あれ」という神さまの御言葉で、造り出された光です。いや、神さまの言葉そのものである、イエスさまが、輝き出てくださいましたのです。それで、光に打ち倒されたパウロに、イエスさまの声が響いたのだと、使徒言行録に書いてあります。

パウロは、神さまが天と地とそこにあるすべてのものを造られたお働きのことを、良く知っていました。聖書を勉強したのですから。けれども、その神さまのすべてのものを、何もないところから、空っぽのところから、造られるお働きの力が、どれほどのものかは知りませんでした。光に打ち倒されて、初めて分かったのです。

間違って聖書を読んできて、イエスさまのことを知らない、何もない、空っぽの私、真っ暗闇で何も見えていなかった私の心に、神さまは光を射し込ませることがおできになる。無から。

神さまが、無からすべてを造ることがおできになる力によって、何もない、空っぽの私たち、真っ暗闇の何も見えていない私たちの心にも働いて、イエスさまを仰ぎ見させてくださいますように。

(安田直人)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 二 4章6節

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、
イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

〈ねらい〉

創造主なる神さまが、何もないところからすべてのものをきわめて良いものとして造られたことを理解し、感謝すること。

〈展開例〉

Q. おはようございます。先週から、父なる神さまのことをいっしょに学んでいます。神さまが、最初にされたことって、一体何だったかな？

A. この世界を造られたこと。

Q. そうだったね。今日の礼拝では、聖書の一番はじめのところを読みました。みんなは工作や、料理がすきかな？ わたしは、料理は実はあんまりすきじゃないけど、「今日の晩ごはんは何にしよう……」そう考えながら、まずは冷蔵庫を見て、スーパーに行きます。例えばカレーをつくるなら、何が必要？

A. カレールー、お肉、にんじん、じゃがいも……etc

Q. うんうん。いくら料理が上手なプロだって、材料がなくては、何もつくることができないよね。

Q. だけど、今日読んだところで、神さまはどんなふうに世界を造られたんだったかな？ この世界の空や、海や、生きものたちの材料は、どこにあったんだろう？

A. 神さまは、何もないところから世界を造られた。

「光あれ」というと、光があった。

Q. そうだね。お話でも聞いたように、この「何もないところから」というのが大切です。聖書を見ると「地は混沌であって」と書いてあるね。「混沌」というと難しい言葉だけど、辞書で調べてみると、「天地のまだ分かれていない状態」というふうに書いてありました。

わたしたちが使っているのと違う訳し方の聖書を見ると、「地は形なく、むなしく」と書かれています。神さまは、何もないところから、「無」の状態から、世界を造られました。

Q. 今週の暗唱聖句にもなっていますが、コリントの信徒への手紙Ⅱ4章6節を開けて、みんな読んでみましょう。

A. (音読)

Q. この手紙は、コリントという場所の教会に宛てられた手紙ですが、誰が書いたか知ってる？

A. パウロさん。

Q. そうですね。パウロさんは元々、熱心なファリサイ派で、自分を神さまのこどもだというイエスさまのことを嫌っていました。イエスさまを信じるひとのことを、牢屋に入れたこともあります。だけど、神さまの光に照らされて、パウロは回心しました。光に照らされて、イエスさまの声を聞きました。その光は、立っていられなくなるほどの、神さまの力強い光でした。

Q. 神さまは、世界を造られて、それで終わりはありません。神さまの力は今でもわたしたちに働きかけてくださっています。何もないところから世界を造られた神さまがわたしたちのことを愛しておられ、いつも見てくださることに感謝しましょう。

〈祈り〉

わたしたちの主イエスキリストの父なる神さま。今日も教会に来られてありがとうございます。この世界を、わたしたちを、何もないところから造ってくださってありがとうございます。今週一週間もそのことを忘れないで過ごせますように。イエスさまのお名前を通して祈ります。アーメン。

【目標】

無からの創造の意味を理解する

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？

2. 改めて御言葉に取り組む

①無からの創造に宿る神様の意図

「初めに、神は天地を創造された。」創造されたということも大事なこと。天地は、初めからあったのではなかった。それは何かの偶然でできたようなものでもなく、誰がどうやって作ったのか分からないようなものでもなかった。創造するとは、新しいものを何も無いところから考えて、新たに一から創り出すこと。それは熟慮を必要とする、骨の折れる、力を要すること。しっかりとした目的意識を持って、意図的にやっていかないと、それは不可能。何かの流れでなんとなく、ということとは違う。

この世界が、偶然できた、どこが始まりなのか、どこに行き着くのかも分からないという世界だったとしたら、この世界が作られた目的は無いことになる。「すべては何のためにあるのか分からないので、せいぜい考えてみてください」ということになる。すべては偶然としか言えないということだったら、偶然についていくら考えてみても、偶然はあくまで偶然で、それは、目的も意味も持たない。私たちはそういう、冷たさを感じる、誰の血も通っていないような偶然に取り巻かれて生きているのではない。

②なぜ神様は世界を創造したのか

神様はこの天地を創造されたのか？ 私たちは神様の気持ちを考えてみたい。もし自分が神様だったら、なぜこの天地を創造するのか？大前提は、神様は創造前から、その存在は完全で、何の満ち足りていないところもなく、全く自己充足しておられたということ。

神様がこの創世記の天地創造をされる前には、光さえも存在しなかった。ましてやそこには、神様に、お前は这个世界を創造しろと命令するような上司もいなかったし、何日の何時までに創造を上げるという締切りや納期もなかった。神様は、何をしようがまったく自由だった。しかしそこで、別に誰に頼まれたわけでもないのに、神様は世界を創造した。誰にも強いられないで、自由な時間に、誰に命じられることもなく、自分の好きだと思ふことを、自分で自由に行なうこと、私たちにとってもそれは、遊びである。そして大事なことは、自由な遊びには、大きな喜びが伴う。何か強制されたうえでやる仕事というのは、時に苦しみを伴うが、そういうものではない全く自由な遊びには、純粋にそこには喜びが伴う。よって天地創造は、神様の退屈な作業であったのではなくて、とても楽しい、喜びに満ちた、期待に満ちた作業だったと言える。神様はきっと、自由の中で、そこにこそある大きな喜びと情熱をもって、この天地を創造して下さったのではないか。そこには自由で純粋な遊び心と楽しさがあるのではないか。

③この世界と人生を喜び楽しむべき私たち

良いおもちゃを子供に買い与えたにもかかわらず、それが無視され捨て置かれてしまうならば、親としてはとても残念である。神様からこの世界に生を受けた私たちが、この世界と人生を喜び楽しんで生きること。神様が私たちのために、喜びつつこの良き世界を創造して下さった目的は、私たちがこの世界の素晴らしさを味わい尽くし、与えられたこの命を喜び生きることである。

3. 生徒と一緒に考える

Q：疑問は解けましたか？

Q：この世界を創造された神様とは、どんな方ですか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト	エステル記4章1～17節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問15
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問11 ハイデルベルク信仰問答 問27, 28

問15 今もすべてを支配しておられる、神さまの働きとは何ですか。

答 それは、私たちの神さまが、創造された世界をご計画に従って今も支配し、私たちを救いの完成へと導いておられる働きのことです。神さまのこの働きを摂理と言います。

〈カテキズム解説〉

父なる神の働きとして、創造と並んで摂理が取り上げられます。創造と同じように、摂理の教理全体から教えられることも非常に多くあります。

カテキズム問15が示すのはその中でも、①神のご計画の実行、②今も治めておられる、③救いの完成へと導くために、です。証拠聖句を開いていくと、④すべての被造物に及ぶが何よりも教会を導く、も含めることができます。

更に広い展開があることを視野に置きつつ、カテキズムの教える範囲を明確につかみましょう。今回はその中で、特に、「神のご計画の実行」について、子どもたちと共に学びます。

「摂理」という言葉自身は、「創造」とは違い、聖書の中にはそのままの形では出てきません。神の働きを整理して理解する教会の営みの中で生まれ出た教理用語です（「創造」にも聖書の用語ではない教理用語の側面があります）。

それで、何よりも重要なのは、聖書の中に満ち満ちている、神の摂理の働きを物語る、聖書の物語に親しむことです。創世記にあるアブラハムのイサク奉獻やヨセフ物語、加えてエステル記などに親しんでいれば、やがて「摂理」という言葉が意味するところへと、導かれて行くでしょう。

「子どもと親のカテキズム」が、問14と15で、「神さまのこの働きを創造と言います」、「神さまのこの働きを摂理と言います」と言い表したのは、このそもそもの秩序を明らかにするためです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

エステル記は、全体として、ペルシアの国に、

離散の民として暮らしているユダヤ人共同体が陥ってしまう危機を、どのようにして神が乗り越えさせてくださったか、が描かれます。あらすじは、以下のようにまとめられます。

1章2章では、王妃が退けられ、新しい王妃として、ユダヤ人モルデカイの養女であるエステルが選ばれる経過が語られます。3章では、大臣ハマンが、モルデカイを嫌い、ユダヤ人絶滅の勅書を王に出させる企みの経過が語られます。4章では、モルデカイによって、エステルにこの危機が知らされ、ハマンの企みを撤回させるべく王に願うに至る経過が語られます。5章は、エステルが、その実現のために努力する経過が語られます。

不思議なことに、並行して物語は動きます。6章では、王は、かつて自分の暗殺計画があったときに、通報してくれたモルデカイのことを思い出します（2:21～23、ハマンとモルデカイの逆転）。7章では、ついにエステルの願いが聞き入れられ、ハマンの失脚と処刑が実現します。そして、8章では、モルデカイとエステルによって、ユダヤ人絶滅の勅書は取り消されたことが、ユダヤ人共同体に知らされます。9章では、迫害されていたユダヤ人共同体が逆の立場に身を置くようになって、かえってユダヤ人になりたいと願う人々が増える様子が描かれ、10章では、短くモルデカイの栄誉がたたえられて終わります。

今日のテキストである4章全体は、この中で、モルデカイをとおして、ユダヤ人共同体が陥った危機（ユダヤ人絶滅・財産没収、3:8, 9, 13）が、エステルのもとに届き、エステルにユダヤ人共同体の行く末（命）がかかっていることが明らかに

なる、という部分です。

この中で、取り分け私たちの心を打つのは、エステル¹の心の揺れ動きと、そのようなエステルに語りかけられるモルデカイの言葉、そしてそれを受けてのエステル²の決心の言葉、でしょう。

一方でエステルは、ハマンの企みによって、ユダヤ人共同体が陥った危機の深さがどれほどかということも、ユダヤ人共同体の指導者だった養い親のモルデカイの心の痛みも、良く分かっただろうと思います。

他方でエステルは、王妃であるとはいえ、多くの王妃の内の一人に過ぎず、また同時に王によって召し出されることなしに近づいたなら誰でも死刑に処せられることが定められている王宮に住んでいます。モルデカイの力も、ユダヤ人共同体の声も及ばない場所に、エステルは一人で生きているのです。王に働きかけることは、死を覚悟しなければできないことです。

そのような揺れ動きの中にいるエステルに、モルデカイからの言葉が届きます。「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」(14b)。

エステルは、モルデカイの言葉を聞き取ったとき(神の言葉として聞き取ったとき)、すぐにその意味を理解しました。そして、モルデカイにただ一つのことを依頼したのです。ユダヤ人共同体の心を合わせての、三日三晩断食しての、祈りです。

そして、モルデカイに覚悟を伝えます。「私も女官たちと共に、同じように断食いたします。このようにしてから、定めに反することではありますが、私は王のもとに参ります。このために死ななければならないのでしたら、死ぬ覚悟でおります」(16b)。

子どもたちにユダヤ人共同体が陥った危機と、モルデカイとエステル³のやり取りをそのまま物語れば、きっと子どもたちは強く胸を打たれ、泣く子どももいるかもしれません。

しかし「この時に生きる子どもたちのために」物語るようにと立てられた者として、一つのこ

だけは、語らずとも、心の奥に秘めておきたいと思います。

「この時」は、「人間の時」でもあります。ユダヤ人共同体が、ペルシアの地に、離散の民として暮らさなければならない困難な「時」です。ハマンが企み、王がその企みを見抜くことなく乗ってしまい、そうして進んでいく「時」です。

しかし「この時」を覆っている、「神の時」があるのです。この危機を乗り越えた後にわかるのですが、ペルシアの地でも、多くの人びとが神を信じる者となって立ち帰るようにと神が計画しておられたという「神の時」です。

その神の計画が実現していく「神の時」の中では、人もまた物事も、「人の時」では思いはかることのできない動き方をします。

離散の民としてペルシアで生きてきた歴史、モルデカイの養女という位置、王妃としての孤独な生活、すべてのことが、「この時のために」あったという了解。

私たち教師は、そのような経験を、かつて決定的に味わわせていただいた者たちです。どのような大きな歴史も、小さな経験も、どの一つも欠けてしまえば、起こらなかった「この時」⁴。それはキリストとの出会い⁵です。私たちは、「この時のために」すべてがあった、これからもあるということ⁶を了解している、小さなエステルなのです。

それで、私たちの日々の決心が生まれます。私のために祈ってください。祈りだけで十分です。私はしなければならないことをします。「このために死ななければならないのでしたら、死ぬ覚悟でおります」。

子どもたちが繰り返してこの物語を味わいながら、やがてキリストと出会い、すべてのことは、「この時のために」あったのだと了解する日を迎えることができるように、そのようにして「神の時」が子どもたちの上に実現するように、祈り求めて、教師会の祈りを集めて、覚悟をもって語り出したと思います。

(安田直人)

テキスト エステル記 4章1～17節
子どもと親のカテキズム 問15

〔単元のねらい〕

ペルシアで暮らさなければならないユダヤ人、王妃となったエステル、ハマンのユダヤ人絶滅の企み。「人間の時」が進んでいき、実現していくように見えます。けれども、実際に進んでいくのは「神さまの時」であり、実現するのは「神さまのご計画」なのです。その事実をはっきりと教えられたとき、私たちは「この時のために」立ち上がることができます。そのような出来事を起こしてくださる神さまの働きを教会は「摂理」と呼んできたことを伝えましょう。

この時のためにこそ

どれくらい昔のことでしょうか。ペルシアの国に暮らしていたユダヤ人たちがいました。多くのユダヤ人は、囚われていたバビロンからユダヤの地に帰り、エルサレム神殿の再建に取りかかっていました。帰ることのできない事情があったのでしょう。

ユダヤ人たちは、遠い異国であるペルシアの国で、肩を寄せ合って生きていました。ただお一人の神さまだけを礼拝し、偶像も人間も拝んだりしないユダヤ人は嫌われ者です。いつも、お互いにお祈りをして、支え合っていたのです。

ユダヤ人たちの中に、モルデカイという人がいました。バビロンに囚われていた人の残りの一人で、ベニヤミン族に属するみんなを導く人の一人でした。彼は、多くの人の面倒を見ていましたが、特に両親のいない、いどこにあたるエステルという女の子を引き取って、育てていました。

ある日、ペルシアの王宮で、王妃が一人、王妃の位から追われてしまい、代わりの王妃が選ばれるということが起こりました。

大変なことです。王のための王妃にふさわしい美しいおとめを探すようにと、全国にお触れが出されました。集められた美しいおとめたちは、王の前に出る前に、なんと一年間、一層美しさに磨きをかけさせられたのです。六ヶ月間はミルラ香油で、残る六ヶ月間はほかの香料や化粧品で、王

の前に出る準備をしたのだと書いてあります。ミルラ香油ってどんな匂いでしょうね？

エステルも、その地域の中で選ばれて、王妃の候補者になりました。一年間、美しさに磨きをかけて、王の前に出るときがやってきました。たくさんのおとめたちが、王の前に進み出ましたが、王が選んだのは、なんとエステルでした。

エステルは、こうして王妃になりました。ただ、ペルシアの人びとに嫌われていたユダヤ人であることを隠して、王妃になったのです。

遠いペルシアで暮らし、両親が先に死んでしまった。モルデカイに助けられたとはいえ、辛い生活を送ってきたに違いありません。王妃になれば、楽な生活ができるでしょうか。いや、そんなことはありませんでした。王には、王妃がたくさんいましたし、王妃だからといって、勝手に王の前に出たなら、たちどころに死刑だったのです。いつ王が自分のところに来てくれるか。それを待っている、実はさびしい生活を送っていたのです。

王の大臣に、ハマンという人がいました。王に気に入られていましたし、ハマンを敬うようにと人びとにも命じていましたので、誰もがハマンを見るとお辞儀をしました。けれども、モルデカイは人を拝んだりしません。それでハマンは、モルデカイのことが大嫌いでした。やっつけてやりたいと思いました。それなら、いっそのこと、モル

デカイが世話をしている、ユダヤ人全部を減ばしてしまえ。

こうしてハマンは悪だくみをして、ユダヤ人を一人残らず減ばし、財産を没収してしまうという王の命令をつくりだしてしまいました。

この王の命令を知ったモルデカイも、ユダヤの人びとも、どんなに悲しんだことでしょう。モルデカイは、嘆き悲しみながら、王宮にまで近づきました。そして、ついにエステルも、自分の家来をモルデカイのところに遣わして、何が起きているのかを知りました。モルデカイは、その家来をとおして、エステルに頼みました。「どうか、王のところに行って、ユダヤ人を助けてくださいと頼んでくれ」。

どうしたらよいでしょう。もちろん、エステルには、一緒に暮らしてきたモルデカイの気持ちも、モルデカイが世話をしてきたユダヤ人たちの気持ちも良くわかりました。でも、王宮の決まりがあります。もし、王の許しもなく、勝手に王の前に進み出たりしたら、すぐさま死刑になってしまいます。王が特別に金の笏を差し伸べない限り。それに、もう一ヶ月も、王はエステルのところに来ていませんでした。

エステルは正直に、自分の心の思いをモルデカイに伝えました。王宮の決まりのことも、王がしばらく自分のところに来ていないことも。

モルデカイから、もう一度、エステルのもとに返事が届きました。「この時にあたってあなたが口を閉ざしていて良いのか。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」。

そのモルデカイの言葉を聞いて、エステルのは激しく揺さぶられました。小さいときから教えられてきた、聖書の物語の数々が、頭の中によみがえりました。あのエジプトで働いたヨセフ。自分がエジプトにいるのは、自分を殺そうとした兄たちのせいなのではなくて、このことを用いて、一族の命を救おうと計画された神さまの導きだったのだ。そう考えたヨセフのことです。

私が今、多くのユダヤの人たちから離れてペルシアに暮らしているのは、子どもの頃に両親が死

んでしまってモルデカイに育てられたのは、ペルシアの国の王の王妃にまでなっているのは、どうしてなのか、その理由がわかった。

今この時のために、神さまが導いておられたのだ。ペルシアに住むユダヤ人たちの命を救おうとして、神さまが働いておられたのだ。神さまが計画しておられたことが、今、一つずつ実現しようとしているのだ。

そのことがわかったので、エステルは、立ち上がりました。そして家来をモルデカイのところに遣わして、一つのことを頼みました。「どうか、ユダヤの人たちに伝えてください。三日三晩断食をして、お祈りをしてください。私も、同じように三日三晩断食をして、お祈りをします。そして、王宮の決まりには反しますが、神さまのご計画なのですから、私は王のもとに参ります。もしこのために死ななければならなかったとしても、神さまは、私の死をも用いて、働いてくださるはず。今のこの時は、私の今までのすべての歩みは、神さまのご計画の実現のためにあったのですから」。モルデカイは、そのとおりにし、エステルもまた、そのとおりにしました。

そこで起こったのは、本当にエステルが確信したとおりのことでした。王は、許しなく自分のところに来たエステルを死刑にしませんでした。そしてエステル言葉を聞いて、ユダヤ人を一人残らず減ばし、財産を没収してしまうという王の命令を、取り消したのです。

皆さんにも、本当に自分もエステルさんと同じだと思うときが、必ずやってきます。

今この時のために、神さまが導いておられたのだ。神さまが働いておられたのだ。神さまが計画しておられることだけが、一つひとつ確かに実現していくのだ。

その時、皆さんは、神さまが皆さんを用いて、成し遂げようとしておられる計画の中に、自分から立ち上がって入っていくようになります。ここにいる日曜学校の先生たちは、実は、そのような一人一人なのです。
(安田直人)

[今週の暗唱聖句] エステル記 4章14節b

この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。

〈ねらい〉

エステル記を通して、神さまがわたしたちひとりひとりに救いの計画を与えてくださっていることを知ること。

〈展開例〉

Q. 今朝は、旧約聖書のエステル記のお話を聞きました。聖書のお話で、女の人主人公になるのは、実は珍しいことです。今日お話に出てきたひとを整理してみましょう。

A. エステルさん…ユダヤ人。両親が亡くなり、モルデカイに育てられる。ペルシアの王さまの王妃に選ばれる。

モルデカイ…ユダヤ人のリーダー。エステルさんをはじめ、多くのユダヤ人の面倒を見ている。

王…ペルシアの王さま。

ハマン…ペルシアの大臣で、王に気に入られている。モルデカイを疎んでおり、ユダヤ人を殺そうと企む。

Q. ペルシアの国に住むユダヤの人々は、どんな気持ちだったのでしょうか？

A. 自分の国に帰りたい、本当の神さまを礼拝するのが難しい、ペルシア人の言うことを聞きたくない……etc

Q. そうですね。わたしたちも、自分が信じていない神さまを無理に拝むように言われたら、いやだし、つらいよね。そんな中、エステルさんは自分がユダヤ人であることを隠して、王妃になりました。映画や漫画の王妃って、そういうイメージが強いと思います。だけど、この時代の王妃というのは、王さま1人に対して、何人もいました。しかも、自分から王さまに会いに行くと、王妃でも死刑にされることもあったそうです。王さまが自分に会いに来てくれるのを待つという、実はさみしい生活だったようです。エステルさんは、育ててくれたモルデカイたちとも離れて、王妃になったけど、どんな気持ちだったかな？

A. 不安、悲しい、孤独感……etc

Q. そんなときに、大臣のハマンが、とんでもないことを企みました。何でしたか？

A. ユダヤ人を全員滅ぼすという王さまの決まりを作った。

Q. そうです。大変恐ろしいですね。モルデカイはそれを知り、エステルさんに何を頼みましたか？

A. 「王さまのところへ行って、ユダヤ人を助けるようにお願いしてほしい」と言った。

Q. そうだったね。だけど、王さまのところへ行けば、死刑にされるかもしれない。もう1ヶ月も王さまはエステルさんに会いに来てくれていなかったからです。モルデカイにそれを正直に伝えました。モルデカイの返事はどうだったかな？

A. 「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」

Q. エステルさんは、すべてのユダヤ人に、3日3晩断食をして、お祈りをしてくれるよう頼みました。また、自分もそうしました。この時のために、自分はペルシアで王妃になった。これは神さまのご計画だということが分かったのです。

Q. 王はエステルさんを死刑にはせず、ユダヤ人を滅ぼすという決まりも取り消しました。

神さまが何を考えているのかわからない、自分はなぜこんなことをしなければならないのだろう、そんなことを思うこともあるかもしれません。しかし、神さまはわたしたちひとりひとりに、きちんとご計画を与えてくださっています。それを覚えましょう。

〈祈り〉

わたしたちの主イエスキリストの父なる神さま、御名を賛美します。神さまがエステルさん、ユダヤの人々を救ってくださったように、わたしたちも思わぬ方法であなから助けられることがたくさんあります。あなたのご計画を信じ、歩んでいけますように。イエスさまのお名前を通してお祈りいたします。アーメン。

【目標】

神様の摂理の御業の意味を理解する

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？

2. 改めて御言葉に取り組む

①摂理とは

摂理とは、人生の出来事や、人間の歴史は、神の深い配慮によって起き、導かれ、配慮され、保たれていることを信じるという、信仰的な人間理解、歴史理解である。摂理と言う言葉は直接聖書にはないが、それはエステル記など、聖書の内容から必然的に引き出すことのできる教理である。

②エステルが受けとめた神様による摂理

エステル記4章1～17節。エステル記の物語は、自分の人生を振り返って、それが一体何だったのか？そしてこれからどう進むべきなのか？ということを考える際に、とても多くのことを教えてくれる御言葉である。

エステル記は、映画にすればいい映画が撮れるだろうと思う程の、とてもドラマチックな物語であり、特にその前半は、これぞアメリカンドリームの実現と言ってよいような、心躍るようなエステルの成功物語として捉えることもできる。しかしこのエステル記は、庶民が王妃の位にまで上り詰めるという華々しいストーリーを、非常に客観的な第三者的視点で、抑制された表現で淡々と描く。そこでエステルは、まるで操り人形のように周りの状況の力の渦に巻き込まれるようにして、王妃の位に上げられる。このことによって、聖書は何を伝えようとしているのか？

そして途中、この物語の淡々とした色調が、ガラリと変わる場面がある。そのポイントは4章14節のモルデカイによる言葉。ユダヤ人が皆殺しにされる危機の只中で、モルデカイはエステルに言う。「この時のためにこそ、あなたは王妃の位に

まで達したのではないか。」この言葉に動かされて、エステルは死を覚悟して自分の使命を果たすことを誓う。そしてこの時を境に、エステルはこれまでの操り人形のようにではなく、まるで命を吹き込まれたかのようにして、主体的に、生き生きと言葉を語り、行動してゆく。

ここに、自分の人生に対する神様の摂理を受け止めた人間の姿がある。自分の人生は単なる偶然の破片ではなく、転がり込んできた偶然だと思われることの中にも、それを含んだ自分の歩みの全てに、神様のはっきりした意思と力が働いていた。そのことを悟った人間は同時に、自分の人生に与えられ、神様によってあらかじめ計画されていた、自分の使命を見出すことができ、その使命に向かって主体的に目覚めて、生きることができるようになる。そこでは、「今この時」が与えられている意味と、「今のこの時」に為すべきことが何であるかが見えてくる。

③私たちのそれぞれの人生にも与えられている神様の摂理的な導き

エステルと同様に、私たちの人生、歴史も、神様の熟慮もとに計画され、ここまで導かれている。人生の中には不可解と思えることもあるかもしれないが、それはエステル記前半のエステルにおいても同じだった。それぞれの人生に意味は必ずある。私たちの人生に、神は自らどのように働きかけて下さっているのか？神様の作り出される歴史の中で、私達の今日この一日は、どのような意味を持っているのか？祈りつつ、神に尋ね求めたい。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身にとって、神様の摂理を信じるとは、いかなることか、生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：この世界を創造された神様とは、どんな方ですか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト	ローマの信徒への手紙 8章28～30節、ヘブライ人への手紙 12章5～11節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問16
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問11 ハイデルベルグ信仰問答 問1

問16 運が悪いと言ったり、占いを気にしたり、たたりを心配する必要はありますか。

答 いいえ、キリストの父である神さまは、子どもである私たちを愛し、いつも守ってくださいます。たとえ涙がとまらないようなことがあっても、すべてのことが私たちの役に立つように導いてくださいます。

〈カテキズム解説〉

問16は、問15を今この時代に生きる子どもたちの視点に立って展開、解説している部分です。

問15では、「神の摂理の働き」について書かれています。そのことの展開例が問16で丁寧に記されている、ということです。

「運が悪い」という言葉は、キリスト者であってもしばしば使う日常用語だと思います。「運が良かった、悪かった」という表現をするたびに、「いいえ、それは運の良し悪しではなく、すべては神の永遠の聖定と摂理の御業においてなされたことです。偶然起こり来ることは何一つあり得ません！」と、さとするなら、キリスト者同士でも会話は成り立ちません。ですから、この表現自体を極度に神経質に取り扱わなくてもいいでしょう。むしろ、子どもたちが、「運の良し悪し」を言うとき、「よかったねえ……」「それはざんねんだったねえ……」と、寄り添いながら、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共になきなさい」との教えに従って、子どもたちと接していったらいいと思います。そして、喜ぶ人には、神様の祝福を、泣く人には人知を超えた神様の不思議な良いご計画があることを示していけたらいいと思います。

「占いを気にする」ということも実際にはあることだと思います。テレビの番組でも、毎日、星座占いによって、まことしやかに、「〇〇座の人は、今日は幸運です。思い切ってチャレンジしてみてください」とか、「〇〇座の人は、今日は気をつけてお過ごしください」と言います。気にしないつもりでも、不運が伝えられると、あまりよい気

持ちはしません。また、「たたり」が伝えられても、決して気持ちのいいものではありません。ですから、「運、不運、たたり、呪い」などについては、かなり丁寧に教えていく必要があるでしょう。

答の冒頭、「いいえ」とはっきりと否定をあらわしています。これは大事なことです。いろんな考え方、価値基準が横行する今の世において、はっきり、きっぱりと、「いいえ！」と言いきってあげることは、どれほど大切なことでしょう。

子どもたちが、「運、不運、たたり、呪い」を気にすることは仕方ありません。でもはっきりと言ってあげるのです。「いいえ、気にする必要はありません」と。なぜなら、「キリストの父である神様は、子どもである私たちを愛し、いつも守ってくださる」からです。

悪の力、悪魔の力、世の力が実際に働いています。理不尽と思われるような悲しい現実にも涙することもあります。でも、主イエスの救いのお働きによって、私たちの父となってくださっている、「天の父なる神さま」が、子どもである私たちを愛し守ってくださっている。この事実は確かです。この事実こそ思いを向けさせることが大切です。

使徒ヨハネはこう言っています。「あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです」(ヨハネ4:4)。

「運の良し悪し、占い、たたり、呪い」を恐れたり、気にしたりする子どもたちに、「たとえそういう思いにとらわれることがあったとしても、あなたがたのうちに住まれる、父・子・聖霊なる

神さまは、世の中のどんな力よりも強いのです」と、丁寧に、力強く励ましてあげたいものです。

「涙が止まらないようなこと」は必ず人生にはあります。それは、愛する者たちの死、ベットの死、世の罪、悪、不条理のせいであったり…と、さまざまです。涙することは避けて通れません。しかし、その涙のただ中にあってもなお、天の父が、あなたを御自身の子どもとして、愛して、鍛えてくださっている事実は変わりません。その事実を子どもに伝えてあげてください。

諸々の悲しみ、苦しみは、神の子とされている者たちにとっては、自分たちが神の子どもとして成長して行く上で、一切が訓練の道具として用いられるのです。ローマの信徒への手紙もヘブライ人への手紙もそのことを示しています。

《聖書テキストの解説と黙想》

ローマの信徒への手紙8章28～30節では、「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています」と、あります。ここで注意したいことは、「いろんな辛いこと悲しいことがあるけれども、結局すべては、あなたにとって良いことになるのです」と、教えることです。万事が益となるのですが、二つの観点から、万事が益となるということ子どもたちに教えることが大切です。

一つは、すべてのことを通して、神様のご栄光が最終的に現わされる、ということです。同じパウロのローマの信徒への手紙でこうあります。11章33～36節です。

「ああ、神の富と知恵と知識の何と深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。『いったいだれが主の心を知っていたであろうか。だれが主の相談相手であったらうか。だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。』すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」。

ここで言われているように、すべてのことが、神から出て、神に向かい、すべての口が、「栄光が神に永遠にありますように、アーメン」と神を

ほめたたえるようにと、一切がおりなされ導かれています。この深い真実を子どもたちに分かるように伝えることは決して簡単ではないでしょう。でも、「神様って、本当にすごい御方だね。神様がどんな御方かを知れば知るほど、すごい御方だなあ、と神様の御名をほめたたえることになるよね」と、伝えてあげてはいかがでしょう。

もう一つの観点は、一切の苦しみ、涙は、キリストによって神の子とされている私たちにとっては、神の子として成長させられる訓練だ、という事実です。ヘブライ人への手紙12章5～11節はそのことを伝えています。「……『わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。なぜなら、主は愛するものを鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。』あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。……肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです」。

この聖書の言葉ほど、ローマ8章28～30節を上手に説明している箇所はないのではないのでしょうか。すべてのことが、キリストによって神の子とされている者たちにとっては益とされるように共に働く。そして、自分が天の父なる神の子として、イエス様に似た者とされていくことにおいて、すべてが訓練として用いられるのです。

こうして私たちはパウロのこの告白へと導かれるのです。「これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。……どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」(ローマ8:35～39)。この、神愛の確信へとすべてを通して神の子たちは育て上げられていくのです。(芦田高之)

テキスト ローマの信徒への手紙 8章28～30節、ヘブライ人への手紙 12章5～11節
子どもと親のカテキズム 問16

【単元のねらい】

どんなにつらいことがあっても、父なる神さまが私たちを見捨ててことはありません。

私たちを神様の子どもとして鍛えるために、神様は私たちになんらかの形で訓練を与えていてくださるのです。

天の父の訓練

【運が悪い】

運が悪いとか、運がいいとか思ったことがありますか。私はそう感じるがよくあります。運が悪いと思うことはきっとあると思います。でも、たとえそんな嫌なことが思いがけず起こったとしても、あまり心配しないでください。天の父なる神さまが、あなたの本当のお父様であられる事は確かです。何でこんなことが……、ということが突然思いがけなく起こったとしても、天の父なる神さまは、あなたをご自分の子どもとして、愛して下さっています。

【占いや、たたり】

あなたは、占いを気にしたり、たたりを心配したりすることがありますか。毎日、テレビの番組で、「〇〇座の人は、今日はよい日です」「〇〇座の人は、今日は気をつけてください」と、言っています。占いで運が良かったり悪かったりと、言われると、やっぱり気にしてしまいますね。

どうしてこんなにいやなことが続くんだろう、どうしてこんなに悲しいことが私にばかり起こるんだろう、と思えることがあるかもしれません。

それでも、天の父なる神さまは、あなたのことをご自分の子どもとしていつも守って下さっています。大事に、大事に愛して下さっています。だから、運が悪いとか、占いや、たたりなんか、全然気にすることはありません。

【涙が止まらない】

でもやっぱり、悲しいこと、つらいことって、ありますね。大事な人が亡くなったり、かわいいペットが死んだりしたら、悲しいですね。涙が止まりませんね。学校でいじめられることがあるかもしれません。「何で私ばかりがこんなにいじめられなければならないの？」って、死にたくなるほど、苦しいときがあるかもしれません。いつになったらこの涙は止まるんだろう、と思えることがあるかもしれません。

世の中には意地悪な人が大勢います。いじめは、大人の世界でもあります。学校だけでなく、会社でもあります。いじめられて泣いている人は、あなただけではないのです。

【何でこんなに苦しみが続くの？】

本当に悲しいことが続く。涙が止まらない。苦しくて辛くて仕方がない。そういう時があるかもしれません。でも、忘れないでください。そんな苦しみの中にいても、天の父なる神様は、あなたの本当のお父様として、あなたを守って下さいます。あなたを愛して下さいます。

あなたは、こう言うかもしれません。「もし天の神様が私の本当のお父さんで、いつも私と一緒にいて、私を助けてくださる、と言うなら、どうして、こんなにつらいのに放っておかれるの？」と。

神様はあなたが苦しんでいる時、涙を流している時、ほおっておかれるわけではありません。あな

たのそばにいて、あなたを鍛えていてくださっているのです。

【神の子どもとしての訓練】

天の父なる神さまは、あなたの本当のお父様です。だから、あなたが、神様家（かみさまけ）の子どもらしく成長するようにと、訓練を与えてくださっているのです。ヘブライ人への手紙 12章5～11節を、一緒に読んでみましょう。

「また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。『わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけません。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。』あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです」。

神様家（かみさまけ）の子どもとして成長していくようにと、お父様である神様が、苦しみや、涙するようなことを訓練として用いておられるのです。あなたを子どもとして愛しているから、もっと、神様家の子どもとして成長するようにと、トレーニングを与えてくださっているのです。

【すべてのことが益となる】

神様が、お父様として、すべてのことを用いてあなたを訓練してくださっています。あなたが、神様の子どもらしく立派に成長するためです。だから、神様からの訓練を受けながら、あなたは、だんだんと、あなたの天のお父様が本当にあなたのことを愛していてくださっている事実を、今まで以上に知ることができるようになっていきます。「天のお父様ってすごい御方だなあ。本当に私を大事に思ってくださり、私を神様家の子どもとして鍛えてくださっているなあ」と、思えるように育ててくださっています。

あなたは、いじめられているかもしれませんね。それで今、泣いているかもしれません。それは、あなたが神様の子どもになるためです。神様の子どもは、悲しんでいる人を慰めるのです。泣いている人のそばに寄り添うのです。あなたは今、泣いているかもしれません。それは、いつの日か、あなたと同じように悲しんで泣いている人を助けるためです。きっと、あなたは、悲しんで泣いている人の気持ち、その心の痛みを知ることができるでしょう。そして、泣いている人の気持ちや心の痛みが分かって、その人のそばに寄り添うことができるようになるでしょう。

そのためのために、今、あなたはその人よりもちょっと前に、悲しい思いを経験させられているのです。いつかその人を慰めることができるようになるためです。

あなたの悲しみ、苦しみ、涙には、大きな意味があるのです。神様の子どもとして、他の人を慰めるために、あなたは今、涙を流しているのです。

こうして、あなたが後の日に、悲しむ人と共に、泣く人と共に泣けるようになる。そして、そんなあなたを見て、人々があなたの天のお父様のことを知って、「神様ってすごい御方だねえ」と言えるようになる。そのために、すべてのことが用いられるのです。

（芦田高之）

【今週の暗唱聖句】 ヘブライ人への手紙 12章10節

肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。

〈ねらい〉

神さまはわたしたちのことを決して見放さないし、つらいこと、悲しいことをも用いて私たちを導いてくださることを知ること。

〈展開例〉

Q. わたしたちはつい「運が悪い」「運が良い」といった言葉を使ってしまいます。どんなときにそう思いますか？

A. 「運が悪い」→買いもの行ったら、たまたま店が定休日だった。体育の時間にボールが顔に当たった…etc

「運が良い」→おつかいに行ったら、店の人がおまけをしてくれた。勉強しなかったのに、テストでいい点数が取れた…etc

Q. そうですね。もちろん、そういうことも全部が神さまのご計画であるのだけれど、わたしたちはたびたびそのように感じます。

Q. 占いも話題になることが多いかな？ 朝のテレビや、雑誌の星占いがあったり、誕生日や、名前で占ったりすることもあるみたいです。そういう占いで、悪い結果が出てしまったら、どんな気持ち？

A. 気になる、怖くなる、気にしない…etc

Q. ひとそれぞれかもしれないね。実は、大人であつても、占いを気にしたり、占いの結果で喜んだり、落ち込んだりするひとは多くいます。だけど、今日わたしたちが学んだカテキズムでは、占いを気にするべきだというふうに書いてありましたか？

A. いいえ。

Q. どうして、気にする必要がないのだろう？

A. 神さまは、わたしたちを愛してくださっていて、わたしたちのことを守ってくださるから。

Q. その通りです。そのことを、わたしたちがいつも忘れずに、生活ができるといいですね。

だけど、わたしたちはそれを忘れてしまうことが多々あります。みんなが「運が悪いなあ」と思うことが、毎日起こることもあるかもしれません。1日に何回も起こることもあるかもしれません。「運が悪い」どころではなくて、「悲しい」「つらい」ことは、この世界にはたくさんあります。そんなときは、どんな気持ちですか？

A. いやだ、「どうして」と思う、不満……etc

Q. そうだね。1日にいやなことが何回もあったり、ひとから意地悪されたら、そう思います。これは先週のお話とすこしかぶるけど、だけど神さまは、それを用いて、すべていいようにしてくさるのです。ローマの信徒への手紙8章28節には「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ」を、わたしたちは知っています。」とあります。すこし難しい言葉ですが、すべてのことが、益＝よいものとなる、ということです。

そのときは「どうしてこんなことが起こるの」と悲しくなることでも、時が経って「ああ、あのときの悲しいきもちは、今のためだったんだ」と思えることがきっとあります。

なぜなら、神さまは、わたしたち一人一人に御計画を与えてくださっているからです。

〈祈り〉

わたしたちの主、イエスキリストの父なる神さま。御名を賛美します。わたしたちは、悲しいこと、いやなことが続くと、悲しい気持ちになります。神さま、そんなわたしたちを守っていてください。神さまがわたしたちの傍にいてくださることを忘れずに、今週も歩んでいけますように。イエスさまのお名前を通して祈ります。アーメン。

【目標】

神様の導きによって万事は益となるように共に働くことを心に留める。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**① 万事は益となるように共に働く**

ローマの信徒への手紙8章28節にはとても有名な言葉が語られている。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事は益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」

「万事は益となるように共に働く」これをパウロは、「わたしたちは知っています」と語っている。これはパウロの体験的な事実である。私たちは、あとになれば必ず「万事が益となっていた」ということを知れるが、苦難の中にある時などは、それを実感することは難しい。しかしパウロは、そのような苦しみや苦難を認めつつ、また自らも経験しながらも、万事が益となるということは、確実な約束であると断言している。その理由は、28節の前半にあるように、私たちが「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たち」だからである。その内容が29節30節に詳しく書かれている。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになった

のです。」

つまり、神様は私たちを愛して、義として、栄光をお与えになることをもう決めておられる。私たちはその御計画に従って召し出された。私たちのゴールは、罪のない正しさ、義であり、神様に与えられる栄光であると、もう決まっている。その計画に従って召された者たちにとっては、人生でどんなことが起ころうが、それは全て、前にある栄光のゴールに続いていく道、それに着実に近づいていく歩みである。そのように神様が決めておられるのだから、信じる者の人生にとって、それがどんなに苦難を伴っており、自分としては大きな失望を感じていたとしても、信じる者の人生には後退はありえない。私たちの人生の航海が始まる前に、私たちは既に神様の錨につなぎとめられ、ゴールへの海図は、神様の御心の内に用意されている。聖霊なる神は、私たちの内側に宿ってくださり、私たちがその航海図から、決して離れることがないように、助け続けてくださる。私たちは不確かなものに向かって生き、そして死んでいくのではない。私たちは聖霊なる神に担われて、神様が用意してくださっているゴールへの道を、あとからなぞる様に歩む。そして、直後の38節から40節が語るように、その神様との愛の繋がりに、私たちを引き離すものは何もない。

3. 生徒と一緒に考える

→教師自身にとっての、「万事は益となるように共に働く」という御言葉のリアリティーを、自分の経験に基づいて生徒に証する。

Q：疑問は解けましたか？

Q：「万事は益となるように共に働く」この言葉に当てはまるような経験をしたことはありますか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

テキスト	創世記 1章26～28節
教理問答	子どもと親のカテキズム 問17
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問10

問17 神さまはどのように人間をお造りになりましたか。

答 神さまは、ご自分のかたちに似せて、神さまの子どもとして神さまと共に歩むように、また男と女に、人間をお造りになりました。

〈カテキズム解説〉

問17は、ウェストミンスター小教理問答では、問10に呼応する部分です。ウェストミンスターの方では、答えの部分で「神は人を、男性と女性とに、知識と義と聖において御自身のかたちに従って創造し、被造物の支配を託されました」（神原訳）とあります。「子どもと親のカテキズム」問17では、「神さまの子どもとして神さまと共に歩むように……」という言葉が加えられています。

この問答書の一つの大きな特徴は、「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むこと」です。問17でもその点が反映されています。

「神さまは、ご自分のかたちに似せて」とあります。子どもたちにどう説明したらいいでしょうか。「神のかたち」の説明は、このカテキズムを用いるなら、問8の答の前半を用いてください。

問8 聖書が語っているまことの神さまはどのような方ですか。

答 目には見えない霊なる方で、「あなた」と呼んで、お話しできる神さまです。……

私たちの心、あるいは、人格と言ってもいいのですが、それは目で見えるものではありません。手で触れるものでもありません。でも、私たちの心、人格は確実に存在します。この目に見えない私たちの心、私たちの人格。これを霊というのです。そして、この霊の源が神さまです。神さまこそ霊の源です。この霊の源であられる神様と同じように私たちにも、目には見えない心、魂、人格が与えられています。

この、霊、あるいは、心、魂、人格は、目には見えませんが確実に存在します。では、この霊、心、魂、人格は、どんな働きをするのでしょうか。

問8はこう語っています。「……『あなた』と呼んで、お話しできる……」という働き、機能が、霊、心、魂、人格にはあるのです。

神さまは、この「^{かたまり}霊の塊」です。あるいは、「霊の源」です。この「霊の塊」「霊の源」である神さまに似たものとして、人間は造られているのです。それが、問17の言おうとしていることです。

神さまに似た者ということは、「神さまとお話ができる」ということです。神さまとお話ができるということは、神さまのご意志、神さまの御心を知ることができる、ということです。そして、神さまのご意志、御心とは、私たちが、「神さまの子どもとして神さまと共に歩むように」ということです。

このように、私たちが、神さまとのあいだで、「神さまというご人格」と、「私という人格」が、向かい合う。そうして、神さまの私たちに対するご意志を知り、そのご意志に応答して生きることができるようにと、「神さまは、ご自分のかたちに似せて、神さまの子どもとして神さまと共に歩むように……人間をお造りになりました」。

問17では、「神さまは、ご自分のかたちに似せて、神さまの子どもとして神さまと共に歩むように、また男と女に、人間をお造りになりました」とありますように、「男と女に、人間をお造りになりました」。ここは、創世記1章27節をそのまま引用しています。「神は御自分にかたどって人

を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」とあるとおりです。

聖書が書かれた男尊女卑の古代社会において、「男と女に創造された」ということは、とても大胆な主張です。男も女も、神ご自身のかたちに似せて造られた、という点においては、何ら優劣はない、という主張です。

アダムが先に造られ、エバが次に造られた、という創造における順序には違いがあります。アダムは夫として造られ、エバは妻として造られた、という家庭における立場というか、働きの違いがあります。しかし、神に似せて、神にかたどられて創造された、という点においては全く同等。何ら優劣も上下もない。これが聖書の主張であり、このカテキズムもそのことをきっぱりと言い表しています。

《聖書テキストの解説と黙想》

すでに聖書テキストの解説に踏み込んでいますが、もう少し、聖書そのものに当たっていきましょう。創世記1章26節に「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と、神は言われました。昔からこの「我々」という、一人称複数をどのように解釈したらいいのか議論されて来ました。

大きく三つくらいの見解が挙げられます。

第一は、当時の古代社会においては、王様、大王は、自分のことを「我々」と、一人称複数形で名乗った、という見解です。

第二は、新約聖書の光を当てつつ読むと、ここは、一人の神さまが「我々」とご自身のことをおっしゃるのだから、三位一体の神がここで暗示されている、という見解です。

第三は、この「我々」という一人称複数は、熟慮を現わす表現である、という見解です。

第一の見解は、古代の文献によるとかなりの説得力のある見解です。偉大な王、王の中の王であられる唯一の造り主であられる神が、ご自分のことを一人称複数で語られているように、創世記記者が書いた、というのとは有力な見解です。

第二の三位一体をここで暗示しているという見

解は、少々無理があります。旧約聖書のこの段階で、いきなり三位一体を暗示していると理解するには、聖書における「啓示の進展性」から考えると少々無理があります。神さまはご自身の真理を啓示していかれる時、歴史の中で、徐々に真理の深みを啓示していかれます。まず、神が唯一であることを明らかにされる。神の民がそのことを十分理解したなら、次に、更に深い真理を徐々に明らかにされて行く。これが神さまの自己啓示の方法です。この点から考えると、創世記のこの時点で「三位一体」をこの「我々」から読み取ろうとするのは無理があります。

第三は「熟慮の表現」です。神がご自身を「我々」とおっしゃるのは、「神の熟慮」を現わす表現であるという見解です。神は他のものを造られる時、たとえば、光を創造される時、「光あれ」と言って、創造されました。しかし、人間をお造りになる時には、「人よ、あれ」とはおっしゃらなかったのです。「我々」という言葉を使い、ご自身の中で、自問自答される表現をここで使っているのです。私たちも簡単なことを決断する時には、自問自答しません。しかし、難しい判断、決断をするとき、「私自身」のなかで、我と我が自問自答しつつ、最終的決断へと向かいます。ということで、神ともあろうお方が熟慮されるほどまでに、人間創造は、神さまにとって並々ならぬ重要なことだったのです。その神の熟慮をあらわす表現と理解すると、「神はそれほどまでにご自分にかたどった人間をお造りになることを、重要に思われた。また、人間は、男も女も、それほどまでに神にとって尊い存在なのだ」ということが読み取れていくのではないのでしょうか。

第一の見解をも捨てがたい。しかし、第三の見解で読むと、人間がいかに神にとって大事な存在か。神と人格的な交流を持てる人間の存在の計り知れなさを思われます。だから、神に似せて造られた人間同士は、傷つけ合ってはいけない。徹底的に愛し合わなければならない。そんな事をここで私たちは思い巡らすこともできましょう。

(芦田高之)

テキスト

創世記 1章26～28節、詩編8編
子どもと親のカテキズム 問17

【単元のねらい】

人間が神のかたちに似せて、男と女に造られたことの意味深さ。神に似せて造られた人間は、まことに尊い存在に造られているから、互いに傷つけ合ってはならず、愛し合うべきことなどを伝えたい。

神さまに似たもの

【人間とは、なにもの？】

人間とは、一体何ものでしょう？

むかし、神様を信じていた人が、夜空を見ながら、こう告白しました。詩編8編です。

「主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます、幼子、乳飲み子の口によって。……あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは。神に僅かに劣るものとして人を造り、なお、栄光と威光を冠としていただかせ、御手によって造られたものをすべて治めるように、その足もとに置かれました。羊も牛も、野の獣も、空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう」。

この信仰者は、たぶん、家畜の番を夜通ししていたのではないでしょう。満天の星空を見る。夜明けが来るまで、星を眺めつつ、「この数えきれない星と、どこまで続いているか分からない夜空、宇宙をお造りになった神様は、どれほどすごいお方なのだろう」。そう思い巡らしながら、いつも夜空を仰いでいたのでしょう。

「この数えきれないくらいの星を、宇宙をお造りになった御方が、この私たち人間を、特別な存在に造ってくださった。これは一体どういうことなんだろう。いったい、私たち人間はどれほど尊

い存在なのか。だって、神さまに似た者に造られているんだから。神さまにお祈りをし、賛美をささげ、お話ができる者に造られているなんて。いったい人間って、何ものなのだろう。これほど、神さまから大事な存在として造られているなんて……」。

そんな事を思い巡らしながら、この昔の信仰者は、お空を、星を、月を、太陽を眺めていました。

【神のかたち】

神さまはおっしゃいました。「我々に似せて、人間を造ろう！」と。「われわれ」と神様が御自分のことをおっしゃっているのは、よく考え抜いた末に、人間をお造りになったということです。御自分に似た者として、人間を造るのですから、よく考えてお造りになったのです。他の生き物や、星や太陽を造るのとはわけが違います。

神さまは、御自分とお話ができる者として、人間をお造りになりました。大事なご計画を知らせて、一緒に神様と共に神さまがお造りになった世界をお世話させる存在として、神さまは人間をお造りになろうとしたのです。

だから、何度もご自分の中でくりかえされました。「本当にそんな、人間という存在を造ってもいいかなあ。神さまとお話ができ、応答して生きられるような、そんな、神さまに似た者を造って本当にいいかなあ……」と、心の中で、ご自分でご自分に対して、お尋ねになったのです。それが、「われわれ」という表現であらわされています。

私たち人間は、神さまとお話ができるほどまで

に、神さまに似た存在として造られています。これって本当にすごいことですね。神さまが知らせようとしていることは、知ることができる。神さまにお伝えしたいと思うことを、祈りや賛美で、こちらからも伝えることができる。これが、人間という存在のすごさです。

そう考えたら、本当に人間って、すごいですよね。神さまとお話ししたり、神さまに喜ばれることができるように造られているのですから。

【神さまと共に歩む】

どうして、神さまは、私たち人間を、ご自分に似た者として造ってくださったのでしょうか？

それは、私たちが神さまのおっしゃることをよく聞いて、従って生きることができるためです。

お父さん、お母さんのお手伝いをして、楽しいことがありますか？ 私の娘がまだおむつをしている時、その娘に弟が与えられました。お母さんは、まだ赤ちゃんの娘のお世話や、その娘よりももっと赤ちゃんの弟息子のお世話をする事で、毎日、大忙しでした。そんなお母さんの大忙しの姿を、まだおむつのとれていない1歳半くらいの娘がいつも見ていたのです。あるとき、弟のおむつを取り替えようとお母さんが思った時、弟のおむつが少し離れた所にあったのです。まだおむつをしていた1歳半のお姉ちゃんは、やっと歩けるようになったばかりなのに、お母さんを助けたいと思って、いっしょうけんめい、よちよち歩きで走るように急いで、生まれたばかりの弟のおむつを取りに行ったのです。そして、お母さんに、弟のおむつを手渡したのです。とてもうれしそうに。お母さんと一緒に、お母さんが喜ぶことをして生きる。それが、その時の1歳半の娘の喜びだったのです。

神さまと私たちも同じです。神さまが何を喜んでくださるか。そのことを知って、神さまと一緒に歩む。そして神様の手伝いをする。神さまが喜んでくださる。そうすると、私も嬉しくて仕方がない。このように、神さまのお気持ちを理解して、神さまと共に歩いて、神さまと一緒に喜べる。そのために、私たちは、神さまに似た者として造られているのです。

【愛し合って生きる】

神さまのお心を知り、神さまと一緒に喜んで歩む。それが、私たちが人間として造られた目的です。神さまは私たちが何をしたら喜ばれるでしょう。それは、神さまに喜ばれることをいつも考えること。これが第一です。もう一つ大事なことがあります。私たちは、神さまに似せて造られた、人間どうしです。神さまに似た者として造られているから、お互いにとっても大事な存在です。とっても大事な、大切な存在。それが、私であり、あなたであり、あの方、その方なのです。

とっても大切な存在として造られている私たちが、たがいに、相手を大切に大事に思って、生きること。このことを神さまはとても喜んでくださいます。神さまに似た者として造られている大切な存在である、私たち人間が、他の人を傷つけたり、バカにしたり、いじめたりする。これは、神さまがとても悲しまれることです。

神さまに喜ばれること、神さまが悲しまれることが何であるかが、わかる。それが、人間が神のかたちに似せて造られた理由です。

あなたは、神さまと一緒に歩いて、神さまと一緒に喜び合うようにと造られています。だから、他の人を大切に大事に思って、生きてください。そのとき、神さまは私たちと一緒に喜んでくださいます。
(芦田高之)

【今週の暗唱聖句】 詩編8編4,5節

あなたの天を、あなたの指の業をわたしはおおぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。

そのあなたが御心にとめてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。

〈ねらい〉

わたしたち人間は、神さまに似せて、男と女に創造され、神さまに従って歩む者として造られたということを知ること。

〈展開例〉

Q. おはようございます。今日も創世記のお話を読みました。絵本や紙しばいでも、聞いたことがあるお話だったかもしれないね。わたしたちは神さまに造られました。神さまは、わたしたちをどんな風に造ってくださったんだったかな？

A. 神さまのかたちに似せて造られた。

Q. そうだったね。神さまのかたち、って、一体どんなかたちでしょう？ こどもカテキズムの問8を見てみましょう。

A. 神さまは、目には見えない霊なるお方。

Q. そうです。わたしたちは、しっかり目に見えますね。

「おはよう、〇〇ちゃん」「ありがとう、〇〇くん」と、名前を呼んで、顔を見てお話ができます。神さまは目に見えません。お祈りするときは「あなた」と呼びかけたり、「天のお父さま」と呼びかけるけど、目には見えないね。だけど、目に見えなくても確かに存在するもの、というのは案外あります。どんなものがあるかな？

A. 空気、音、声、匂い、神さま、心……etc

Q. たくさんありましたね。神さまは目には見え

ないけど、確かに存在しておられます。神さまには心がありますね。わたしたちが悪いことをすると、神さまは悲しまれます。わたしたちがいいことをすると、神さまは喜んでくださいます。

わたしたちにも心があって、神さまとお祈りを通してお話をするができるんですね。「神さまのかたちに似せて」って、そういうことなんですね。

Q. 神さまは、わたしたちのことを造ってくださいました。神さまは、わたしたちがどんな風に生きていけば、喜んでくださるかな？

A. 礼拝をする、聖書を読む、お祈りをする、ひとに優しくする……etc

Q. 神さまは、わたしたちがそういうことがきちんとできるように、造ってくださいましたね。神さまはわたしたちのことを、ご自分の「こども」だと言ってくれます。神さまに愛されていることを忘れず、神さまのこどもとして、自分のできることを小さなことからでもやってみましょう。

〈祈り〉

わたしたちの主、イエスキリストの父なる神さま。御名を賛美します。わたしたちのことを神さまに似せて造ってくださって、ありがとうございます。神さまのこどもとして、今週1週間も歩んでいけるようにお守りください。イエスさまのお名前を通してお祈りします。アーメン。

【目標】

人間が神のかたちに似せて造られたことの意味を知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方向的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む

①人間だけが、神のかたちにかたどられている存在である

創世記1章の26節から28節には、人間とは何かということについて、大きく二つのことが言われています。それは、人間が、神様のかたちにかたどって造られたということ、そして、人間は、地上の全てを支配する務めを、神様から与えられているということ。

人間だけが、神様にかたどって、神様に似せて造られ。古代、紀元前のイスラエル、ユダヤ人たちは、この神のかたちということについて非常に厳格だった。色々な発掘調査が行われているが、イスラエルからはほかの国々とは違って、神様をあらすような、石像や、銅像が出土しない。この旧約聖書を知るユダヤ人たちは、相当な注意と努力を払って、神様のかたちを、ものに置き換えるということを拒んで来た。神様は、決してどのようなかたちにも限定されてしまうことのない、大きく自由な神様だった。しかし、絶対にモノやかたちに置き換えられてはならないはずの神様が、唯一この世界の中にそのかたちを見せる言葉がある。それがこの御言葉。つまり人間だけが、この地上で神のかたちをあらわにする、ただ一つの被造物である。

②人間のどこが神様に似ているのか

神様と私たちが似ているのは心。神様は、姿形

が私たちに似ていて、日本の手足と五本ずつの指を持っておられるということではなくて、心に同じチャンネルを持っておられる。つまり私の気持ちが神様にも分かり、神様の思いを私たちも知ることができる。愛が分かる。怒りが分かる。悲しみも分かる。正義とは何かということを共有できる。私たちは、何かのモノを造って神様の姿を描き出すことはできないが、神様はこういう方だということを証することはできる。心で、それを認識することができる。歌で、神様を賛美することができる。祈りで、そして礼拝で、神様を表すことができる。神様の御がもつ永遠性、無限性、不変性を除いて、聖書は人間を神と同等の存在として描いている。

③神に似た者とされた人間の使命

神様は、私たちを御自身の生き写しのように創造してくださったからこそ、地上の全てを支配するという使命を与えてくださった。「支配させよう」「支配せよ」という言葉を神様から頂いているのは、人間のみ。神様は御自分と同じ自由さと、心と、センスを持った存在として人間を造ってくださり、地を治めさせるという使命を与えられた。神様はそれだけ人間に期待し、良いものを惜しみなく与え、その能力と決断を信じて、地上における神様の支配を代行し、神様の如く地上をよく支配する権威を委ねてくださった。良い賜物を神様から頂いている私たちは、その素晴らしい、神様からの生き写しのような命と力を生かしながら、この世界を、もっともっと素晴らしい世界へと、神様も喜んでくださるような世界へと、耕し、発展させていく、この命を用いていく。そういう毎日を創造的に歩んでゆくことができる。それが、地を支配するということの midst である。

3. 生徒と一緒に考える

Q：疑問は解けましたか？

Q：これからの一週間をどのように過ごしたいですか？

2015年10～12月カリキュラム (第59号)

—『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第1年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月4日	人間・神と人と共に	問17	ウ小10
		創1:26～28、黙21:3, 4	黙示録21:3, 4
	神の子どもとして神と共に、他者と共に生き、愛し合う幸いを求めよう。		
10月11日	人間の使命	問18	
		マタイ5:43～48	ヨハネー4:7a
	神とその御心を知る事は、人間の使命と目的を知り生きる事。喜んで仕えよう。		
10月18日	人間・罪の起源	問19	ウ小13、ウ大21～23
		創世記3:1～12	ローマ5:19
	神の怒りと悲しみ、憐れみの眼差しの中でアダムと自分の罪を重ね、見つめよう。		
10月25日	罪とは何か	問20	
		ルカ15:11～24	ルカ15:21
	福音の赦しの恵みの中で、みことばを破るすがたを見つめ、救い主をたたえよう。		
11月1日	罪人の悲惨	問21	ウ小19、ハイ7～11
		創世記4:1～16	申命記6:15b
	赦しの光の中でこそ、悲惨を見つめることができる。罪を憎み、光を求めよう。		
11月8日	罪人の歩み	問22	ウ告6:4、ウ小18, 19
		ホセア4:1～3	エフェソ2:3
	罪は具体的な悲惨へと突き進ませる。世界と自分の究極の問題であると知ろう。		
11月15日	わたしの罪 神の怒りと裁き	問23	ウ大24, 25、ウ小14, 18
		サムエル下12:1～15	ローマ3:23
	自分の罪を認められるのは、聖霊の恵み。赦された罪人である事を感謝しよう。		
11月22日	完全な堕落 キリストの贖罪	問24	ローマ7:19
		ルカ22:54～62	子ども82
	自分で自分を救う事は全くできない。キリストの完全な贖いに感謝しよう。		
11月29日 (待降節)	救い主の約束	問25	ウ小20
		マタイ9:9～13	マタイ9:13b
	私たちは御子による選びの中に定められている。父なる神の揺るがぬ愛に賛美。		
12月6日 (待降節)	二性一人格	問26	ウ小22、ハイ16, 17
		ヨハネ1:14～18	ヨハネ1:14
	定められていた救い主イエス。キリストによる世界の救いを知らせ、共に喜ぼう。		
12月13日 (待降節)	キリスト・真の神	問27	ウ小21, 22、ハイ16～18
		ガラテヤ4:4～7	コリー1:19
	真の神でなければ、罪を完全に償い神との交わりを回復し神の子にし得ない。		
12月20日 (降誕祭)	キリストの降誕	(問26)	ハイ15
		ルカ2:1～7	ヨハネー4:14
	降誕物語を通して、地上に来られ、人となられた幼子イエスさまを、賛美しよう。		
12月27日	キリスト・真の人	問28	ウ小22
		ローマ5:1～11	ローマ5:9
	真の人でなければ、人間の身代わりになれない。主イエスの憐れみを感謝しよう。		

2015年度 年間カリキュラム (第57～60号)

—『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル—
(2015年4月～2016年3月)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2015年 第57号	4月5日	復活祭	復活されたキリスト	
	4月12日		神と共に歩む	問1
	4月19日		神の子とされて	問1
	4月26日		神を知る喜びに生きる	問2
	5月3日		神と人に仕えて歩む	問2
	5月10日		イエスさまを信じる	問3
	5月17日		神の子とされた喜び	問3
	5月24日		呼び出されて生きる	問4
	5月31日		派遣されて生きる	問4
	6月7日	聖霊降臨祭	キリストの教会のはじめ	
	6月14日		愛に生きる	問5
	6月21日		祈りに生きる	問5
	6月28日		神の御言葉	問6
第58号	7月5日		人生の光	問6
	7月12日		聖書の内容	問7
	7月19日		人格としての神	問8
	7月26日		神の属性	問8
	8月2日		唯一の神	問9
	8月9日		偶像礼拝の空しさ	問10
	8月16日		三位一体・神の本質	問11
	8月23日		三位一体・神の経綸	問12
	8月30日		父なる神の本質	問13
	9月6日		創造者なる神	問14
	9月13日		摂理の神	問15
	9月20日		父なる神の親心	問16
	9月27日		人間・神のかたち	問17

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第59号	10月4日		人間・神と人と共に	問17
	10月11日		人間の使命	問18
	10月18日		人間・罪の起源	問19
	10月25日		罪とは何か	問20
	11月1日		罪人の悲惨	問21
	11月8日		罪人の歩み	問22
	11月15日		わたしの罪 神の怒りと裁き	問23
	11月22日		完全な墮落 キリストの贖罪	問24
	11月29日	待降節	救い主の約束	問25
	12月6日	待降節	二性一人格	問26
	12月13日	待降節	キリスト・真の神	問27
	12月20日	降誕祭	キリストの降誕	(問26)
	12月27日		キリスト・真の人	問28
2016年 第60号	1月3日	新年	教会と共に歩む一年	(問4)
	1月10日		イエス・キリストとは	問29
	1月17日		キリストの高い状態と低い状態	問30
	1月24日		祭司なるキリスト	問31
	1月31日		預言者なるキリスト	問32
	2月7日		王なるキリスト	問33
	2月14日		聖霊・ただ恵みによって	問34
	2月21日		聖霊・キリストとの交わり	問35
	2月28日		救いとは何か	問36
	3月6日	レント	聖化の歩み	問37
	3月13日	レント	救いの確かさ	問38
	3月20日	受難週	十字架のキリスト	
	3月27日	復活祭	復活のキリスト	

救済史に基づく二年サイクル

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム	バックナンバー
2015年 第57号	4月5日	復活祭	復活されたキリスト		
	4月12日		世界の創造	創世記1:1～2:3	第30, 54号等
	4月19日		人間の創造	創世記2:4～25	第30, 54号等
	4月26日		人間の墮落	創世記3:1～24	第9, 54号等
	5月3日		カインとアベル	創世記4:1～16	第30, 46号等
	5月10日		ノア契約	創世記6:5～9:17	第37号
	5月17日		バベルの塔	創世記11:1～9	第21, 37号等
	5月24日	聖霊降臨祭	キリストの教会のはじめ	使徒2:37～42	
	5月31日		アブラハム契約	創世記11:27～12:7	第38, 55号等
	6月7日		イサク誕生	創世記18:1～15, 21:1～8	第38号等
	6月14日		キリストの名による宣教	使徒3:1～10	第27, 53号等
	6月21日		教会への迫害の始まり	使徒4:1～22	なし
	6月28日		教会の理想的姿と問題	使徒4:32～5:11	第18, 27号
第58号	7月5日		教会組織のはじめ	使徒6:1～7	なし
	7月12日		教会の殉教者のはじめ	使徒6:8～7:60	第12, 27号
	7月19日		エルサレム外への宣教はじめ1	使徒8:1～25	なし
	7月26日		エルサレム外への宣教はじめ2	使徒8:26～40	第7, 12, 29号
	8月2日		パウロの回心	ガラテヤ1:11～24	なし
	8月9日		異邦人への使徒・信仰による義	ガラテヤ2:1～21	なし
	8月16日		天上のキリスト	黙示録1:9～20	第28, 54号
	8月23日		あらゆる国民による賛美	黙示録7:9～17	第32号
	8月30日		新しいエルサレム	黙示録 21:22～22:5	なし
	9月6日		キリストの再臨	黙示録22:6～21	第28号
	9月13日		ハンナの祈り	サムエル上 1:1～20	なし
	9月20日		サムエルエルへの主の語りかけ	サムエル上 3:1～21	第8, 20, 41号
	9月27日		サウル、王とされる	サムエル上 8:1～10:27	第41号

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム	バックナンバー
第59号	10月4日		主に従わなくなるサウル	サムエル上 14:47～15:35	なし
	10月11日		ダビデ、油を注がれる	サムエル上 16:1～13	第42号
	10月18日		ダビデとゴリアト	サムエル上 17:1～58	第25, 42号
	10月25日		ダビデを憎むサウル	サムエル上 18:6～30	なし
	11月1日		サウルを敬うダビデ	サムエル上 24:1～23	なし
	11月8日		ダビデ、神の箱をエルサレムへ運ぶ	サムエル下 6:1～23	なし
	11月15日		ダビデ契約	サムエル下 7:1～17	第42, 56号等
	11月22日		ダビデの罪	サムエル下 11:1～12:24	なし
	11月29日	待降節	救い主の約束	問25	
	12月6日	待降節	子なる神・二性一人格	問26	
	12月13日	待降節	子なる神・真の神	問27	
	12月20日	降誕祭	キリストの降誕	(問26)	
	12月27日				
2016年 第60号	1月3日	新年	教会と共に歩む一年	(問4)	
	1月10日		少年イエス	ルカ2:41～52	第23号
	1月17日		洗礼者ヨハネの証言	ヨハネ1:19～34	第11号
	1月24日		主が誘惑を受ける	ルカ4:1～13	なし
	1月31日		主が来られた目的	ルカ4:16～30	なし
	2月7日		主が病人を癒す	ルカ4:38～41	なし
	2月14日		漁師を弟子にする	ルカ5:1～11	第47号
	2月21日		敵を愛しなさい	ルカ6:27～36	第29号
	2月28日		五千人にパンを与える	ルカ9:10～20	なし
	3月6日	レント	山上の変貌	ルカ9:28～36	なし
	3月13日	レント	主の晩餐	ルカ22:14～23	なし
	3月20日	受難週	十字架のキリスト		
	3月27日	復活祭	復活のキリスト		

子どもと親のカテキズム

神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

『子どもと親のカテキズム』の目指すもの ～「あとがき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円 (税込)

書店での販売価格は540円 (税込) ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円 (税込) です。

申込先 E-mail naoto@yasudafam.com 安田直人

振込先 00130-7-485942 安田直人

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●『子どもと親のカテキズム』にもとづく御言葉の学びが、それぞれの教会学校において豊かに実を結び、主の命の恵みが満ちあふれますように。

(大西良嗣)

●某有名な教案誌に「教師の友」があります。弊誌は、「教師会の友」だと考えています。つまり、個人的な準備のために読まれることは必須ですが、「共に」読まれることをこそ願っています。「？」や「！」があると思います。どうぞ、牧師や校長に質問して下さい。教師会で分かち合ってください。そしてまた、編集部にもぜひ、お分かち下さい！ご批判、ご要望に寄り添いたいと心から願っています。お祈りし賛美を歌う子どもたちの姿に慰めを見いだし、尊いご奉仕を重ねておられる皆さまに、心からのエールをお届けいたします！
Soli Deo Gloria !

(相馬伸郎)

〈あとがき〉

●第58号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●『子どもと親のカテキズム』解説が、今号で終わりました。4回にわたって原稿をお書きくださった牧田吉和教師（山田教会牧師）に感謝いたします。これで全体の骨格が明らかになりました。今年秋には、大会教育委員会として、カテキズム解説を皆様にお届けする予定です。

●「教会学校教師のための神学講座」として、吉田隆先生の「全生活にわたる感謝～『十戒』を生きる」を連載しています。これはかつて成人課の教案として掲載されたものの再掲です。子どもたちのためのみならず、70周年宣言に備えるためにも、また教師会での学びのためにもお用いください。吉田隆先生に感謝いたします。

●「教会学校訪問」を執筆をしてくださった高松教会の皆様へ感謝いたします。

●前号から、『子どもと親のカテキズム』を用いたカテキズムカリキュラムが始まっています。必要な場合は、大会教育委員会を通してくださると、定価540円(税込)のところ、400円(ただし送料別)で、お買い求めいただけます。

問い合わせは、安田直人（田無教会）まで。

E-mail: naoto@yasudafam.com

●長田詠喜教師の「まえがき」にもありますように、救済史カリキュラムの表を、巻末につけてあります。対応する過去の巻がある場合には、指示があります。それぞれの教会学校の状況に合わせて、カテキズムカリキュラムだけではなく、救済史カリキュラムも用いたいとお考えの場合、参考にしていただければ幸いです。

●リジョイス5月号に、弊誌と『子どもと親のカテキズム』の紹介を掲載していただきました。教育機関誌委員会に、感謝いたします。

●今号も、IBUKIの中村未生兄、高橋乃亜兄が表紙デザインのためにご奉仕くださいました。感謝いたします。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部から提供させていただいています。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

●自由募金によって、教案誌をお支えください。
送金先 郵便振替 伊藤治郎
00890-2-148183

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。

教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼ひ』（800円）のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき

長田詠喜（新所沢教会牧師）

巻頭説教

山中雄一郎（東仙台教会協力牧師）

『子どもと親のカテキズムについて』（4）

牧田吉和（山田教会牧師）

講演「改めて考えるカテキズム教育とは？」

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）

教会学校訪問

松田基教（高松教会牧師）

絵本に心を耕されて

望月鈴子（浜松伝道所信徒）

教会学校教師のための神学講座

吉田 隆（神戸改革派神学校校長）

聖書黙想・説教展開例

長田詠喜（新所沢教会牧師）

木下裕也（名古屋教会牧師）

相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）

大西良嗣（滋賀摂理教会牧師）

牧野信成（西神教会牧師）

安田直人（田無教会牧師）

芦田高之（新浦安教会牧師）

分級展開例

小学科上級 坂尾連太郎（南与力町教会牧師）

坂尾亜海（南与力町教会信徒）

中学科 吉岡契典（板宿教会牧師）

イラスト作画

表紙 中村未生（春日井教会信徒・IBUKI）

高橋乃亜（湘南恩寵教会信徒・IBUKI）

本文 岡野美佳（青葉台キリスト教会信徒）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長） 名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会

芦田高之 新浦安教会牧師・大会教育委員会

大西良嗣 滋賀摂理教会牧師・大会教育委員会

長田詠喜 新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会

安田直人 田無教会牧師・大会教育委員会

木下裕也 名古屋教会牧師

辻 幸宏 大垣伝道所協力牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』

2015年7・8・9月号（季刊）

第58号

2014年5月25日発行

発行	日本キリスト改革派教会	中部中会	日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会	中部中会	教会学校教案誌編集部
	名古屋岩の上教会	牧師	相馬伸郎
	〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012		
	Tel/Fax. 052-895-6701		
郵便振替口座	00890-2-148183「伊藤治郎」		
編集・印刷	株式会社あるむ		
頒価	900円（本体価格）		

Reformed Church in Japan
Board of Education

